
まろうど封神記ーみたまのふゆー

鈴鹿美雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まろうどん封神記―みたまのふゆ―

【Nコード】

N5340V

【作者名】

鈴鹿美雪

【あらすじ】

<伝奇ファンタジー>

<紙媒体用に書かれた作品で、1章あたりの分量が多いです。改行・行間の詰まりが気になる方は、縦書きPDF読み推奨>

失踪した親友を捜して、御佐和湖を訪れた槇田沙耶子は、そこで同じく失踪人の手がかりを求めて初冬の湖に潜っていた矢幡那薙を、入水自殺者と間違え救助しようと湖に飛び込む。しかし水温の低さに溺れそうになり、逆に那薙に助けられてしまう。自称普通のサラリーマンと言いながら、どこか人間離れた那薙の雰囲気は怖気づ

きつつも、親友の消息と那薙の尋ね人が無関係でないことを知り、沙耶子は那薙の失踪した知人の搜索を手伝う決心をする。

しかし、那薙が沙耶子に明かしてゆく「人の世」を取り巻く自然界の真相は、沙耶子が慣れ親しんできた日常の世界とは大きく隔たっていた。

2010年8月30日脱稿。全14章。原稿用紙換算363頁

<揺れる表現が苦手な方に警告>震災前に書いた作品で、超自然ファンタジーの性質上、天災の描写が後半にあります。

第一章 槇田沙耶子の決断

槇田沙耶子まきたさやこは地図をもういちど広げて、目的地への距離を確かめた。

御佐和湖みさわこは自殺の名所だ。山奥にあり標高も高く、シーズンオフには人出がまばらになる。水深が日本でも五本の指に入るほど深い。透明度が高く、湖水に射しこむ光が翡翠から藍色に変化するさまはあまりに幻想的で、心の傷ついた人々が癒しを求めて湖を訪れ、何故か入水してしまうという。

登山道が開けて、湖の全貌が見えた。重なる青い山並みを背景に広がるカルデラ湖は、常緑樹の森に囲まれ、太陽光さえも吸い込むラピスラズリの平原を思わせる。沙耶子はここへ来た目的も忘れてうつとりと見とれた。

行楽の季節ならどれだけいいだろうと思われるが、いまや麓ふもとを彩っていた鮮やかな紅葉は過ぎ去り、木枯らし荒れる霜月も過ぎた。クリスマスや年末行事の準備で忙しい人々は、山より街の温もりを求める時季だ。寒々とした湖畔に人影はなかった。

頬を赤く火照らせ、沙耶子は湖岸に沿って歩いた。吐く息は白い。沙耶子はマフラーを鼻まで押し上げて冷たい空気が肺に流れ込むのを防いだ。

一時間近く歩いただろうか。水音を聞いた気がして立ち止まった。静かだった湖面に、同心円の波紋が幾重にも広がっている。魚でも跳ねたのだろうかとなんとなくそちらを見つめたあと、再び歩き始めた。

ばちゃん。

今度ははつきりと大きなものが投げ込まれた音がした。誰かが石を投げて遊んでいるのかと思い、辺りを見回す。

少し沖のほう、大きく広がる波紋の中心に、なにやら浮いている。丸く、黒いもの。

沙耶子とはつさにイルカや鮫の背鰭を連想したが、ここは山奥の淡水湖だ。それに、その丸いものは人の頭のようにだった。

人魚？

その発想に違和感はなかったが、浮いていた頭らしきものが沈んだのを見て、ここが自殺の名所であることを思い出す。声にならない悲鳴を上げそうになった。

助けなくちゃ。

あたりを見回すが、頼れそうな人間はいない。沙耶子は慌てて水際に降りた。靴と靴下を脱いでズボンの裾をまくり上げ、足を水に入れたとたんに気持ちが悪えた。

おそろしく冷たいのだ。かかとまで水に浸しただけなのに、頭がきんきんとし、足に痛みを感じた。

なんでまたこんな冷たい水で死のうなんて！

沙耶子は拳を握って腹を立てる。波紋の中心を見つめて、あれは確かに人の頭だったと、携帯を出して救助を呼ぼうとした。

圏外！

急いで荷物を遊歩道の近くに置き、服を脱ぎ始めた。スポーツインストラクターという職業柄、水難救助の講習は受けていたが、寒い季節に単独で救助するという想定はなかった。

だけど、この水温じゃ一時間で凍死しちゃう。

人が沈んでいった場所から眼をはなせず、沙耶子は決心を固めた。上下の防寒インナーだけになって、一気に膝まで浸かった。

冷たすぎる。

もう歯の根も合わないくらいに震えが始まる。自分が心臓麻痺を起こしそうだ。それでもいま、誰かの命が沈みつつあるのだと思うと、ここで退くわけにはいかない。

「真冬の海で泳いだこともあるんだからっ」

沙耶子は一大決心をしてダイブした。本当の意味で身を切り刻まれるような冷たさに、神経と筋肉が縮み上がった。

透明度の高い湖だが、あまりの冷たさに眼球が水の底を見通すの

を拒み、目蓋が下がる。意志を強く持つてさきほどの人影を追ったものの、見つからない。

肺が苦しくなって息継ぎに水面に上がる。水温より気温のほうがいくらか高かったらしく、寒かったはずの初冬の空気が春の陽だまりのようにまるやかだった。だが、湖面を渡る冷風が濡れた頬に触れたとたんに、たちまち歯の根が合わなくなる。

もう一度潜ってみたが、どうがんばっても水の冷たさを眼球が拒む。ゴーグルがなければ目が開けられない。沙耶子はさらに深く潜って無理やり水底を見渡したあと、後ろ髪ひかれる思いで湖岸へ戻ることにした。

痛っ。

右足が攣った。朝からずっと登山してきて、筋肉が疲れていたのだろうか。人を助けようとして自分が溺れるなんてあまりに無様だ。沙耶子は水の中で足が攣ったからといって、パニックに陥り溺れるほど素人ではない。痛みをこらえて深呼吸、体の力をぬき、とりあえず浮いていることが肝要だ。だが、急いで水から上がらないとあつという間に低体温症になって命を落とすだろう。足の痛みを強いて忘れ、仰向けに浮かびつつ、ゆっくり手を回しながら岸へと水を掻く。

ゆっくりすぎて、湖岸に達するまでに体温が下がりきってしまいそうだ。見上げた冬の青さに、涙がこぼれそうになった。こむらがえりで痛いはずのふくらはぎは何も感じなくなっていた。指先もひどく鈍く感じる。

あたりはとても静かだった。耳が麻痺してきたのだろうか。

体温は、落ち始めたらしい。

自分はなんて馬鹿なんだろうと思うと、さらに涙があふれてきた。視界がぼやけて、まだ自分の手が水を掻いているかどうかもわからなくなる。

ああ、見つかったら自殺者だと思われるんだろうな。だけど、下着姿で自殺ってどうよ。

意識が薄れていく。

間近で水の跳ねるのを感じた。胸の下辺りを誰かに抱えられて、ぐいぐい体をひっぱられる。救助隊が間に合ったのかと、喜びの波が沙耶子の胸に溢れた。

もうひとり先客がいて、随分と前に沈んでしまったんですけど、助けてあげてくださいと言おうとして沙耶子は眼を薄く開いた。

霞む視界から認識したかぎりでは、黒い服を着た黒髪の男性が沙耶子を横抱えにして泳いでいた。水深の浅いところになると、沙耶子を抱き上げて波打ち際へ歩き出す。

意識が朦朧としていたが、水から出たとたんに重力に体を支配されるのを感じた。自分の体はずしりと重く、沙耶子は救助者に申し訳なく思った。学生のころから各種のスポーツで鍛えてきた沙耶子の体重は、見た目よりも重い。

男性に抱き上げられるのはこれが人生初体験なのだが、好ましい状況ではなかった。

救助者は日当たりのいい砂利の上に沙耶子をおろした。沙耶子の鼻の下に頬を寄せて、呼吸があるのか確認している。

私、呼吸しているのかな。

朦朧としている頭で考えている沙耶子の耳に、その男性が低い声でなにか呟くのが聞こえた。なにを囁かれたのだろう思っていると、その人物は沙耶子の顔に覆いかぶさって人工呼吸を始めた。

沙耶子は内心で慌てた。意識はあるのだから、心臓も呼吸も止まっ
つてないはずだ。

慌てているうちに、気道を開けられて注ぎ込まれた熱い呼吸が、肺を一気に活性化させた。いや、胃の腑の奥まで熱い湯を注ぎこまれたようだ。

ひゅうつ、とおかしな音を立てて、息を吸いこんだ沙耶子は咳き込んだ。水は吐かなかった。

「意識はありますね。水も飲んでないようですし」

落ち着いた深い声だ。沙耶子がぼんやりと見上げたその細面の輪

郭の中、心配そうに見おろす目。その瞳の色が尋常ではない。沙耶子は口を開いた。

「日本人？」

思いのほかはつきりした沙耶子の言葉に、救助してくれた男性は安堵の笑みを浮かべた。そして右手で自分の眼を指した。すくいあげた前髪から水が滴っている。

「これですか」

沙耶子はうなずいた。男性は微笑を絶やさずに問いかける。

「何色に見えますか」

「明るい灰色、というか、銀色？　　というかもつと……」

言い終わらないうちに、ふわっと浮き上がるような感触と、何かいきなり白い靄、あるいは蒸気に包まれた気がした。少しして、それまでぼうつとしていた視界がどんどんはつきりとしてきた。末端の感覚が甦る。この回復の早さに驚いて手を上げようとしたが、上がらない。灰色の眼の男性が、掌を合わせるように沙耶子の手を握っていたのだ。その握り方が指を絡めたいわゆる　　。

恋人にぎりつ。

かっ　と胸と頬と首筋が熱くなった。そういえば、砂利の上におろされてから感じていた、掌から流れ込む熱い奔流。同時に、下着に近い姿で見知らぬ男性の胸に抱かれている現状にパニックに陥る。

「あのっ、あのっ」

握り合った手をふり上げて、放してくれるように眼で頼む。灰色の瞳の男は微笑んだだけだ。

「もう少し。まだ体温が上がりきってません。それとも、水から引き上げて迷惑でしたか」

「いえっ。そんなことは。それより、もうひとり、誰かが、湖に沈んで行ったんです。私は、その人を助けようとして」

息を切らしながら主張する沙耶子に、男性は首を傾げてから湖を見渡した。

「ぼくがここに来てからは、誰も湖に入った人はいません。思い違

いではありませんか」

「いえ、確かに見たんです。頭がぼこって、潜っていくのが」

灰色の瞳に、笑みが浮かぶ。

「もしかしたら、それはぼくだったかもしれませんが。ずっと潜ってましたから」

「はあ」

沙耶子は素っ頓狂な声を上げた。この季節に、自殺以外で冷たい湖に潜るような理由がどこにあるというのか。気を取り直した沙耶子がよく見ると、確かに男はウェットスーツを着ていた。かれは沙耶子の肩を抱いていたほうの手を上げて、沙耶子の唇に触れた。

何を大胆なことを、と沙耶子は身を引こうとした。沙耶子の唇で体温を確認したかれは、ずっと背筋を伸ばした。

「もう大丈夫です。あそこにあるのが」

男は沙耶子の荷物と服の塊を見やった。

「あなたの服ですね。立ち上がれますか」

沙耶子の体は強張っていた。凍死寸前だったのだから、無理もない。ふらふらする沙耶子を、男が支えた。

「あ、ありがとうございます。あの、私、槇田……沙耶子です」

「ぼくは矢幡那^{やはた}雑^{なち}です」

好感度の高い名乗りに、沙耶子は思わず微笑を返した。

「矢幡さん、どうして潜っていたんですか？　ここ、自殺の名所なんですよ。間違えるじゃないですか」

「だから人^{ひと}気のない季節に潜っていたんです。人騒^{ひとさわ}がせになりたくなくて」

セーターを持ち上げ、袖を通そうとして沙耶子は思いとどまった。濡れた防寒インナーを脱がなくてはと思いいたり、手をやると下着は乾いている。そんなに長い時間、砂利の浜にいたのだろうか。時間の感覚が狂ってしまったのか。頭に手をやってみると、髪も乾いている。見上げた那雑の髪もウェットスーツも水に入ったことなどなかったかのように乾いていた。沙耶子は眼をぱちくりとさせる。

「ではぼくも着替えてきます」

沙耶子の返事を待たずに、矢幡那薙は森の中へと消えた。その後ろ姿を眼で追い、セーターに袖を通そうとした姿勢のまま、沙耶子は呟いた。

「なんというか、衝撃的な出逢い。っていうより、思いつきり拳動不審な人」

沙耶子に独り言に応えるのは、師走の風に揺れる頭上の梢だけだった。

沙耶子は那薙が森から出てくるのを待つことにした。やはり体はまだ思うように動かなかったことと、那薙の不審な行動の理由を突き止めたかったからだ。もしかしたら、沙耶子がここに来た目的と関係があるかもしれない。

那薙はジーンズとトレーナー、パーカーという軽装で、ウェットスーツが納まっていると思われるバックパックを背負って出てきた。遊歩道の側でうずくまっていた沙耶子に、少し驚いたようだ。先に帰ったと思っていたのだろう。

「具合はどうですか」

「落ち着きました」

「それは良かった。麓まで歩けますか。この季節はバスも二時間おきで、場合によっては歩いたほうが早い」

「毎年この季節に潜りにこられるわけですか」

沙耶子の問いに、那薙は声を出して笑った。笑いながら、ポケットから眼鏡をだしてかけた。臙脂色の、つるの太いセンスのない眼鏡である。レンズも緑がかった薄茶色で、陽光の中ではさらに色が濃くなる。ますます拳動不審だ。

そして、眼鏡を持つ手には薄手の茶色の手袋をしていた。初冬の湖に潜るのは平気なのに、案外寒がりなのだなと沙耶子は思った。

「いえ、今年が初めてです。先々週から週末になると来て潜っていました」

「何でまたこの季節に」

「行方の知れなくなつた知人が……の手がかりがあるという話だったので」

那薙が途中で言葉を変えたのがさらに不審だった。

「水の底に？ 知り合いの方が自……あの、ここで？」

思わず自殺と言いかけて、沙耶子は言葉を濁した。

「自殺とは違います。まだ生きています。ただ、行方がわからないので、彼女が湖に残したらしい手がかりを探してくれと頼まれているのです」

沙耶子は歩調をゆるめ、まじまじと那薙の横顔を見上げた。身長高めの沙耶子が見上げる程度の目線に、怪しい眼鏡がある。

ああそうか、この眼鏡は瞳の色を隠すためなのだろう、と沙耶子は思った。それにしてもフレームにセンスがない。細めの切れ長の眼と卵形の和風顔は、ひな飾りの内裏雛を思い出させる。過不足なくおさまった鼻筋の、あまりインパクトのない顔立ちだ。唯一印象深い眼の形と瞳の色を、不細工な眼鏡で隠してしまうのはとても残念な気がした。

おおぶりの容貌がコンプレックスの沙耶子としては、なおさら残念だ。体つきは沙耶子がぶつかったらよろけそうなほどの細身だが、あの冷たい水の中を潜ったあと、溺れかけていた沙耶子を救出してしまう体力がある。

「水死体じゃなかったら、何を探しているんですか」

ほつと息をついた沙耶子の問いに、那薙は首を傾げて返答に困った。それ以上聞き出すのはぶしつけであることに気がついた沙耶子は視線を落とした。

「すみません。なんか詮索しすぎですね。つい」

「まあ、ぼくのしていたことは普通じゃないですよ。まして溺れかけたんですから気になるのは理解できます。ただ、これ以上は話せません。依頼者のプライベートにかかわることなので」

「依頼者？ 矢幡さんで、探偵さんですか」

「いえ、本業はSEです」

「コンピュータ関係の湖調査」

沙耶子は混乱してきた。

「いえ、こちらは別件です。言うなれば、ボランティアですね。ぼくには珍しい特技があるので、妙な相談をもちかけられることがたまにあるのです」

「特技って冬の湖にダイブすること？」

「まあ、それも特技のひとつです」

那薙はどこか照れたような笑いを浮かべた。それ以上は話さない。やんわりと答えを逸らされはしたが、沙耶子は肌着姿でお姫様だっこをされたり、手を握り合ったりしたせいだろう。開き直りのような親近感を覚えていた。

「槇田さんこそ、ひとりで湖まで登ってきたのですか」

那薙の口調と表情が真剣みを帯びる。こんな深山に女一人でくるのはどうかという響きがこもっていた。那薙を質問攻めしていた沙耶子は、鉛をすんと胸に落とされたように、口が重くなった。だが、那薙が三週間前からここに通っていると言っていたのを思い出して、話をしてみようと決意する。

「ええ。私も、人を探しに。友だちが先月、失踪してしまったんです。彼女の寮の荷物を整理していたら、スケジュール帳から御佐和湖のパンフレットが出てきたのでもしかしたらと思って。那薙さんはここで女性のひとり旅を見かけませんでしたか」

沙耶子はバックパックのなかから手帳を取り出し、写真を見せた。黒髪セミロングの、丸顔で愛嬌に溢れた二十代前半の女性がこちらを向いて笑っている。美人と言って差し支えない。並んで肩を組んで笑っているのは沙耶子だ。那薙はじっと見つめたあと、首をふった。

「いえ、見かけませんでした」

「矢幡さんは……」

沙耶子は口ごもる。

「どうぞ」

那薙が先を促した。

「その、見つけたりするんですか。水の底で」

「水死者ですか？ いえ、自殺者が出るとすぐに地元の消防隊が来て捜索を始めますからね。地元の警察や青年団が、定期的に湖畔や森をパトロールしているという話です。不審な荷物が置き去りにされてないかとか、ね」

「でも、ひっそりと入水する人もいるんじゃないかな」

「楨田さんは、そのお友だちが身投げしたと思うのですか」

「そうでないことを祈っています」

沙耶子は溜め息混じりにそう応えた。

「自殺するほどの悩みに、心当たりが？」

「ないからなおさら気になるんですよ。結納がすんだばかりで、本当なら年明けに結婚式を挙げるはずだったんですから」

那薙の声音は低くてゆったりしているせいか、気がつくとうわわるようにぺらぺら喋っている自分の口に、沙耶子は驚かされる。

山道を一時間も歩いたあと、町道に出た。二人はどちらからともなく立ち止まった。登山口バス停の時刻表を見た那薙は安堵の笑みを浮かべた。

「ぼくたちは運がいいです。十分後に一台来ます」

沙耶子は安心した。いくらタフな沙耶子でも、とても麓まで歩けるとは思えなかった。

バス停の横のベンチに腰かけた那薙は、もういちど写真を見せてくれますかと丁寧^{ていねい}に訊ねた。沙耶子は写真を差し出す。

「この方の名前は」

^{えんどう なつこ}
「遠藤奈津子」

那薙は眼の高さに写真を掲げて、眼鏡を額に上げた。眼が細くなる。

あれ、矢幡さんの目が……。

灰色の瞳が白みを帯びた。湖畔で見たのは幻だと思っていた白銀

色の瞳。銀よりも淡く、艶がある。どう表現したらいいのかわからない色だった。

この人、人間なのかな。

そんな疑問がよぎった。そういえば、初めて見かけたときは人魚だと思ったのだ。

那薙は眼鏡を元どおりにかけて、奈津子の写真を沙耶子に返した。「搜索願いは出ているんですか」

「ええ、ここに来た可能性も、パンフレットを見つけたときに警察に話しておいたんですけど。この街のどこかに宿泊した形跡もないそうなんです。でも気になって。だって、結婚まぎわの女だったら、新婚旅行のパンフレットとか持っていそうなものじゃないですか。実際、会社ではブーケットとか、オーストラリアの観光パックのサイトを印刷したのを見せてくれてたんです」

バスが着き、ふたりは乗り込んだ。街に戻ったところには夕方になっていた。駅のターミナルに降りた沙耶子の腹がぐううつと鳴った。那薙は笑いをかみ殺しながら、すまなさそうに言った。

「食事にお誘いするのが礼儀というものなんでしょうが、これから特急と新幹線を乗り継いでも、家に着くのが夜中になってしまうんですよ。明日からまた仕事ですし。申し訳ないのですが、ここで失礼します」

「いえ、とんでもないです。こちらこそ、命を救ってもらった上に相談にまで乗ってもらって」

恐縮する沙耶子に、那薙はふわりと柔らかな笑みを浮かべた。

「遠藤奈津子さんのことは、心に留めておきます。見かけたら、連絡します」

連絡先を訊かれた沙耶子は、慌てて自分の名刺を差し出した。那薙も懐から出した名刺と交換する。那薙の名刺には、岐阜市に住所を置くソフトウェア開発らしき会社名と、SEという職業、プロジェクトマネージャーというよくわからない役職が記されていた。

人魚だとか人外だとか思ってしまったことを、沙耶子は心の中で

謝った。

「やはた……」

「『なち』と読むのです。槇田さんは埼玉ですか。では、ここでお別れですね」

言いながら、那薙は眼鏡を外した。眼鏡を持ってないほうの手が、沙耶子の顎に触れた。否応なしに那薙の白銀の瞳に惹きつけられる。
「さやかさん」

沙耶子の耳の奥で那薙の声が反響した。

「ここでばくに会ったことはことは、誰にも口外しないでください」
沙耶子はゆっくりとうなずいた。

駅のホームに立ち、矢幡那薙は沙耶子の乗った関東方面行きの特急が発車するのを見送った。岐阜方面の特急が到着するのは、まだ半時も先だ。那薙は売店で買ったサンドイッチと缶コーヒーを持って、ホームのベンチに腰をかけた。

サンドイッチの包装をはがすために、手袋を外す。左手の甲は肌が引き攣れ、薄いピンクや一部は薄茶に変色していた。それは手首へと続き、袖の奥へと消えていた。古い火傷の痕だ。いつもよりも赤みが強いような気がする。と那薙は思った。あの槇田沙耶子の体温を上げるために、左手から奇御霊くしみたまの陽気を多く流し入れたせいだろう。

左手を握ったり開いたりしている那薙の耳元で、ばさばさと風を叩く音がした。隣の椅子の背もたれに、大きめのカラスが舞い降りた。那薙は驚きもせず、そちらを横目に見て、サンドイッチを食べ始める。

控えめなカア、カアという鳴き声に、那薙は根負けしてサンドイッチから引つ張り出したハムを与えた。カラスは嬉しそうに啄ばみ、飲み込む。

「今週も何も見つからなかったと、八郎さんに伝えてください」
カラスはカア、と失望気味の鳴き声を漏らす。

「まだ始めたばかりですから、そんなにすぐに結果は出ません。ほく^{かすみ}にだって生活というものがあるんです。肉体と戸籍のあるものは、霞^{かすみ}を食べて生きてはいけませんからね。八郎さんと違って、何時間も水の中に潜つてもいられませんし」

カア、と控えめな抗議。

「ああでも、収穫らしきものはありましたよ。遠藤奈津子は呼ばれたのに違いない。湖の底より、湖に関連した自殺者名簿と失踪者名簿を調べるほうが効果的かもしれません。依り代が人間だった、という可能性もありますからね。警察からどれだけ情報を引き出せるかわかりませんが、いざとなったらデーターベースに侵入しますから。違法だからほんとうはやりたくないんですけどね。八郎さんにはそう伝えてください」

カア、と浮き立つような語尾上がりの鳴き声。

那薙はもう一切れハムを引っ張り出すと、カラスに与えた。

「これで秋田まで飛べますか」

カラスは犬の遠吠えに似た鳴き声を上げて、バサツと翼をひとはたきすると、すでに宙空を舞っていた。

「ぼくは、どうも失せ人探しが板についてきたようですね」

対面のホームで電車待ちをしていた客が、カラスと会話しながら餌をやるという那薙の奇矯な行動を、口を開けて見ていた。

那薙は、鞆から雑誌を引っ張り出して顔の前に立て、読み始めた。

第二章 矢幡那薙の事情

その日も残業で、九時前の帰宅は不可能と思われた。年末が目前なのだから無理もない。矢幡那薙は十一月末に七日間の有休をとった上に、年始休暇中の保守のローテーションから外してもらったのだから、年内の仕事はどうしても片付けてしまう必要があった。

年内は出向先での直出直帰勤務が続いたおかげで、本社の忘年会出席の催促攻めに合わなくてすむのが救いだ。それでも携帯とPCのメール着信音は鳴りつづけで、今年の忘年会にはひとつも顔を出してない那薙のつれなさを責める恨み言で埋まっていた。

「おれ、もう帰るけど」

同僚の作田修作が遠慮がちに声をかけてきた。

「ぼくはもう少しやって行きますから、先に帰ってください。金曜日に休みをとったんで、その分も明日までに終わらせなくてはなりませんから」

那薙はモニターから眼をはなさずに、キーボードを叩き続けた。

「今週も忘年会、出ないのか。金曜日のは部内のだから、出たほうがいいんじゃないかな」

作田はやはり遠慮がちだ。誰に対しても丁寧な態度を崩さない那薙ではあるが、それだけに機嫌を損ねると妙な威圧感を発揮する。

那薙は作田に顔を向けた。

「親戚関係がたてこんでいて、週末はまったく体があかないんです。このところ土日もぼくにとっては休みじゃないんで」

「一次会だけでも？」

「今週は木曜の夜から行かないといけないので欠席です。部長に事情は話してありますから、作田さんも他の人にそう言うておいてください」

作田は諦めたように溜め息をついて、鞆を小脇に抱えた。だが、思い直して鞆をデスクの上に置き、コーヒーを入れて那薙のキーボ

―ドの横に置いた。

「ありがとう」

那薙は礼を言った。眼鏡をとってうつむき、目蓋をこする。そして眼鏡をかけなおしてマグカップを持ち上げた。

「あまり根を詰めるなよ。過労死なんかしたくないだろう」

心のこもった同僚の忠告に、那薙は薄笑いを返した。過労死しても、こちらの仕事の勤務時間が週六十時間を越えることはない上に、有休はきちんと消化している。過労死認定は受けないだろう。

那薙の疲れの原因である、もうひとつの『仕事』のほうが問題なのだが、誰にも相談できることではなかった。

作田が退社し、フロアが無人になったのを見計らって、那薙は携帯を取り出した。槇田沙耶子の名刺を取り出して電話をかける。二回目のコールで沙耶子が出た。

「槇田です」

「矢幡那薙です。御佐和湖でお会いした。覚えておられますか」

「あ、矢幡さん、先日は、どうもありがとうございました」

沙耶子の声は何故か裏返る。ばたばたと背後で音がした。迷惑だと思われるかもしれないが、那薙はどうしても確認したいことがあったのだ。単刀直入に用件に入る。

「御佐和湖の自殺者について、こちらでも調べてみたんです」

「あ、はい、そうですね」

声の低くなった沙耶子の相槌に、緊張が伝わってきた。

「いま都合が悪ければあとからかけなおしますが、どうしても遠藤奈津子さんについて確認したいことがあったので」

「あ、いまでいいです。自分の部屋でひとりですから。なんでも訊いてください」

「二十年前まで遡って記録を調べました。自殺者はみな妙齢の女性なんです。これだけでも不自然だと思われるのですが、さらに」

那薙は息を継ぐために言葉を切った。

「全員、妊娠していたのです」

沙耶子の息を呑む音が聞こえた。那薙は言葉を続ける。

「別の記録も追ってみたんですが、御佐和湖が自殺の名所として知られるようになったのは、戦後からなんです。それまでは秘境として世間あまり知られてなかったこともあります」

沙耶子が沈黙しているので、那薙は不安になって「聞いてますかと念を押した。

「はい、ちよつと、びっくりして」

「でしょうね。訊きにくいことではあるのですが、遠藤奈津子さんが妊娠していた、という可能性はないでしょうか」

「あ、どうなのかな。婚約していたんだから、フライングしていたとしても別におかしくはないと思いますけど」

「確証はないんですね。失踪直前に撮った写真があれば助かるんですが」

「あります。でも失踪するまで体型が変わったとかは感じませんでしたけど……」

「いえ、手元にあつたら調査のときに人に訊きやすいと思っただけです」

那薙は苦笑した。確かに普通の人間には、写真を見ただけで妊娠を判断できるはずがない。しかも那薙は遠藤奈津子を直接には知らない。

「妊娠の兆候はありませんでしたか」

「そういえば、食欲がなくて元気なかったです。マリッジブルーかなって、ふざけていた程度でしたけど」

「そうですか」

収穫なし、と那薙は通話を切り上げようとした。遅い時刻に電話をかけるのを遠慮して残業の途中に連絡をとったが、あまり時間をとってはいられない。このままでは十時まで残業になりそうだ。それに、腹も減ってきた。

「那薙さんは」

慌てたように沙耶子の声が受話器から流れてきた。

「今週も御佐和湖に行かれるんですか」

「その予定です」

「じゃ、奈津子の写真を持っていきましょうか」

写真一枚を配達するには大変な距離だ。それにあまり一般人を巻き込みたくはないと那薙は考えた。

「デジタルのデータが残っていれば、ぼくのメールアドレスにファイル添付で送ってもらえばいいです」

「あ、そうですね」

沙耶子の声のトーンが落ちる。

「今夜中にやります。名刺のメールアドレスでいいですよね」

「そうしてください。何かあったら、連絡します」

「お願いします」

通話を終えた沙耶子は、ひどく汗をかいていた。御佐和湖で話したときは、穏和で親しみやすい空気を漂わせていた那薙が、電話ではそっけなく、冷淡ですらあった。

沙耶子の一部では、これ以上かかわりあいにならないほうがいい、と警告する声がある。人間ばなれした那薙の瞳だけでない。

この数日、週末にあったことを誰かに話そうとしても、言葉が喉に詰まって話せなくなるのだ。那薙の名前や御佐和湖のことを言うとする、忘れる。何を話していたのかわからなくなり、ぼうつと考え込んで友人や同僚に不審な顔をされてしまう。

まるで、そこだけ数分ほど巻き戻したように、話そうとした内容すら覚えていない。別れ際に駅で口止めされたときも、あの眼は灰色というよりは、白い眩しさを放っていた。

なんだろう。妖怪とか。まさかね。サラリーマンで妖怪とか。いや、超能力者とかかな。なんかの秘密結社とか。だいたい、いくらウェットスーツ着てても、あんな冷たい水の中を何時間も潜れるものじゃないわ。そういえば、ゴーグルもダイビングマスクもしてなかったし。

沙耶子は、ホラーサスペンス小説の読みすぎだろうかとかぶりをふった。財布から那薙の名刺を出して眺める。

気になるのは、すごく気になるけど。それに、奈津子。妊娠していたのかしら。もしそうだったらきつと報告してくれていたはず。ああでも、そういうはいなくなる前には随分と落ち込んでいたし。

沙耶子は奈津子の婚約者に会ってみようと思った。妊娠のことと、御佐和湖のこと。どう切り出したものかわからないが、何か発見したら那薙に連絡したほうがいいと思う。もし本当に妊娠していたとしたら、奈津子が御佐和湖を目指していたことは決定事項のように思われた。

喉の渴きを感じ、沙耶子は台所へ水を飲みに行った。居間から、同僚かつ同居人でもある美香が声をかけてきた。テレビから流れるバラエティ番組の笑い声に、日常に引き戻される。

「何よ、携帯かかってきたと思ったら、急に部屋に駆け込んで。彼氏できたの？」

「ち、違うわよ」

慌てて否定した。

「まあ、いいわ。うまくいったらそのうち紹介してね」

「奈津子の部屋に入るね。最近の写真が必要なんだけど、カメラのメモリカードに何か残ってるかな」

「まだ奈津子の行方を追ってるの？」

「うん。やっぱり気になって」

テレビから視線を外して、美香は沙耶子に同情の眼差しを向けた。「週末に奈津子の両親が荷物を取りにくるから、共有のものがあつたらちゃんと話し合って引き取るのよ」

「わかった」

沙耶子は胸の奥がずんと重くなった。会社が寮として借り上げている3LDKのマンションから、奈津子がいなくなってもう四週間が経ってしまった。会社としては待ってくれたほうだ。

「来週から新しい子が入ってくるんだっけ」

「スイミングの啓子ちゃんよ。家が遠くて通勤が大変だったから、運がいいよね」

「そうね。ねえ、美香」

「なに」

「奈津子、妊娠していたのかな」

美香は目を丸くひらいてテレビから沙耶子に視線を移した。同時に、無意識の癖なのか親指の爪を噛み始めた。

「わたしもそうじゃないかなとは思ってたけど。沙耶子にも何も話してなかったの」

沙耶子は言葉に詰まった。気の合った沙耶子と奈津子から一步引いてた美香が感じていたのに、沙耶子はまったく気づかなかった。黙り込んでしまった沙耶子に、美香は慰めるように言った。

「悪阻^{つわり}とかはなかったみたいだね。体調も崩しがちだったし、精神的にも不安定で」

「太田さんは、知ってたのかな」

奈津子の婚約者を思い浮かべる。人懐っこい笑顔が印象的な営業マンだ。何度かこのマンションで一緒に食事をしたこともある。

「どうなんだろう。土曜日に奈津子さんの親御さんと荷物の引き取りに来るんじゃないかな。そのとき訊いてみたら。訊いたからってどうにもならないと思うけど。知らなかったとしたら傷を舐めるだけじゃない」

「うん」

沙耶子は奈津子の部屋に入ってノートパソコンを立ち上げ、パスワードを入れた。自分のPCを持たない沙耶子に、奈津子はいつも自分のパソコンを快く使わせてくれたのだ。今月の接続料は自分が持ちますと奈津子の両親に申し出なくちゃな、と沙耶子は思った。

カメラを拾い上げ、メモリカードを出して立ち上げたPCに挿し入れる。失踪直前の写真が保存されていたのを見つけて、自分の携帯に転送した。それから奈津子のいた部屋を見回す。ほとんどのも

のはダンボールの箱に納められて、立ち退きのときを待っている。

用を済ませて終了させるのも心残りで、これまでは遠慮していて開かなかった奈津子のフォルダや履歴をさらってみる。搜索願いが出されたときに警察にいちど調べられたのだが、沙耶子と共有のパソコンであったことから奈津子関係のデータだけコピーをとり、戻された。

これのお金もご両親に払わなくちゃ、と沙耶子は考えた。半分は沙耶子が使っていたために、沙耶子のファイルやアカウントを整理するのに膨大な時間がかかりそうだった。買い取らせてもらったほうが沙耶子としては助かる。

そうだ、矢幡さんなら、このパソコンから奈津子の足取りを探せるかもしれない。いくつかパスワードでしか開けないファイルやお気に入りのサイトとかあるし。警察からは何も言ってこなかったけど、御佐和湖の謎を調べている矢幡さんなら、何か気がつくことがあるかもしれない。

沙耶子は、土曜日に奈津子の両親に会ったら、このパソコンの買取りを申し出ようと心に決めた。

矢幡那薙が自宅のアパートに帰りついたのは、夜も十時を回っていた。疲れた足を引きずるようにして階段に足をかけた那薙は、踊り場に小さな人影を見つけた。大声にならないように、声をかける。「菅瀬さん。また夜中に徘徊しているんですか。この寒いのに、こんな時間までうろろろするものじゃありませんよ。通り魔に襲われる危険だってあるんですから」

七十から八十代くらいの老人がひとり、踊り場の影からぬつと顔をだした。

「膺がついているから、大丈夫じゃよ」

年に似合わぬ、明快な声が当の老人の口から流れ出る。那薙は白い息を長く吐いて、老人をたしなめた。

「菅公かんこうでしたか。あまり年寄りをこき使うものじゃありません。こ

んな時間に菅瀬さんに憑いて連れ出すなんて」

「こんな時間でない、むらくも 叢雲どのの顔を見ることはできんからの」

老人は皺だらけの頬に、さらに皺を寄せてにつこりと笑い、那薙の顔を見上げた。

「とにかく上がってください。冷えたでしょう」

「熱燗をひとつ頼む」

那薙は再び嘆息した。階段を上がり、扉を開けて明かりをつけ、菅瀬老人を部屋に招き入れる。台所のヒーターを入れただけで、ダイニングの椅子を老人に勧めた。

LDKのアパートは殺風景だった。台所はこのところ使われた形跡はなく、ゴミ箱にはビールの空き缶や、空のコンビ二弁当、インスタント食品の使用済み容器が詰め込まれていた。部屋の隅にはうつすらと埃が積もっている。

「荒んだ生活をしているのう」

老人が眼を細めて感想を述べた。

「ええ、おかげさまで」

那薙の返答には力がこもっていた。流しの横から取り上げた一升瓶から、日本酒を二本の徳利に注ぎ込み、電子レンジで温める。食器棚から出したふたつのぐい呑みをテーブルに並べ、裂きイカを火で炙って二人の間に置いた。

「マヨネーズはないのか」

老人の要求に、那薙は眉間に皺を寄せた。

「買いい物に行く時間もないんですよ。醤油じゃだめですか」

熱燗をそれぞれのぐい呑みに注いで、那薙は椅子に座った。老人はぐいつと飲み干すと頬を引き締めた。深い皺に埋もれた目に鋭い光が宿る。

「それで、辰子たつこどのの行方はわかったのか」

「さっぱりです」

二人は申し合わせたように深い溜め息をついた。

「今週末も行くのだろう」

「ええ。とにかく手がかりを掴まないことには。しかし、本当にイルセヌシはクニマスを見たんでしょうか。白子のニジマスと勘違いしたんじゃないですか」

「仮にもヌシを名乗るものが、証拠もなく発言はせぬじゃろう」

那薙は二杯目の熱燗を飲み干して、髪をかき回した。

「直接、ミサワヌシに訊けたら一番なんですがね」

「ミサワヌシは神議かむはかりに來ぬ、まつろわぬ神じゃからの。触らぬ神に祟りなし、というじゃろう」

那薙の瞳が白さを増して老人をぐつと睨んだ。

「ぼくが触れてしまう危険性は考慮されないわけですね」

「むしろ、祟り神同士で気が合うかも知れぬゆえ」

老人はほうほうと笑いながら応えた。笑い終わらぬうちに「ああ、そうじゃ」と言いながら、懷からなにやら重そうな小袋を出してテーブルの上に置く。

「今週の経費じゃ。これで間に合うかの」

那薙は苦いものを飲み込んだような顔で袋を持ち上げ、テーブルの上に開いた。じゃらじゃらとあらゆる小銭が転がり出し、数枚の千円札がひらりと落ちた。

「十円玉や百円玉を積み上げて電車代やホテル代を払うのがどれだけ不自然か、理解してもらえませんか」

「五百円玉もあるぞ」

那薙は前髪を掻き毟って溜め息をついた。

「まあまあ、落ち着け。万札を持って出たら、社務所が不審に思うであろう。烏やネズミに少しずつ集めさせるこちらの苦勞も察してくれるかの」

「祭神のくせに賽銭泥棒もどうかと思いますかね」

那薙は、ネズミに齧られたためか角の削れた千円札を見て、何十回目かの溜め息をついた。

「では叢雲どのが負担してくれるか」

「冗談じゃありません。ただでさえ薄給なのに」

「では受け取つたらよい。足りなければ出先の土地神に申しつけてもよいのだから」

老人の提案に、ぱつと那薙の表情が変わる。

「そういえば、御佐和湖周囲の山津神に^{やまつかみ}着族を動かして欲しいんです」

「何かわかったのか」

「辰子さんと関係があるかどうか分からないんですが、御佐和湖が入水自殺で有名なのはご存知ですよ」

「という話ではあるな」

「ですが、御佐和湖が入水自殺で知られるようになったのは戦後のことなんです」

老人は眼を細めて口をもごもごさせた。

「辰子どのの失踪時期と重なるということか」

那薙はぐい呑みの上に身を乗り出した。必要もないのに、声を低める。

「調べたところ、どれも妊娠した若い女性ばかりなんです」

「それは面妖じゃな」

老人は腕を組み、真剣な表情で那薙の話を反芻する。

「なんだかんだと、手がかりを掴んでおるではないか。さすが叢雲どの」

那薙は老人の追従を無視して続けた。

「それで、ごく最近、もしかしたら御佐和湖を目指して失踪したかもしれない女性がいるのです。遠藤奈津子という名で」

そこで思い出したように那薙は携帯を取り出し、帰宅途中に沙耶子から受信した奈津子の写真を画面に呼び出して老人に見せた。老人は食い入るように画面を見つめた。

「ひとつの体^{みたま}にふたつの御霊。妊娠しておるな」

老人は重々しく断言した。

「偶然ではないでしょう。御佐和湖周辺の山の着族に、ひと月前に彼女を見たものがないか、調べてさせて欲しいのです」

「小さめの写真を何枚か印刷してくれるか。明日一番にうちの社^{やしろ}のヤタガラスどもにもたせて御佐和へ飛ばしておこう」

「お願いします」

那薙は立ち上がり、居間のPCを立ち上げて携帯から転送した写真を印刷した。それぞれを小さく切り、一枚づつくるくると丸めて封筒に納めた。那薙は封筒を老人に手渡しながら、考え深げに意見を述べる。

「クニマスが御佐和湖で甦り、それがここ半世紀ばかりの自殺者と関連があるとしたら、ミサワヌシが辰子さんの失踪に関与していることは疑いがありません。いずれはミサワヌシに接触する必要があるでしょう」

「そうじゃな」

老人はするめをもにとしゃぶりながら、視線をさまよわせつつ相槌をうった。

「誰を遣わすのが妥当ですか。八郎さんでは修羅場になるだけだと思いますが」

「まあ、叢雲どのに納めていただくより他にないのではないか」

那薙は苦虫を噛み潰した顔になる。

「夫婦喧嘩は犬も喰いません。ましてぼくは他人の三角関係に首を突っ込む趣味ありませんよ」

老人は両手を上げて那薙の両腕を握った。肩に手をやろうとしたのだが、身長差に挫折したのだ。

「まあ、まあ。辰子どのの搜索だけが目的でないことはわかっておるう」

「ミサワヌシをまつろわせることでしょう。ぼくには荷が重過ぎます。ぼく自身、いまもってまろうどなのですから」

「神議に出席した時点で我らと同輩じゃ。いつまでもアウトサイダーを気取るものではない」

「ぼくは草薙に会いにいっただけです。こんな仕事を押し付けられるとわかっていたら……」

那薙は首を横にふつてこめかみを押さえた。

「ぼくは人間ですから。あまりこき使われると過労で死んでしまいます。ましてミサワヌシの本体は……ぼくはナマモノとは相性があまりよくないんです。菅公」

那薙は情けない声で訴えた。老人は眉の両端を下げて、微笑する。「まあ、叢雲どのの後見として最善は尽くすゆえ。そうじゃな。次はクラチとミズチを連れて行ったほうがよいかもしれぬ」

老人は居間のほうに視線を向けた。つられて那薙も居間へと目を向ける。居間のひとつの壁を覆うように、大きな四つの水槽が並んでいた。中に水はなく、水槽の半分以上を土と枯れ葉、おが屑が埋め尽くしていた。枯葉の上には枯れ枝が渡してあるが、中には動くものの気配はない。

「冬眠してますから、彼らは役には立ちません。いくらミズチでもあんな冷たい水に入ったら気を失ってしまいます」

「酒を飲ませて息吹を吹き込んでやれば一時間はもつじやろう。とにかく連れて行くことじゃ」

「カチとフウチが拗ねてしまいますね」

那薙は肩を竦めた。

「冬眠中のことじゃ。黙っていればわかるまい」

「彼らの間に隠し事はありません」

それでも、那薙は菅公の忠告を無視するつもりはなかった。

問題は、どうやって二メートルの青大将、それもとても国産のナミヘビ科には見えない蛇を二匹も連れて、二泊三日の片道三時間の電車旅行に連れて行くかということだった。

那薙は深夜に近いという理由で、菅瀬老人を家まで送った。独り暮らしの老人のアパートは冷え切っていた。暖房をつけ、床を延べる。ふり向くと、菅瀬老人は台所に立ってぼつと那薙のすることを眺めていた。

「菅瀬さん、布団をしいておきましたよ。もう遅くなりましたから、

着替えて寝ましょう」

「え、ああ。いつも申し訳ありませんねえ。矢幡さんでしたねえ。申し訳ありません」

老人は繰り返して「すいません」と言いながら、那薙の言うとおり、にパジャマに着替え、入れ歯を洗浄液に浸けた。布団に入った菅瀬老人に、感謝のまなこで見上げられて、那薙は少しばかり罪悪感を覚える。

それでも菅瀬老人の家を辞して、自宅へと深夜の冷気を吸い込みながら歩いているうちに、那薙は上向きな気持ちになっていた。

菅公なりに那薙の立場を気遣って手を尽くしてはいる。それがわからないわけではない。那薙がいくら悪態をついても鷹揚に構えて話を聴いている我慢強さは、尊敬に値した。霊格だけで言えば那薙のほうが二倍は上なのだが、那薙の肉体年齢と、菅公が好んで依り代にする菅瀬老人との見かけのせい、かつ、どうも那薙のほうが子供じみた振る舞いになってしまう。

冬の冷気を肺いっぱい吸い込む。鼻が冷たく濡れたように痛かった。

携帯の着信音が鳴った。ポケットから取り出してメールを開いてみると沙耶子からだった。奈津子のノートパソコンを調べたら何かわかるだろうかという問いに、那薙は考え込んだ。

遠藤奈津子が辰子に喚よばれたのは確実と思える。今週末に辰子の消息がわからなければ、奈津子の足取りを追うのが賢明な策だと思われた。土曜の夜に御佐和湖の近くのホテルで落ち合うことに同意するメールを送って、那薙は携帯を閉じた。

冬の星座の瞬く空を見上げる。

「年内に解決できたら、初詣には草薙に逢いに行けますからね」

刃物のように空にかかる半月。月にかざした手に、触れた何かをからみとるように、那薙はその指先でくると螺旋模様を描いた。

第二章 矢幡那薙の事情（後書き）

この原稿を書き終えたときには、まだサカナくんはクニマスを発見されてませんでした。

絶滅が信じられていたのに、まさかネタにして書いて半年後に生存が確認されるとは……愕然としました。

第三章 遠藤奈津子の足跡

土曜日の夕刻。那薙が指定したホテルの駐車場は、淡い黄昏色に染まっていた。

沙耶子はおそろおそろホテルのロビーに足を踏み入れた。那薙に会うのは正直なところ、とても怖い。時間が過ぎるほどに、那薙の得体のしれなさが沙耶子の心を不安にする。しかも、奈津子のノートパソコンを持ってくるために、沙耶子はある失敗を犯してしまった。

那薙は怒るだろうか、と心配で唾を飲み込むのも難しい。

沙耶子はおずおずとロビーを見回した。ガラス越しの庭園に面してコの字型に並べられたソファで、那薙は五人の客と談笑していた。ソファの肘掛に左腕を預けて頬杖をつき、琥珀の液体と氷の入った切り子細工のグラスを右手に揺らしている。沙耶子が近づこうとしたそのとき、誰かが面白いことを言ったらしく、那薙は上体を曲げて笑い出した。沙耶子は遠慮がちに那薙の視界に移動する。顔を上げた那薙が沙耶子に気づき、会釈した。するとそこにいた那薙の談笑相手がいつせいにふり返って沙耶子を見つめた。

沙耶子は十二の瞳に射すくめられ、足から根が生えたように動けなくなつた。

那薙と五人の客は立ち上がり、ひとりひとり那薙と握手をして立ち去り始めた。沙耶子は五人の顔をよく見ようとしたが、彼らが通り過ぎるとその特徴も服装も思い出すことができなかった。ひとり熟女の雰囲気を書わせた中年の女性、他の四人は中年から老境の男性たちであつただけが、おぼろげに記憶に残つた。

全員がホテルから出て行くのを見送つてから、那薙は沙耶子に歩み寄つた。あの似合わない眼鏡はかけていない。沙耶子に向けられた那薙の瞳はおちついた灰色だ。

人間の目がそうそう銀色に光るわけがないと沙耶子は思ひなおし、

あれは溺死しかけた自分の幻覚だったのだろうと納得した。

沙耶子の勤めるスポーツクラブの会員には、在日外国人もいる。青い目の白人は、光の具合で瞳の色の濃淡が変化するのも知っていた。那薙はきつと白人種との、ハーフとかクォーターとかいった血統なのだろう。顔立ちそのものは、どの角度から見ても純和風ではあるが。

那薙は沙耶子の背後に立つ人影に気づき、眉根を寄せた。

「あ、あの。奈津子の婚約者の太田和正さんです」

「ぼくのことを話したんですか」

抑揚のない、単調な言い方。日本昔話の『人に話したらおまえさまの命はない』という雪女との約束を破った男の運命を思い出して、沙耶子は喉がからからになった。雪女と契った男は子供たちがいたので殺されずにすんだが、沙耶子には何もない。奈津子のパソコンは命綱になるのだろうか。

「いえ、那薙さんのことは話してません。ただ、このパソコンを見てもうために持ち出したいって話ただけです。そしたら、太田さんも同席したいって」

沙耶子は自分の声が震えているような気がして落ち着かない。那薙の切れ長の目が細くなつて、沙耶子が胸に抱えているパソコンと太田を見比べた。そういえば、子供のころは薄暗いところで見る雛人形の顔は怖かった、と沙耶子は那薙の顔を見上げながら脈絡もなと思うた。

「婚約者なら、確かに気になりますね」

意外に穏やかな声が那薙の唇から流れた。緊張で頬をひくひくさせていた太田が、そっと息を吐いた。那薙の持つ威圧感というか、雪女を連想させる非人間的なものを太田も感じていたようだ。

「矢幡那薙といいます。岐阜でSEをしています」

那薙が太田に右手を差し出し、握手を求めた。

「太田和正です。角井デパート本社の営業をしています。岐阜でSEをされている矢幡さんが、なぜ東北まで来て奈津子のパソコンを

？」

もつともな質問である。那薙は柔和な微笑を浮かべた。

「実は、ぼくも別件で失踪した知人の足跡を追っているのです。槇田さんとはその縁で知り合いました。知人の失踪した状況が奈津子さんの状況と似ていることから、手がかりがつかめるかと思い、協力をお願いしたのです」

そうだったつけ、と沙耶子は首を傾げた。助けられたときに話したことを、ぼんやりとしか思い出せない。

「槇田君があなたの名前を言わないので、奈津子がなにか胡散臭いことに巻き込まれたかと……」

「ぼくの知人の事情を明るみに出せないので、槇田さんに口止めしておいたのです」

「そうですか」

那薙は太田を観察した。二十代半ばの好男子で、びしつとまつすぐに濃い眉毛と、高い頬骨が意志の強さを示していた。大きな二重まぶたの眼が女性にもてそうではあったが、いまはひどく憔悴して精彩を欠いていた。那薙の裸眼に映るものは太田の容姿だけではない。太田の発散するオーラもまた生気が弱く、彼を取り巻く守護霊も背後霊も、やる気のないスライムと化して腰から下の位置にわだかまっている。これでは太田の営業成績もあまり期待できないと那薙は思った。

おそらくはメインの守護霊と思われる、淡い紫のスライム体を睨みつけてみる。半透明の霊体は那薙の凝視に脅えたのか、表面に青白いさざ波を走らせ、ゾウリムシの蠕動にも似た揺らめきを見せて太田の背後に隠れようとした。

那薙は太田の顔に視線を戻した。

「とりあえず、座りませんか」

右手を伸ばしてソファを示す。今にも雪の散らつきそうな庭園を望みつつ、グラスを下げに来たウェ이터に、那薙はダブルのオンザロックをおかわりした。

沙耶子はおそろおそろ那薙に話しかけた。

「お酒、強いんですね」

「太田さんと、槇田さんも何か飲みますか。それとも、食事がまだとか」

「那薙さんはもう食事は終わってたんですか」

「ええ、さっきの人たちと」

先ほどの怖さが嘘のように、にこやかに那薙は応じる。太田も沙耶子も戸惑いつつソファに腰かけた。ウェ이터にふたり分のピザと飲み物を頼み、那薙に向き直った太田は遠慮がちに質問した。

「さっきの人たちは……」

「関係者、というか。協力者です。御佐和湖について戦中まで遡った記録をお願いした方や、御佐和湖周辺の森を探索してもらった人たちの代表です」

太田が身を乗り出した。

「何かわかりましたか」

那薙は眼を細めてロックグラスを口に運んだ。琥珀の夢の中で、かきわりの氷がカラリと音を立てる。

「少なくとも明日どこに行けばいいのかわかりました」

「ご一緒してもいいですか」

太田を制して口を挟んだのは沙耶子だ。

「まずは、そちらのノートパソコンを調べさせてもらってからです。奈津子さんが御佐和湖の自殺者たちと無関係だったら、槇田さんたちには無駄足ですから」

那薙の差し出した手に、沙耶子はパソコンを乗せた。沙耶子は那薙の右横に移動して奈津子のパスワードを入れた。那薙は非常な速さでファイルをひととおり確認する。胸のポケットからUSBを取り出して、パソコンのドライブに挿し込んだ。グラスに手を伸ばしては琥珀色の液体を口に含む。

沙耶子も太田も黙って那薙の作業を見ていた。レストランに注文しておいたピザとサラダがコーヒートーブルの上に置かれたが、誰

も手を出そうとはしない。

いつしか陽はとつぷりと暮れていた。庭園の樹木にはクリスマス
の電飾が施され、七色のライトに彩られた噴水の美しさを堪能する
ために、窓際の席は照明が落としてある。きらきらと色の移り変わ
る庭の照明やパソコンのモニターの明かりが、那薙の能面のように
無表情な顔を青白く照らした。

カタカタとキーボードを叩く音が、師走の客に賑わうホテルの口
ビーに溶け込んでゆく。ときおり手を休めては、開いたファイルを
読む灰色の瞳が左から右へと動いた。

画面からいちども眼を離さない、瞬きさえしてないようにも見え
る那薙に話しかける勇氣もなく、太田がピザを口に運んだ。焼酎の
炭酸割りで脂肪分の高い夕食を流し込む。沙耶子も手持ち無沙汰に
指をこね回すのをやめて、ウーロン茶を片手にピザを食べ始めた。

那薙は再びポケットに手を入れ、モバイルの接続端子をパソコン
に挿し込み、ネットに繋げた。

二時間は経過したところだろうか。泊りがけの忘年会が多いのか、
宴会場の並ぶ二階への階段から垂れ流されていた喧騒が、佳境へと
差しかかっていた。

那薙が手を止めた。パソコンをコーヒートーブルの上に置き、す
っかり氷が解けて水っぽくなったスコッチウイスキーを喉に流し込
んだ。そして指先で閉じたまぶたをぐりぐりと揉んだ。

沙耶子はおずおずと声をかけた。

「なにか、わかりましたか」

「遠藤奈津子さんは、確かに御佐和湖へ来ています。四週間前に」
那薙はパソコンの画面が二人から見えるように動かした。なんと
いうことのないTAPUKOPUという名の個人ブログ画面が映っ
ている。

「会員制のブログですね。関連したジャンルの別のブログにリンク
していて、興味を持った人だけが、会員パスワードを申請して招か
れる」

「なんのブログですか」

掠れた声で太田が訊ねる。那薙は太田の目をまっすぐに見つめた。
「奈津子さんが妊娠しておられたことは、ご存知ですか」

太田が唾を飲み込んだ。沙耶子は驚いて口に両手を手を当てる。

「このブログは、望まない妊娠をした女性たちの相談所です。医療面でなく、精神的な救いを求める女性たちに、水子供養のしかたやお寺を紹介しています」

那薙は十一月下旬の記事を二人に示した。

『HN:natsu。妊娠してしまいました。もうすぐ結婚式なんです。彼の子供じゃないんです……』

子供を堕ろすべきか、何も言わずに結婚してしまうべきか、苦しみ相談している文面を、太田も沙耶子も息を殺して読み終えた。そのコメント回答には、プライベートで相談に乗りますのでメールを送ってくださいとあった。

「でも、それが奈津子かどうか。第一、そんなメールなんか残っていないじゃないですか」

どうやって奈津子のIDやパスワードまで探し出したのか、那薙は奈津子が隠していたメールボックスを開いて二人に見せた。

そこには奈津子が『タプコ』という女性と交わした、胎児の処理についてのやりとりが詳細に記載されていた。

結婚を決めた奈津子は、それまでつきあっていた不倫相手と最後の夜を過ごして六週間後、妊娠を自覚した。婚約者が長期出張中のことでもあり、計算が合わないのは明白だった。早産と偽ることもできるが、彼と不義の子を育てていく勇氣もない。でも中絶はしたくない。結婚は諦めたくない。

『タプコ』は優しく奈津子を慰め、何度もメールをやりとりした。

『とりあえず、空気と景色のいいところでお話をしませんか。心が和みます。身元を明かさない養子縁組の紹介もしていますので、よかったですこちらにおいでください。タプコ』

「ぼくが探しているのは、この人物です」

那薙はタブコの返信メールを指して言った。

「このパソコン、今夜、一晚貸してもらえますか。タブコの居場所を割り出せるかもしれません」

婚約者の真実を知って青ざめ、唇をかすかに震わせて声も出せない太田に代わって、沙耶子が言葉を返す。

「そんなこと、できるんですか」

那薙は唇の端を上げて眼を細めた。妙に凄みのある笑いだ。近づいてきたウェイターにさらにダブルスコッチを注文し、つまみのピスタチオの殻をむいて口に放りこんだ。

「その、タブコという人のところに、奈津子はいるんですね」

太田が震える声を絞り出した。

「それはわかりませんが、タブコに会ったことは確かです」

那薙は落ち着いた声で、だが単調に返答した。たったいま恋人の不実を知らされた太田への配慮にいささか欠けるのではないかと沙耶子は思った。思いつつ、那薙のグラスを空けるスピードが加速していることも気になる。

普通なら酔っ払っていても不思議ではない量だと思うのに、顔も耳も赤くならず、口調もしっかりしている。目つきも座っていない。これからまだパソコンをいじって正体不明のブログ主を探して見せようというのだから呆れた酒豪だ。

太田は二杯目の酎ハイを飲み干し、ウェイターに那薙と同じものを頼んだ。沙耶子としては、太田が飲まずにいられないのはわかる。親友に置き去りにされたショックに立ち直れそうにないのは沙耶子も同じだが、太田の心境を思うと冷静にならざるを得ない。

「そのタブコさんの居場所がわかったら、明日は湖に潜る必要はないんですね」

沙耶子の質問に、那薙は少し考えてから応えた。

「さあ、どうでしょうか。結局は潜らなくてはならないかもしれません」

「今日も潜ったんですか」

高速で山を越えたときに、雪がちらついていたのを思い出して、沙耶子は身震いをした。一週間で随分と気温が下がった。

「今日は午前中は警察と図書館を回って過去の自殺者について調べ、午後は湖に潜ってました。タブコさんの居場所とは別に、どうしても見つけなくてはならないものがありますから」

沙耶子は姿勢を正して那薙の眼を見つめた。

「私も、ダイビングの道具をもってきたんです。探し物、水死体じゃないっていうんなら、お手伝いしましょうか」

那薙はぎょつとして体を起こす。那薙が慌てるのを初めて見た沙耶子は、何故か溜飲が下がるのを感じた。ゆるみそうになる頬を引き締める。

「水温が低すぎます。無理ですよ」

「アイスダイブ用のドライスーツと、アクアラングを会社から借りてきました。私、ダイビングインストラクターの資格もあるんです。装備さえ万全なら冷水でも平気です。ドキュメント番組の撮影で、冬の海に潜ったこともあるんですから。照明係りで」

那薙が灰色の眼を白黒させるのが、沙耶子には痛快だった。

「アクアラングは駄目です」

「え？ どうしてですか」

無邪気に訊き返す沙耶子から眼を逸らして、那薙は口を押さえた。「いえ。とにかく、このパソコンを部屋に持って上がっていいでしょうか」

「ええ、かまいません」

沙耶子はちらつと太田に目配せをしたが、太田は自分の世界に浸って泥酔してしまっている。下手に声をかけるとばっちりを食らいそうだった。沙耶子は那薙に視線を戻した。

「朝は何時に集まりますか」

「七時に。明日のスケジュールは、今夜のタブコ探しの結果で決めます」

那薙はノートパソコンを小脇に抱えて立ち上がり、軽く頭を下げ

た。

「おやすみなさい、槇田さん、太田さん」

「おやすみなさい、矢幡さん」

エレベーターで五階に上がった那薙は、カードキーを差し込んで扉を開けた。ノブにかけておいた「Don't Disturb」の札はそのままに部屋に入った。

万が一のために、誰も入ってこれないようにしておかないと、部屋に生き物を持ち込んだことがばれてしまう。われながら危ない橋を渡っているものだとな薙は肩をすくめた。扉が開いたと同時に、明かりが自動でともる。暖房を高めに設定していた部屋の中はむっとするほど暖かった。

那薙はパソコンを机の上に置き、部屋を見渡した。

「クラチ、ミズチ。どこに隠れてるんですか。まさか隙間を見つけて遊びに出たりしてないでしょうね。見つかったら大騒ぎですよ」

ツインベッドのひとつの毛布が妙な形に盛り上がっているのを見た那薙は、毛布を引っ張り上げた。そこには青地に碧の紋様の流れる、長さ二メートル、太さは子供の腕ほどもある美しい蛇がとぐろを巻いていた。

居場所を暴かれてもたげた鎌首は、牙を剥いているにもかかわらず、あくびをしているようにも見える。立ち上げた尾を左右にふるさまは、ガラガラヘビなどに見られる威嚇行為というよりは、むしろ犬が喜びに尻尾をふるところを連想させた。

「クラチはどこですか」

青い蛇はもたげた頭を上下に動かして、もうひとつのベッドに首を伸ばし舌を出して見せた。那薙はそのベッドの毛布を上げてみたが、何もいない。膝についてベッドの下を覗いてみる。

シャーっという音をたてて、細長い影が那薙に飛びかかった。薄茶と濃茶のまだら状の地模様、黒の斑点を散らした蛇は、ベッドの上の青蛇と同じ大きさだ。那薙はよけもせず、肩に飛び乗ってきた

茶蛇を抱え上げる。

「かくれんぼだの、いないいないばあなんてやっている年頃ですか君たちは」

那薙は平然と呟きながら茶蛇を青蛇の横に置いた。青蛇のミズチはとぐろを巻いたまま鎌首を上げてゆらゆらさせ、茶蛇のクラチはのんびんだらりとベッドの端から端まで伸びている。

スーツケースから、吟醸酒の小瓶と杯を二つ、サイドテーブルの上に並べた。二匹の蛇の頭が期待に上下に揺れる。那薙はそれぞれの杯を日本酒で満たした。

「どっちからいきましようか。大人しく待っていたミズチが先だと思えますが」

青蛇が嬉しそうに首を伸ばした。

那薙は杯をひとつ取り上げ口元に掲げた。深く息を吸い込む。ほとんど声にならない低い言霊が、豊かな抑揚を持って那薙の唇から流れ出した。

「くらかみのかみ、くらみつはのかみ、くにのみくまりのかみ。いわさくのかみ、ねさくのかみ……」

言霊を吹き込んでいるうちに、那薙の瞳は玉鋼の輝きを帯び始める。液体の表面に、那薙の吐く息だけでないさざなみが揺れた。詠唱を終えたあと、那薙は杯の日本酒に息を吹きかけた。酒はゆらりと揺れたが、溢れはしなかった。

スポイトを取り出し、言霊を封じた日本酒を吸上げた那薙は、待ちきれずに首を伸ばしているミズチの口に垂らしてやった。すべて飲み干した青蛇は、ふたたびとぐろを巻いて満足そうに目を閉じる。茶蛇のクラチはいつのまにかベッドを下りて床を這い、那薙の膝まで上がってきていた。

那薙はクラチに微笑みかけ、もうひとつの杯を口元へと持ち上げた。

「くにのさづちのかみ、くにのさぎりのかみ、くにのくらどのかみ、おおどわくのめがみ……くらやまつみの……はやまつの……」

地の底から湧きあがる、低く深い那薙の詠唱にうつとりと聞き惚れてでもいるように、クラチは抑揚にあわせて首を揺らした。

その詠唱はいつまでも余韻が空気の中に漂っているようで、小さなホテルのツインルームは厳かな言霊に満たされた。

ミズチに与えたのと同じ方法でクラチに日本酒を飲ませたあと、那薙は残った冷酒を自分で飲み始めた。並んで眠るクラチとミズチを眺めながら、菅公がこの二匹を連れて行けといった理由について考える。

場所が湖ということで、水精属性であるミズチが役に立つである理由は推測できる。だが、土精属性であるクラチの出番があるのだろうか。確かに湖は山に囲まれていて、山津神との交感媒体にはもってこいだが。

そこまで考えて、那薙の憶測はあまり嬉しくない方向へ進んだ。クラチに授ける言霊には黄泉津神よもつかみの名を含む。誰かが死ぬことを示唆しているのだろうか。

太田や沙耶子を思い出し、那薙は眉根を寄せて首を横にふった。あるいは自殺した女性たちの御霊を鎮めるために、クラチの力が必要なかもしれない。

那薙はデスクに向って奈津子のノートパソコンを立ち上げた。

沙耶子たちを待つまでもなく、奈津子が御佐和湖を訪れていたことは、周辺の山津神の眷族たちに調べさせたところすぐにわかった。だが、その後の消息はまったくわからない。奈津子が山を降りるのを見た眷族はいない。手がかりがそこで途絶えてしまった以上、このパソコンはありがたい情報源であった。

タブコは辰子なのだろうか。辰子がどうやってネット利用環境を手に入れたのかわからないが、なかなかハイテクを使いこなすではないか、と感嘆する。八郎が置き去りにされた理由がなんとなく見えてしまうと、那薙は薄笑いを浮かべた。プロバイダから得た情報によれば、この近辺であることは確実だ。ハッキングよりネットに直接入り込んでタブコの端末を探し当てるほうが時間の節約になる。

いつもまにか側に来て肩越しに顔を出し、モニターを眺めているらしいミズチの頭を撫でてやる。

「ちよつと出かけてきますから、体のほうを面倒みてくれますか」
ミズチは困ったように頭を左右にゆらゆらさせた。

「すぐもどります。ウェブの網は一瞬で移動できますから、人間の無意識界や神霊たちの万象次元界を移動するよりも楽なんですよ」
ミズチは仕方なさそうに頭を上下に揺らす。

那薙は携帯を取り出し、パソコンにつなげた。右手で携帯を手に取り、左手で内ポケットから鞘に収まった小刀を取り出す。

日本刀の原料である玉鋼を鍛えた鋭利な小刀だ。左手に小刀の刃を乗せ、深呼吸をした。

「ほのいかづち」

小刀から青白い静電気がきらめき、金属に吸い込まれた。小刀に吸収された微電流是那薙の掌から体内へと走りぬけた。胸が熱くなる。奥底からこみあげてくる靈気を電子化させ、受話器に向けて吹き込んだ。

世界中に幾重にも張り巡らされた、青白く光る蜘蛛の巣。那薙はそこから、糸のひとつをたどって世界の反対側に行き、タブコが発信しているサイトへと一瞬にしてたどりいた。

タブコのサイトにアクセスする無数の手触りと、かれの意識と無意識を貫き流れ続ける膨大なマトリクスの中から、タブコの管理画面が稼働中であることを知り、その端末へと飛んだ。

タブコがネットに接続していたのはまったくの幸運だった。すぐにその端末に入り込んで情報を得る。所有者の名前、住所、連絡先、職業。そのたもろもろ。だが、那薙は他人の個人情報に興味はない。知りたいのはタブコの正体と居場所だ。

ネットがひとつの広大緻密な磁界であることに気づき、叢雲の御霊の一部を電子に変換することでネットに侵入し、散策が自在にできるようになったのはつい最近のことだ。思わぬところで特技が役に立つものだとな薙は自分に感心してしまう。だが同時に、ウェブ

の網の中で息を潜めているのが自分だけでないことも感じてしまうので、人の集合無意識界や神霊の万象次元界を行き来するのと同じくらい気が張る。どうかするとセキュリティプログラムにウィルスと間違えられて捕縛されそうになるので要注意だ。

タブコのすぐ近くまで来たものの、電子化した霊体のままではCPUの外には出られないことに思い当たった。仕方なく媒体をくまなく走査して実在のタブコ、相沢篤子のひとりについて学んだ後、そこで叩き込まれる情報や流れ込むチャット、メールのやりとりを監視するが、内容そのものは御佐和湖とはあまり関係がない。しばらくそこに潜んでいるうちに、パソコン使用者が辰子ではないという確信のほうが強くなってきた。

おそらく、タブコを名乗る人間、菅公にとっての菅瀬老人のように、気が向いたときにだけ辰子に使われる依り代なのだろう。

ということは、この周辺に辰子の本体が依り代があると思われる。御佐和湖では彼女の気配を感じなかったことから、辰子は湖から離れたところにいると推測する。そこまで考えて那薙は引き揚げることにした。

ホテルの一室に戻ると、ミズチがパソコンの横に置物のようにとぐるを巻いて那薙を見つめていた。那薙が眼を開けると、おかえりとでも言うように頭を上下に動かした。

「ただいま帰りました」

那薙は立ち上がって大きく伸びをした。

「さて、もう寝ますか。明日も早いですから」

バスルームで歯を磨き、シャワーを浴びる。

「辰子、相沢篤子、遠藤奈津子……」

熱めの湯でアルコールを追い出しながら、那薙はゆっくりとつばやいた。

「そうか、依り代か」

バスルームから出て、髪も乾かさずにベッドに倒れこんだ那薙は、朝まで夢も見ずに眠った。

第四章 太田和正の憂鬱

カフェテラスの朝食buffetで、那薙が四つ目のクロワッサンを手にとったところへ、沙耶子が姿を現した。那薙は眼を細めてこちらへ近づいてくる沙耶子を眺めた。昨夜の太田と違い、沙耶子の放つオーラは輝く真珠色だ。それに薄紅色のグラデーションがかかっている。背後に立つ同じく真珠色の人影は、那薙の視線を感知して小さく頭を下げた。溺れていた沙耶子を助けるために、水底を探索していた那薙の注意を喚起したのはこの守護霊であった。

朝の挨拶を交わし、沙耶子は那薙の正面に腰かけた。那薙のほうに先に口を開く。

「太田さんはまだおやすみですか」

「部屋の戸をノックしてみましたけど、反応ありませんでした。二日酔いで起きれないかもしれません。かなりシヨックだったようで昨夜はかなり遅くまでつきあわされました。もう少ししたら携帯をかけてみます」

「普通の失恋でもこの時期はこたえますからね。まして太田さんの状況は……」

思慮深げにコーヒークップを受け皿にもどす那薙の沈んだ表情に、この時期に失恋したことでもあるのですかと訊いてみたくなる。が、それは余計な詮索と沙耶子はどうか踏みとどまった。

「あの、タプコさんの所在はわかったんですか」

「ええ。でもそれは、太田さんが来てから話したほうがいいでしょう」

「あ、そうですね」

沙耶子は、落ち着き払った那薙の前に黙っているのも心苦しく、適当に世間話を考えているうちに灰色の瞳と眼が合った。朝の光が虹彩に射し込むと、硝子玉のような透明感がある。

「那薙さん、昨夜もでしたが今朝も眼鏡してないんですね。視力つ

てどのくらいなんですか」

唐突に繰り出された質問に、那薙は返答に窮した。

「眼は、悪くないんです。ただ、光に弱くて疲れやすいので時と場所によって使い分けているんです」

大嘘である。

那薙の瞳が灰色になってしまったのは、叢雲の記憶が甦って以来のことだ。それまでは日本人標準だった茶褐色の瞳の色が、突然変わってしまった理由を家族にすら説明するわけにもいかず、地元では眼鏡が手放せない。

いつそ、誰も知る人のいない街へ引越してしまおうかと何度も考えた。だが、まろうどである那薙が、他の土地へ移住することで広がる波紋を考えるとそれもわずらわしい。

辰子の不可解な失踪が神議で取り沙汰されたことで、東北一帯の霊場や聖域の均衡が脅かされているように。

那薙はいまさらではあるが、ポケットから眼鏡を出してかけた。薄緑色のレンズ越しには、沙耶子の背後や周囲を浮遊していた霊体や粗霊が消え、人として『普通』の視界が戻る。那薙は無意識にほっと息を吐いた。これはこれで楽なのだ。人に見えない『もの』に注意を払ったり、思わずよけたりすると、他人に不気味な思いをさせてしまう。

沙耶子が妙な顔で那薙を見た。

また眼が銅色に光っていたのだろうか、那薙は少し緊張して瞬きをした。今朝は叢雲の御霊を刺激するほどの強い神霊や、粗霊の群がる磁場に触れていないはずだと思い返す。那薙が未だにコントロールできない、やたらそのへんの霊体に感應してしまう叢雲の属性のひとつだ。妖怪扱いされないように、人に会うときは眼鏡をいっつもかけていたほうが無難だったと那薙は後悔した。

「何か」

「ぎこちない那薙の問いに、沙耶子は一つこりと笑った。

「眼鏡しないほうが、矢幡さん素敵なのと思って」

予期せぬ指摘に、那薙は飲みかけたコーヒーを気管に吸い込んだ。激しく咳き込む。揺れたカップからコーヒーがこぼれた。沙耶子が慌ててナプキンを差し出す。咳がおさまったあとも、那薙の耳たぶには赤みが残った。

「大丈夫ですか、矢幡さん」

「だい…… じょうぶです。すみません」

こぼしたコーヒーは那薙の左手にもかかった。茶色に染まったパーカーの袖を見た沙耶子が小さな悲鳴を上げる。那薙は手を引つ込めようとしたが、沙耶子とはつさにその肘を掴んだ。

「火傷でもしたら大変です。冷やしたほうが……」

沙耶子はその言葉を失った。捲り上げた袖の下、手の甲から腕の奥とへ続く、変色し引き攣れた皮膚。息を呑み、那薙の肘をつかんだまま硬直した沙耶子のぎこちなさに、氣まずい空気が漂った。

「ただの、古い火傷の痕です」

那薙は右手で沙耶子の手を放し、左手を引き寄せ、ナプキンでコーヒーを拭き取った。そして「着替えはありますから」と濡れた袖をおろした。

「ごめんなさい」

沙耶子は穴があつたら入りたいというほど落ち込んだ。たつたいままで気づかなかつたのは不思議だ。先週は手袋をしていたところしか思い出せないが、昨夜、奈津子のパソコンを解析していたときは素手だったはずだ。ロビーは薄暗く、那薙は袖が長めのパーカーを着て、沙耶子の左側にいることが多かったせいだろう。早くに気づいていれば、もっとさりげない反応ができただろうに。

「コーヒーはもうそんなに熱くはありませんでしたから大丈夫です。それに、こっちの腕は痛覚も温覚もほとんどありませんし、気にしないでください」

那薙の声は落ち着いている。驚きを顔に出してしまった失態に、泣きそうな沙耶子を慰める口調がなおさらつらかった。

「すみません」

沙耶子は繰り返し謝った。なにに対して謝っているのかわからない。那薙は穏やかな微笑をたたえ、袖の上から腕を撫でた。

「隠してたわけじゃないです。友人や同僚は別に気にしませんし。ただ、初対面や短期間のことなら、なるべく見せないことにしているんです。人によっては気持ち悪いと感じますし、眼をそらされたり、逆に必要もないのに同情されるのが面倒なので。いつだったか、初対面なのに皮膚移植の費用の見積もりやら、腕のいい美容整形外科医を紹介するとか言われて当惑したこともありました」

那薙は苦笑いを浮かべた。沙耶子があまりに恐縮しているせいか、那薙は妙に饒舌になってしまう。

「移植、ですか」

腿などの皮膚を切りとってこっちに貼りかえるとか、そういうものだったけ、と沙耶子はちよつと怖くなる。

那薙は右手を上げて、長い指先を左の腕から肩、そして胸へと走らせた。

「けっこう範囲が広いものですから、金額的にも時間的にも大変なんです。先延ばしにしているうちに、どうでもよくなってきました。別に、もう痛みも不自由ありませんし」

「そんな大怪我……ものすごく痛くてつらかったですよ。私、火傷って、てんぷら油の火傷くらいで、でもいつまでも痛かったです。大きな水ぶくれができて、何日も眠れなくて。ほら、ここに痕が残ってますけど」

と右手の甲、親指の付け根に近いところに桜の花びら二枚ほどの色の濃くなった皮膚を見せた。

「お仲間ですね」

なんの仲間だかわからないが、和やかな顔で笑みを浮かべつつ那薙がそう言うので、沙耶子はほっとして冷めて固まった目玉焼きをフォークでかきまぜた。心臓がときどきする。これ以上の顰蹙な発言や行動は慎みたい。

もう、私ったら何が目的でここに来てるんだか！ だいたい、

奈津子を探しに来てるんだから。そうよ、奈津子はどこに行っちゃったのよ。ここのところ自殺者は発見されてないんだし。きつとどこかで生きてるはず。八方塞りで隠れて、戻るにも戻れなくなっていまもすごく悩んでいる。探し出して相談に乗らなくちゃ。結婚前に元カレの子供を妊娠したからって、たったひとりで死ぬ理由になんかならないんだから！

沙耶子はぐるぐると頭のなかで考え、自分を納得させた。それにしても太田はまだ起きてこないのかと、だんだんイライラしてくる。同じことを考えているのか、那薙はカフェテリアの入り口へちらちらと眼をやった。

黙り込んでしまった沙耶子に気を遣ったのか、居心地の悪い沈黙を払うように那薙は会話を続けた。

「眼鏡のセンスがないのは、よく会社の子に言われるんですが。忙しくて買い換える時間もなくて」

つるの色が濃くて太いのは、仕事中に横から顔を覗かれても瞳の色を人に見られないようするためだが、那薙としてもこの色が気に入っているわけではない。たまたま買いに寄った店に、太いつるのフレームが他になかったからだ。

「那薙さんは知的で優しい感じですから、金属製の細いフレームのほうがきつとお似合いですよ」

沙耶子は思ったままのことを口にした。

「そう……ですか」

那薙は口ごもり、眼鏡をはずして両手の中で弄んだ。視線がテールブルの上を泳ぐ。無機質だった硝子玉の瞳に、さざ波のように戸惑いが浮かんだ。耳の下が少しだけ赤くなる。

あれ、照れてる？

こうしてつくづく見てみると、矢幡那薙という青年は肉付きが薄く、鞭のように細い。よく沙耶子のような決して小柄でも華奢でもない女性を抱き上げて運べたものだと思う。日本人形を思わせる瓜実顔の顎は細く、控えめな目鼻立ちは地味な印象を与えるが、目尻

の少し上がった切れ長の眼は流し目が似合いそうだ。

太田のようなぱつと目立つイケメンではないが、もう少し髪型や服装や表情に気を配ったらかなりポイント高そうなのにと悔やまれる。スポーツインストラクターという職業上、筋肉質のイケた男性は見慣れた沙耶子にとっては新鮮なタイプだ。

人工呼吸までされたことを思い出して、沙耶子も耳の下が熱くなってきた。

いや、だから。あれは緊急事態だったから。

手を握り合わせていたのはなぜなのだろう、とは考えないに限る。沙耶子の視線もさだまらずに床とテーブルを行き来した。

「太田さん、遅いですね」

那薙が話題を変えた。

「携帯かけますね。起きれないなら置いていくわよ、って」

沙耶子は急いで携帯を取り出し、太田を叩き起こした。

「十五分で降りて来れるそうです」

そう言ったあと、沙耶子はふうっと息を吐いた。気が重い。

「どんな顔をして会えばいいんでしょう。昨日はどう慰めていいやら、かといって放り出すわけにもいかず潰れるまでつきあって、ホテルの方に助けてもらって部屋まで送ったんです」

「どうにも慰めようがないでしょう。想いが通じたと信じ、将来を誓い合った相手に裏切られたんですから。自分の全存在を否定されたも同じです。情が深ければそれほど、絶望も深い」

突き放すような重い口調に、沙耶子はびっくりして那薙の顔を見た。那薙はテーブルの角の、少し先の床を睨みつけていた。先ほどまでの和んだ空気は霧散していた。

沙耶子はコーヒーを一口飲み、パンを千切って口に運んだ。奈津子ひとりが悪者になっているのは居心地が悪い。事情があったのかもしれないのに。

「奈津子、婚約してから、とても幸せそうにしてたんです。太田さんを裏切るつもりは、きつとなかったんだと……」

だけど、沙耶子は事情を一切知らないのだ。弁護のしようがない。本当に、親友だったのだろうか。奈津子は、沙耶子を友人だと思っていたのだろうか。

「誰の役にも立ちませんね、私。慰める以前に、本気の恋とかしたことないし、真剣に結婚まで考えた相手もないから、奈津子の気持ちも太田さんの気持ちもわからなくて……だから、奈津子は私に何も話してくれなかったのかな」

急に沙耶子の眼の奥が熱くなって鼻の奥がツンとしてきた。

那薙は右手を上げて自分の右の頬を撫で、口を押さえた。その中にゆっくりと息を吐く。

「すみません、余計なことを言いました」

なぜ那薙が謝るのだろうか。と沙耶子は眼を睜った。

那薙はテーブルの上に置いた左手の甲をじっと見つめ、二度ばかり指を閉じては開いた。いまは痛みも熱も感じない傷跡は、しかし今も鮮やかにそこに残り、いつまでも消えることなく繰り返す遠い過去の悪夢を囁き続ける。

那薙はまぶたを閉じ、耳を押さえた。

焼け落ちる館、耳を聳する剣戟の音、逃げ惑う人々、燃えさかる森、一族の血で染まった川。仕組まれた、偽りの祝言。

海の底で錆に覆われ朽ちてゆきながらも、記憶のまどろみのなかで繰り返される『かれ』の最期。諦めの絶叫と、絶望の沈黙。

取り返せない過去を忘れるのに、どれだけのときを要するのだろうか。

「矢幡さん、矢幡さん」

それが自分の名前だと知って、那薙は顔を上げた。心配そうに自分の顔をのぞきこんでいる女性。その人の放つ、薄紅色のオーラ。手をかざせば、あたたかな放射熱さえ感じられそうだ。

「どうしたんですか。具合でも？」

那薙は肩の力が抜けていくのを感じた。椅子の背もたれに背中を預け、那薙は右手で左の腕を撫でて首を横にふった。

「人の世には、よくあることです」

肩から腕にかけて広がる火傷よりも、深い痛みを胸の奥に抱えたかのような響き。

沙耶子は、那薙の態度の変化に不安を感じてなにか言おうとしたが、太田がカフェテリアに入ってきたので会話はそこで中断された。うつそりと姿を現した太田は、二日酔いのため顔色はひどく、眼は充血していた。表情は悲慘のひと言につき、発散するオーラも鉛色だった。

那薙は、すごすごといった風情で太田に従う守護霊に視線を当てた。生気のない水色と灰色のまだらゾウリムシにも似たそのスライムは、身を縮めて太田のふくらはぎの後ろに隠れ、那薙の視線を避けようとする。これではもはや守護霊とはいえない。

守護霊や守護神が対象の不幸に引きずられてどうする、と那薙は活を入れてやりたい衝動に駆られた。ここは人目も多いため、あとで火精をたつぷり込めた言霊を吹き込んでやろうと考え直す。

元がなんであつたのか、原形すら保てない祖霊をひきずる太田を御佐和湖へ連れて行くのは、とにかく良策ではない。質の良くない粗霊を引き寄せて那薙の足を引っ張る可能性がある。那薙の目的は辰子を探し出し、八郎のもとへ戻るように説得することであり、この土地で問題を起こすことではない。辰子はタブコを使って人間たちをよからぬ企みに巻き込んでいるようだが、那薙としてはその件とは無関係でありたかつた。この土地の誰にも禍根が残らないように、東国に縁のないまろ^{ゆかり}うどの叢雲に押しつけられた仕事だが、人の死がかかると那薙の社会生活に禍根が残る。

辰子の所在を突き止め、見つけ出し、神議の総意と八郎の意思を伝えたら、叢雲の仕事はそれで終わりのはずだ。神議の許可なく土地を違えて周囲を困らせている辰子の処遇については、叢雲の権限ではない。

ああでも、辰子と叢雲の荒魂^{あらいみたま}が正面からぶつかりあつたらどうなるのか……。

興味深いことは確かだが、試さないほうがいい。

八郎さんまで敵に回したくはないですね。

太田にホテルで待つように説得しようと考えながら、那薙は沙耶子へと視線を移した。

食欲のない太田にコーヒート味噌汁を勧め、沙耶子は勢いよくヨーグルトドリンクを吸い上げた。沙耶子の全身から溢れる生気に、那薙は思わず頬をゆるませる。

ウェイトレスに三杯目のコーヒートを注いでもらった那薙は、昨夜の収穫について話し始めた。

「最初にタプコの居場所を訪問します。今日はそこでつかめる手がかりをできるだけ追います。場合によっては御佐和湖に潜らずにすむかもしれません」

沙耶子は口元を引き締めうなずき、太田は途方に暮れた顔になる。「太田さんは、ホテルで連絡を待つことをお勧めします。ぼくとしては、タプコも奈津子さんも刺激したくないのです」

太田は眉の両端を八の字に下げて、情けなく唇を歪めた。

「でも、おれ……私は奈津子連れて帰らなければならいんです。話し合つて、式の……延期なりキャンセルなり……これからのことも。奈津子のお袋さんは寝込んでしまっているし、おれたちだけの問題じゃないんです」

おろおろと話し始めた太田だが、終わりの半分は叫び声になっていた。周囲の宿泊客が数人、こちらを見た。

「私たち、太田さんの車で来てるんです。太田さんに運転してもらったら、移動も楽で、時間も節約できると思います」

荷物の多い沙耶子は太田の援護射撃に回った。

那薙は小さく溜め息をついて、姿勢を正した。確かにクラチとミズチを入れたスーツケースを運ぶのに、車があつたほうがいい。どうせすべてが終われば彼らの記憶は消してしまうのだ。那薙はすぐに結論を出し、姿勢を正した。

背筋を伸ばしただけだが、細身的那薙ががちりめの太田よりも

存在感を増した。灰色の眼に力がこもる。

「では、約束してください。この先、何があるかと、ぼくの指示には絶対に従うと」

ひと言ひと言区切りながら話すその声音にも、有無を言わせぬ力が込められていた。耳の奥で反響しこだまする、逆らえない『威』。那薙の奥底から、喉を通して発せられる言霊に縛られたことも知らず、太田と沙耶子も無意識に姿勢を正してうなずいた。

「では、食事が終わったら太田さんとふたりで話をさせてください。太田さんの部屋に伺ってもいいですか」

「はい」

太田は突然の指名に眼を丸くしたが、逆らわなかった。

那薙とともに、チェックアウトのためロビーに下りてきた太田は、どこか晴れ晴れとした表情になっていた。顔色もいい。肩が重く前かがみだったのがなくなり、胸を張っている。

やはり男同士で話し合うほうが気安いのだろうか、沙耶子は太田の軽くなった足取りを見ながら思った。なぜかしら悔しさが募る。那薙はふたつの小型スーツケースを、トランクではなく、後部座席に置いてもらうように太田に頼んだ。後部座席にスーツケースと並んで座る沙耶子は、その中身を知ったらまず同じ車にも乗りたいがらないだろうが、那薙はナビゲーターとして、助手席に座る必要があった。

那薙はスーツケースを車に入れるときに「横にしますよ」と話しかけながら、慎重な、むしろ優しいといった手つきでそっと入れた。しかもシートベルトで固定する。

いろんな意味で謎の多い人だと沙耶子は思ったが、太田は地図と睨めっこしていたため、那薙の奇行には気づかなかった。

御佐和湖の麓の街に、タプコの住所はあった。観光地に相応しい、アルパイン風の瀟洒なたたずまいの喫茶店で、敷地内の奥に住宅が

あり、その背後は小さな森になっていた。

那薙は駐車場に車を止めさせ、そこで待つように太田たちに指示した。

「タプコ本人がいるかどうか、確認するのが先ですから」

那薙は車を降り、喫茶店に入らずに少し離れて建物を眺める。数歩ばかり歩いては立ち止まり、空気の匂いを嗅ぐように辺りを見回す。左手を上げ、空気中の何かを掴む動作をしては少しずつ進みながら、喫茶店の扉を通り過ぎて歩道の角を曲がって行ってしまった。

「矢幡さん、どこへ行っちゃたのかしら」

太田は返す言葉も思いつかず、ただ首をすくめた。

「タプコにしろ、奈津子にしろ逃げられるといけないから、下手な行動はとるなと言われたんだ。奈津子はいったい何に首を突っ込んでいたんだろう」

両手で顔をこすりながら、太田は喫茶店を睨みつけた。

「矢幡さんの探してるタプコさんって人、すごく怪しいよね」

「矢幡さんもちかなり怪しい。昨夜の矢幡さんがやってたこと、ハッキングってやつじゃないか」

「そうね」

沙耶子は、隣の席に積み上げられた二つの小型スーツケースを見おろした。何が入っているのだろう。

『ぼくがないときに開けないで下さい』

車を降りる前に那薙の残した戒めの言葉が耳に残る。

そのとき、かさり、という音が上のスーツケースの中からして、ぎょっとした沙耶子はドアのほうに体を引いた。

「き、聞こえた、今の」

「何が」

外に注意を向けていた太田は、気のないようすで沙耶子に伝える。奈津子がいつ姿を現すかと外ばかり見ていたのだろう。

「このスーツケース……」

ことん、と下のスーツケースからも音がした。よく見るとスーッ

ケースの側面には小さな孔がいくつか空いている。再び、こつり、と叩くような音が上のスニーカーから聞こえた。

見るな開けるなという警告や約束を破って破滅するのは、おとぎばなしの定番だ。警告したとき的那薙の硬質な瞳を思い出し、沙耶子は強いて窓の外へ視線と注意を向けた。

「このへん、カラスが多いな」

太田が呟いた。辺りを見回した沙耶子は確かにそうだと思った。

それも、関東のよりも一回り大きい。まるで測ったように一定の間隔で道沿いの家の塀や、木の枝にとまり、地面に下りては何かを嘴でつついている。

那薙が、向っていたのとは逆の方向の歩道から姿を現した。喫茶店のまわりをぐるりと回ってきたのだろうか。やはり数歩ごとに立ち止まっては、空気に触れる仕草を繰り返している。目を凝らしてみると、誰かに話しかけてでもいるように口を動かしていた。

「やっぱり怪しい人だわ」

口の中で呟きながら、なぜか那薙を全面的に信用している自分が不思議だ。それを察したように太田が沙耶子にふり向いた。

「矢幡さんって、いったいどういう人なんだ。警察でも探偵でもないだろう」

「システムエンジニアでしょ」

他に答えようがない。

「それだけじゃないだろう。それは世を忍ぶ仮の姿とかさ。なんか、いろいろと玄人っぽいし。ハーフかなんかみたいだし。実は国際秘密警察のエージェントとか」

昨夜の落ち込みのひどさも、朝のどんよりさも抜けて、普段の調子が戻っている。沙耶子の知っている太田というのは、基本は明るくて周囲に気を遣うタイプだ。

太田とは、沙耶子がトレーナーをしているジムクラスの会員として出逢った。ジムクラスの会員たちが主催した昨年のクリスマスパーティーで、沙耶子とともに顔を出した奈津子と太田は意気投合し、

交際の運びになった。

つまり沙耶子が二人を引き合わせたようなもので、何度かマンシヨンの寮に遊びにも来ている。太田が内気な奈津子を落とすのに沙耶子の助けを借りたこともあり、太田は沙耶子を『さっちゃん』と呼ぶ。

「太田さん、その手の映画の見すぎ。ねえ」

沙耶子は助手席の背もたれに手をかけて身を乗り出した。

「部屋で矢幡さんと何を話したの」

太田は眼を見開いて、それから耳の後ろを右手でぼりぼり掻いた。しばらく考え込んでいる。

「なんだったろう。あまり思い出せない。とにかく二日酔いで頭が痛くて」

目を閉じ、眉間に皺を寄せてさらに考え込む。

「ええと。奈津子のことを怒っているかって訊かれたかな。顔を合わせたときに冷静でいられるかと」

「どう答えたの」

「わからないって答えた。奈津子の口から直接、話を聞かないと納得できないだろう。矢幡さんはおれが奈津子に会って逆上されたら困るから、そう訊いたんだろうけど」

「それで？」

太田は困惑して視線を落とした。

「はつきりとは思いつけないんだけど、いろいろ愚痴みたいなことを言った気がする。奈津子がいなくなってからあれこれ考えて、ぐるぐるしていた怒りや恨みみたいなものを垂れ流してしまった。恥ずかしいよな、二日酔いだからって、昨夜初めて会ったばかりの相手に。どうかしてたんだ」

「会ったばかりの国際秘密警察のエージェントが、他人の修羅場の愚痴を聞いてくれるかな」

「実際に秘密警察のエージェントに会ったことがないからわからないけど、矢幡さんはなんか、平常心がどうだかって、呼吸がどう

のとか……そつから曖昧だ。額に手を当てられて……気がついたら
すつきりしてた。なんか、いままで暗い霧の中にいたのが、急に晴
れた空の下に出てきたみたいだ。頭痛もなくなってた。あの人がた
だ者じゃないのは確かだよ。その矢幡さんが追ってるっていうタプ
コつて、何者なんだろう。苦しいときにへんな奴につけこまれて……
……奈津子お。生きていてくれたら、無事で帰ってきてくれたら。お
れはもう、それでいいよ」

ステアリングにもたれかかって呻き出した太田から沙耶子が眼を
逸らしたとき、那薙が喫茶店の扉を開けて入ってゆくのが見えた。

「あ、矢幡さんがお店に入った」

太田が緊張感を取り戻して喫茶店の扉を見つめる。二人は息を殺
して扉の上に揺れる小さな力ウベルを見つめた。

第五章 相沢篤子の告白

喫茶店には静かなクラシックが流れ、客もまばらだった。「いらっしゃいませ」という声が那薙を迎える。

那薙はカウンターに近づいて、朝のうちに山積みされたコーヒークップを濯いでは食器洗浄機のラックに並べているウェイトレスに声をかけた。

「相沢篤子さんという方を訪ねてきたのですが」

タップコのパソコンの所有者の名を出す。話しかけられたウェイトレスは訝しげに顔を上げた。

「私ですけど」

中年にさしかかった童顔の、優しそうな女性だ。那薙は柔らかな微笑を浮かべる。

「『タップコ』という名前に心当たりがありますね」

温和な口調に、言いぬけを許さない断定の刃がくるまれていた。

相沢篤子は目を見開き、口をわずかに開けて濡れた手で額をこすった。

「あの、あ」

すぐに言葉を紡げずに、相沢篤子はうろたえた。那薙はカウンターの奥の棚に並ぶ置物を一瞥した。熊や鷹の彫刻、牡鹿の見事な角クリスタルカットのすだれが五本、天井から下がり虹色の光をカウンターに反射している。棚の中央には三十センチメートルほどの観音菩薩像も飾ってある。その周りには大小の招き猫のコレクションがいくつも並べられていた。喫茶店に入ってすぐ内装を見回したが、辰子が依り代にしそうな置物も絵画も見当たらなかった。あるいは、裏の家の中なのかもしれない。

「タップコは私ですけど」

那薙はわずかに首を傾けて相沢篤子を見おろした。薄く刷いた微笑はそのままだに、おどおどとした女性の顔を見つめる。相沢篤子の

オーラは普通の人間のものだ。この規模の喫茶店を順調に経営するだけの生氣と活力を発散させている。

「遠藤奈津子という女性が、ひと月前にこの店に来たはずですが、覚えておられますか」

那薙は写真を差し出した。相沢篤子は写真を覗きこみ、思い出そうとして額に皺を寄せた。

「ええ、あの。ちょっと待ってください。これを終わらせてからでいいですか」

相沢篤子は重なったコーヒーカップやタンブラーの洗淨ラックを示した。

「かまいません」

那薙はカウンターの端の席に腰をかけた。窓から駐車場が見える。沙耶子と太田がスーツケースを覗いてみようという気を起こさないように祈る。

相沢篤子がひと仕事片付けて那薙のところへ来るころには、客はすべて退いていた。店内は二人をのぞいて無人となる。那薙は外をちらりと見て、カラスたちが持ち場にいるのを確認した。土地のものではない那薙は、媒体無しに結界を張れない。土地神の眷族に借りたヤタガラスを配置することで、この店に誰も入ってこれないように結界を張ったものの、生きた眷族というのは気まぐれなものだ。集中力も続かない。彼らが自分たちの仕事を忘れないうちに早く仕事を済ませたかった。

相沢篤子は那薙の隣の椅子に腰かけた。警戒している様子が口元にたたえられている。

「あの、どちらさまですか」

「申し遅れました。矢幡といいます。警察ではありません。奈津子さんを探しに来たのです」

篤子は那薙の風貌を改めて見直した。この寒いのにパーカーを羽織っただけで、眼にかかりそうな前髪は無造作に分けられている。ジーンズは洗いざらしのもので、確かに警察関係には見えない。

那薙と眼が合った篤子は、慌てて写真に目を落とした。

「この方とは確かに会いました。落ち着くまでいろいろ悩みを聞いて、二日ほど泊めて差し上げました。それがひと月前のことです」

「奈津子さんがそれ以来、行方不明なのはご存知ですか」

篤子はびっくりして顔を上げた。それでも思い当たることがあるのか、唇を震わせてうつむく。

「奈津子さんだけじゃありませんね。妊娠について悩んでいる女性がここを訪れ、行方不明になったり、御佐和湖に入水する。過去の御佐和湖の自殺者とブログ『TAPUKOPU』との関係を、ぼくが警察に話したらどうなるでしょう」

篤子は肩を震わせ、両方の拳を口元に当てた。浅い呼吸に声がかかる。

「わ、私じゃない。ええ、サイトを始めたのは私です。悩んでいる人を助けたくて。でも、私が自殺を勧めたことなんかいちどもないのに。それに、私、よく覚えていないんです。その人たちのことは……ほんとうに」

那薙は眼を細めて篤子の全身を観察した。依り代にされた人間というのは、憑依されている間のことは覚えていないものだ。あるいはつじつまを合わせた記憶を刷り込まれる。那薙は声に力をこめた。「信じますよ。でも、篤子さんを利用しているものが、近くにいます。喫茶店と家の中を見せてもらえますか」

「はい」

篤子は従順に立ち上がり、店の看板を準備中に変えた。那薙を敷地の後ろにある家に上げる。那薙は篤子の案内で、家の部屋をひとつづつ見て回った。

篤子は相談ブログを立ち上げた理由　過去の悲恋と生れてこなかった子供の話を話し、望まれない子供を授かってしまった女性たちの相談に乗っていたことを告白した。

那薙は篤子の過去に興味はなかったが、丁寧に相槌を打った。

居間にも客間にも様々な置物があつたが、辰子の気配を匂わせるものはなかった。奥の客間に通されたとき、床の間に眼が吸い寄せられた。早春の梅の枝を描いた水墨画の下に、滑らかな白い木肌をさらした流木が飾つてあつた。

「タプロコに会いに来るお客さんには、この部屋に泊まってもらうんです」

耳の下で説明する篤子を遮って、那薙は床の間を指差した。

「あの置物は……流木はどこで拾ってきたんですか」

篤子は床の間に膝をついて両手で流木を拾い上げた。

「これですか。五年前に、御佐和湖の畔に打ち上げられたのを見つけたんです。ほら、龍の形をしているみたいでしょう。形を整えて磨いて」

波や砂利に削られて不思議な形を成した流木は、確かに龍を思わせた。頭には二本の角、長い鼻面、大きく開いた顎、うなる胴体。四肢を思わせるねじれた根。

「きれいに削つて、紙やすりで磨いたんですよ。眼に嵌めたのは赤瑪瑙です」

「五年前、ブログを開いたころですね」

篤子は目をぱちくりとさせて、那薙を見上げた。

「その置物、ぼくにもらえませんか」

眉間に皺を寄せて拒否の言葉を喉元までのぼらせた篤子は、那薙の鋼色の瞳に射すくめられ、金縛りにあつたように動けなくなった。そして言われるままに龍の形をした流木を手渡す。那薙が置物を持つと、辰子の残滓に触れたためにその瞳が玉鋼の色に輝いた。龍頭を覗き込む那薙の顔に満足の微笑が浮かぶ。

「尻尾を捕まえましたよ、辰子さん」

小さく呟いた那薙は篤子に視線を戻した。深く息を吸い込み、左手を篤子の頬に当てた。

「この流木のことは忘れなさい。そして、ブログを閉鎖するのです。ブログを閉鎖したら、この五年、タプロコであつたことも忘れます。」

いいですね」

流木を脇に抱え、那薙はぼうつとしてゐる篤子と店まで戻った。カウンターの椅子に座らせる。篤子と流木の龍をそこに置いて、那薙はポケットから短い八本の鉄の釘を出して口に含んだ。家の扉と喫茶店の扉の両方の枠に四本ずつ釘を打ち込む。これで辰子がここに戻ってきたら那薙に感知できる。あるいは、那薙の足跡を感知して、篤子に憑りつくことがなくなるだろう。どちらにしても、流木のおかげで辰子を追うのはたやすくなった。

沙耶子に奈津子のパソコンを持ってこさせたのは正解だった。太田というお荷物をどうするべきかはたいした問題ではない。

那薙が店を出ると、いつせいにガラスが飛び立った。辰子が篤子に憑っていたら逃がさないために、そうでなければ篤子宅の搜索に干渉させないための結界が解かれた。那薙は御佐和湖の方角を見上げる。

「さて、次は奈津子さんですね」

那薙は、晴れ晴れとした気持ちで駐車場に戻り、助手席のドアを開けた。辰子の搜索が進んで浮き上がっていた気分が一気に沈む。

「スーツケースを開けてはいけないと、あれほど念を押したのに……」

それぞれミズチとクラチに巻きつかれて、座席で硬直している太田と沙耶子が涙眼になつて那薙を見上げていた。

「ミズチ、クラチ、ふたりから離れてスーツケースに戻りなさい」

那薙は子供に対する学校の先生のような口調で蛇たちに命じた。

太田にからみついていたクラチは那薙のほうに首を伸ばしてイヤイヤをした。

「クラチ、君が巻きついていたら太田さんが運転できないでしょう」

那薙が右手を上げて指を鳴らす。静電気が走ったように空気が震えた。クラチはすこすこ後ろの座席に這い戻り、下のスーツケースに入った。

「ミズチ、君も戻りなさい」

青い練り絹に、瑠璃と翡翠をちりばめたようにキラキラした鱗に覆われたミズチは、大人しく沙耶子からすると這いおりて上のスーツケースにおさまった。

助手席に膝をついた那薙が、太田と沙耶子を交互に見ながら「どちらがスーツケースを開けたんですか」と訊ねたとたん、暖房の効いていたはずの車内の気温が一気に下がった。瞳の色が陽光を玉鋼色に反射している。

「あつ、あの、私、中で音がして、苦しそうな息が聞こえて、猫かなんかだと可哀そうかと思って……」

「開けたんですか」

那薙のダメ押しに「ひっ」と沙耶子の喉が鳴った。「ごめんなさいっ」

沙耶子はよほど怖かったのだろう、涙を流しながら謝った。

「あ、開けてみたのは上のスーツケースだけだったんですが、青蛇が出てきてびっくりしていたら、その蛇が口で下のスーツケースも開けてしまったんです」

那薙は額にやった手で前髪をかきまぜ、太田へ顔を向けた。太田は初めて間近で見る那薙の異様な瞳に怖気づき、眼を限界まで見開いて口をぱくぱくさせた。

「ミズチとクラチを傷つけなかったんですね。礼を言います。まだあまり人間に慣れていないので、好奇心が強いんです。驚かせてすみませんでした」

那薙の物柔らかな口調に、太田はこわばっていた体から力が抜けたらしく、肩がずるりと下がった。

「傷つけるも何も、睨まれたら動けなくなって……。からみつかれてからは、怒らせたら咬まれるんじゃないかって、もう何もできませんでした。かつ、金縛りにあつたみたい」

しどろもどろになって舌を噛みそうになる太田に、那薙の口角が上がって「ふっ」と笑った。太田が反射的に体を後ろに引いた。那

薙は蓋の外れたスニーカーに流し目をくれる。

「いつの間に睨み技なんて身につけたんですか、クラチ」

クラチはスニーカーからすると首を出して、自慢げにちろちろと赤い舌をだした。その動きに、沙耶子とはっさにドアにはりつく。その沙耶子に那薙の視線が移り、柔らかな笑みが向けられた。

「蛇は嫌いですか」

「えええ、苦手です。どちらかというと」

乾いた喉からかすれた声をしばらくだしつつ、好きな人のほうが珍しいと沙耶子は思った。だが雪女の犠牲者のように、相手の機嫌を損じて氷柱にされてはたまらないのであえて言わない。

「では蓋を閉めますね」

那薙が手を伸ばしてスニーカーに手をかけ、クラチとミズチは大人しく中にこもってとぐろを巻いた。カチリ、と音をたててスニーカーの蓋が閉まる。それから助手席に腰を落ち着けて車のドアを閉めた。

「奈津子さんはここにはおられませんでした。タップコも、すでに行方をくらましています。そのことで、ぼくは依頼者の代理人に連絡を取る必要がありますので、その前に少し早いですけど昼食にしませんか」

あれこれの質問が頭の中に渦巻く太田と沙耶子の胸の内を斟酌するようすもなく、那薙は街はずれのレストランへの道筋を太田に示した。

太田が運転を始めると、那薙は両手で流木の像を眼の高さに持ち上げ、龍の目を覗き込んだ。

赤瑪瑙の丸い石が冬の陽射しをはね返す。

「それ、なんですか」

太田がおそるおそる訊ねる。

「タップコという、キナコロカムイの一部です」

那薙は意味不明の答えを、微笑に含ませた。

「タップコの本体が宿る場所に案内してくれます。さっきの喫茶店で

得られた収穫はこれだけですが、とても有力な手がかりです。楨田さんが奈津子さんのパソコンを貸してくれたおかげで多くの仕事も進みました。お礼を言います。奈津子さんの搜索のほうも、ぼくの力の及ぶ限り手伝わせてもらいます」

肩こしに振り返った那薙が爽やかに笑ったので、沙耶子も引きつった笑顔を返した。ゆっくり深呼吸して、決意を固める。

「あのですね。矢幡さん。伺いたいことがあるんですが」

「なんですか」

「矢幡さんって、何者なんですか」

那薙は首をひねって後ろの座席の沙耶子と眼を合わせた。同じことを知リたかった太田も、那薙の横顔を窺がう。那薙は一瞬の迷いを瞳に浮かべ、唇を舐めた。物言いたげな表情になったものの、すぐに首を小さく横にふって微妙な薄笑いを浮かべた。

「太田さんと同じ、サラリーマンですよ。ただ、親戚筋のごたごたにふり回されているだけのね」

道の駅のレストランに着き、那薙はそこで会話を途切らせてしまふ。

しかし沙耶子はいつまでも那薙のペースではいられないと自分を叱咤した。奈津子捜しも力を尽くすといった那薙の言葉を信じるとしても、もう少し事情を明かしてくれてもいいはずだ。那薙と太田が定食を頼んでいる間に、沙耶子はうわの空でキノコのクリームパスタを注文しつつ、勇気をかきあつめた。

「あの、矢幡さんが普通のサラリーマンだって、説得力ないと思うんですけど」

「人並みに週六十時間は働いてますよ。これで週末は親戚にこき使われてますから、普通とは言えないでしょうね。そのうち過労死するんじゃないかと不安を抱えているくらいです」

真面目な顔で茶化しながら、並んで座っている太田と沙耶子を正面から見比べる那薙の瞳には迷いがあつた。流木の像に触れたり、篤子のところで霊力を使ったために、瞳の色が不安定になっている

こともある。二人の疑問や不安はひととおりではないのは想像がつく。だが、那薙にとっての現実、彼らにとっては荒唐無稽な夢物語でしかない。

辰子はどうでてくるだろうか。

辰子を召喚して、どんな姿で現われるのか那薙にも見当がつかない。湖のあるじ、ミサワヌシが介入してきたらさらに事態は面倒になる。神議で伝え聞いたミサワヌシの姿は、あまり美しいとはいえない。彼らに対面したときに沙耶子たちが正気を保てるかどうか心配である。

それに、沙耶子さんの意志の力も侮れそうにありませんね。

太田ひとりなら、辰子と交渉している間は車の中に寝かせておけばいいだろうが、沙耶子の行動は予測がつかない。暗示にかかりにくい体質というのはあるものだ。かといって、ふたりを追い返すタイミングはとうに逃してしまった。

「蛇とお話ができるサラリーマンなんていません。その親戚さんへの秘密保守義務はわかるんですけど、こちらも大事な友人が……太田さんにとっては婚約者の安否がかかわっているんですから、矢幡さんの事情も少しは明かしてもらえませんか」

太田が耐えかねたように身を乗り出した。

「奈津子が、何かの犯罪にかかわっているのではと思うと、いてもたってもいられません」

那薙は姿勢をただした。

「わかりました。実は、辰子さんが一般の人々を巻き込んだことについては、依頼者の代理人の指示を仰ぐ必要があるのです。辰子さんの対話にあなたたちを同伴することについても、許可が必要かもしれない。ネットで得たタブコの状況を並べてみても、事態はぼくが考えているほど単純なものではないようですね」

沙耶子は眼を丸くした。

「あの、辰子さんとは？」

那薙は、まだ何も彼らに話してはいなかったことを思い出した。

「神成辰子^{しんせいいたしこ}。ぼくが探している女性です。秋田と岩手の県境にご主人と睦まじく暮らしておられたのですが、七十年ほど前から行方不明になっていました。ご主人は手を尽くして探したのですが、まったく手がかりがつかめませんでした。それが去年、この御佐和湖の周辺にいるのではないかという情報が寄せられましてね。ぼくが確認を依頼されたのです」

沙耶子の眼がますます丸くなる。

「それで湖に潜って探していたんですか。っていうか、その辰子さんは湖の底にいるっていうことですか」

「とは限りませんが。彼女が御佐和湖周辺にいますという証拠が必要だったのです」

「証拠？」

「魚です。彼女が、おそらく育てているはずの」

「あの、ちよつと待ってください」

太田が口を挟んだ。

「その、辰子さんて、何歳なんですか。失踪したのが七十年前で、その前に結婚していたってことは……」

「ぼくも詳しくは知りません。人としては長生きな方です」

那薙が『人としては』と口にしたときに、わずかにためらったのを、沙耶子は聞き逃さなかった。

「矢幡さんは、その辰子さんを知っているんですか」

と、沙耶子。那薙は首を横に振った。

「いえ、直接には。ものすごい美人だから、会えばわかるとしか知らされてません」

那薙はいたずらっぽく笑った。その飾り気のない、ふと本音の覗いた那薙の微笑に、沙耶子はどこかすっきりしない。太田は百歳に近いものすごい美人など、想像もできずに啞然としている。

「いま、ぼくがここで彼らについて説明しても、多分信じてもらえません。辰子さんはぼくと同族というわけでもないのです、彼らについて詳細に理解しているわけでもないんです。ぼく自身もう少し情

報が必要です。湖に行く前に代理人に会ったほうがいいでしょう」

「これから、ですか」

太田と沙耶子は声をそろえた。

「ぼくの身内です。太田さんたちに危害を加えることはありませんから、安心してください」

にっ、と那薙が笑ったとき、三人の昼食がテーブルの上に並んだ。太田と沙耶子は味もよくわからない食事を終えた。那薙が手洗いに立っている間に、太田はおろおろして沙耶子に話しかける。

「やっぱり矢幡さんって、普通じゃないよ。なんか、オカルトチックなことにおれたち首を突っ込んでないか」

「って、その辰子さんが美貌と不老不死のために妊婦に自殺させているっていの？」

「その不老不死の親戚とか同族とかさあ。そうだ、あの人、蛇と話をしたろ。ああいうの、式神とかいうやつだろう。そのばあさんを退治するために雇われた、陰陽師なんかじゃないのか」

「太田さん、そういう小説の読みすぎよ。だいたい、蛇とか猫とか、洋風に言えば魔女とかの使い魔になるんじゃない？ 矢幡さんて、ハーフじゃないの」

「矢幡さんが魔女って？ いや、陰陽師だよ。雰囲気がそうだ」

太田に本物の魔女や陰陽師に会ったことがあるのかと突っ込みたくなったが、沙耶子も脳内がかなり混乱しているのは同じなので黙っていた。

沙耶子は最後のキノコをフォークに刺して口に運び、那薙が帰ってくる前に自分も化粧直しを済ませようと席を立った。

第六章 草薙の置き土産

車に乗り込むと、那薙は太田を右へ左へと案内し、町外れの神社に車を停めさせた。鳥居をくぐる前に那薙は数話のクラスを呼び寄せ、人が入ってこれないように結界を張った。境内は無人で、社務所は閉ざされていた。

「戒神社です」

那薙は祀られている祭神の名を読んだ。右手にデイパック、左の脇に流木像を抱えている。

「ここで、待ち合わせているんですか」

太田が静謐な杜と古寂びた社を見回した。那薙は悠然と答える。

「ここに呼び出すのです。携帯の繋がる相手ではありませんので、直接来てもらわなくてはなりません。かれらは磁界の門さえあれば、どこへでも顔を出すことはできます。もっとも出先の結界の外にはでられません。神社はそれ自体が磁界の門を果たしていて、結界を形成していますから、ぼくでも楽に彼らを呼び出すことができます。もちろん、この祭神の許可がいりますが」

立て板に水式に説明しながら、那薙は流木像を地面におろした。幅が広く細長い二本の白布をデイパックから取り出し、ひとつを太田に渡した。もうひとつを沙耶子の首にかけ、布の両端は胸の前まで下ろす。

「端についている紐を胸の前でこうして結んで」

那薙の指が布の両端近くに縫い付けられた紐を、沙耶子の胸の上で結わえた。沙耶子は互いの前髪が触れてしまいそうな距離にどきまぎした。

「これ、何ですか」

「清掛けです。必要かもしれないといって持たされた荷物の中に入っていました。まさか本当に必要になるとは思いませんでしたね」

キヨガケって、何よ。

説明の足りなさに、沙耶子は溜め息をつきそうになった。太田は太い指で紐と格闘している。那薙はさらに赤紐を取り出して二人の肩にかけた。

「さて」

太田と沙耶子の準備が終わると、那薙はおもむろにデイパックから二枚のかわらけを出し、賽銭箱の枠の上に乗せた。かわらけのひとつに米を盛り、もうひとつのかわらけに小瓶の吟醸酒を注ぎ込む。そして賽銭を上げて拝礼した。

沙耶子と太田は呆然と成り行きを見守った。ふたりとも訊きたいことは山ほどあったが、口を聞くのが憚れるほど、杜は莊嚴もりさに包まれていた。

太田は小声で沙耶子に囁いた。

「やっぱり陰陽師だよ」

沙耶子は首を傾げる。

「ううん。ちよつと違うんじゃないかな」

といっても、本物を見たことがないので断言できない。

那薙のゆつくりと間を置いた拍手が二回、杜の奥へと反響した。

太田は少し遅れて那薙と同じように拝礼し、沙耶子も続いた。

深く拝した那薙が顔を上げ、神殿に言霊をあげた。

「コトシロヌシ或るいはヒルコノミコト。貴殿の領域を『ツルギノウカラ』がお借りしたい」

冬の冷たい空気がさらにピンと張り詰め、杜の木々が風でざあっと鳴った。風是那薙の前髪を持ち上げ、吹き渡る。

那薙は太田と沙耶子に向き直った。やけに晴れ晴れとした笑顔になっっている。

「手間暇かかって申し訳ありません。いろいろと手続きが面倒なんです。ほんとうに、彼らとも携帯やネットで連絡がつけばいいの

と思いますよ。ああ、ちよつと待っていてください」

杜に入っていく、すぐに戻ってくる。手には二本の榊さかきの枝を持っていた。榊の枝を賽銭箱の両端に置き、かわらけの中身を新しく入

れ替えて供える。そしてパーカーの裾に手を入れて背に手を回し、腰から鞘に入った短刀を取り出した。

背中にそんなものを隠し持っていたということに、太田と沙耶子は啞然とする。

沙耶子はその刃の長さやいばと厚さは銃刀法にかかるんじゃないですかと突っ込みたくなり、太田は太田で、短刀の柄つかまに鯨革さめがわと紫絹しけんの平布で菱の柄巻つかまきがほどこされているのを見て取り、本物の脇差のようだと感心した。

その細い体にやたらぶかぶかした大きめのパーカーを着ていたのは、長い袖で火傷の痕を隠すためだけではなかったことに、沙耶子は思い当たった。

那薙は抜き身の短刀を賽銭箱の上、二本の櫛の間に横向きに置いた。鞘は腰のベルトに戻す。そして太田たちにふり向いた。

「これから、ちよつと普通では信じられないことが起こりますが、あまり驚いて大声をだしたりしないでください。ぼくの身内以外のものも、召喚の波動を感じて、ようすを覗きに來ますのでね。かれらに連れて行かれないように、声も出さないようにしてください」

那薙は念を押すように沙耶子の眼をじつと見つめた。沙耶子は首をたてにがくがくとふる。太田も両手で口を押さえてうなずいた。

那薙は膝についてディパックから篠笛しのふえを取り出した。笛を横向きに下唇を当て、息を吹き込む。

甲高い音が、段階的に高さを増して杜へと溶け込んでいく。耳の痛くなるその高音が沙耶子たちの可聴範囲を超えても、那薙はまだ息を込め続けた。それを三度繰り返す。

杜を包む空気が、ずっしりと比重を増して、かれらの上にのしかかる。

笛をおろした那薙が「ああ、頭がくらくらします」とひとり言を言ったのを沙耶子は聞いたような気がした。

次の瞬間には、那薙の恫喝にも似た召喚に体中の細胞が震えた。「アツタノオオカミクサナギノミツルギ、其の祖おやなるムラクモの名

において、天降り給え」

始めは何も起こらなかった。やがて賽銭箱の上に置かれた短刀の上で空気がゆるゆると蠢く。それは華やかな色彩を放ち、うずくまる人影を成した。少しずつ、人影ははつきりとした輪郭をもち、古風な宮廷装束の女房姿となった。いわゆる平安朝の十二単に似ているが唐衣はなく、それほど重苦しくもない。長々と引いた裾の下半分を群青に染めあげた裳もが、賽銭箱の下へと垂れ下がっている。そのひとはゆっくりと面を上げ、やがて上体を起こし、賽銭箱の上に立ち上がった。

額には金の透かし彫りを施した高い円形の前天冠ぜんてんかん、額の両脇に立つのは菊の花飾り、その下に垂れる五色の紐は胸まで下がり、袖と裾の長い青摺あおすりの小忌衣おみころもにかかる。裾をさばいて一步出ると、緋の長袴が重なる若葉色の袷あこめと桜色の単ひとえの下からのぞいた。両の手には五色の紐が巻き付けられた桧扇ひおうぎ。

人形のように形の良い唇が動いた。

「やあ、叢雲。私を喚よんだか」

「なんて派手な格好をしているんですか、草薙」

那薙の呆れ声に、草薙は置まれた桧扇の先を口元に当てて、艶然と微笑んだ。

「久しぶりの顕現けんげんなんだ。人前に出る以上、それなりの演出とかしてみたいじゃないか」

「君のお宮で浦安なんか舞いましたか」

草薙の衣裳を上から下まで眺めた那薙が嘆息交じりに呟く。

「ああ、私は新しいものが好きなんだ。このごろは洋楽も聴くんだよ。巫女さんや若い神職たちがi podを持ち込んでいてね、休み時間に面白い律や拍子を聞かせてくれる。最近ではテレビも懷に持ち歩いて見れるんだね。まったく人間たちは面白いものを創るものだ。でも海外の歌姫や舞い姫の衣装はいただけないね。露出度が高すぎる。ところでこの供え物をどかしてくれないか。降りれないじゃないか」

那薙の指摘を軽くないなして、草薙は機嫌よく舌を回した。那薙は小さく嘆息して草薙の足元に並ぶかわらけを取り除いた。

「そんなかさばる衣装で来るからですよ。君の女装趣味には付き合いきれません」

「人聞きの悪いことを。そもそも、うちの本宮は女神仕様じゃないか。あなたが祀られていたときの采女うねめ装束姿をこの私が忘れるとでも……」

前で結んだ裳の帯をぐつと下に引つ張られ、前のめりになったために、草薙は最後まで言い終えることができなかった。

「忘れてください」

脅すように低い声で囁きかけ、帯から手を放した那薙は両手を伸ばして草薙の脇を支えた。草薙は那薙の肩に手をかけて寶錢箱から飛び降りた。長い裳裾が袖に当たり、横へ落ちたのを那薙が拾う。その隙に草薙は太田と沙耶子へと悠然と歩み寄った。

太田も沙耶子も、口を聞くなと言われる以前に、絶句していた。

ひと言で言えば、絶世の美人。ただ、肩から背中、そして裳の上へと滝のように流れ落ちる髪は、瞳と同じ艶やかな玉鋼色たまはがね。那薙の出した短刀の刃と同じ色だ。そしてその優雅なカーブを描く、薄紅色の唇から流れてくる声は低くて深い。

目元が少し那薙に似ていると、沙耶子は漠然と思った。那薙と同じ鋼色の瞳の中心には、猫のように縦長の瞳孔。

ふたりの人間に、口を開けたまま眼を見開いて見つめられた草薙は、不安そうに那薙を振り返った。

「叢雲、私はちゃんと人間に見えているか」

両腕を胸の前で組んだ那薙は、首を横にふった。

「かろうじてね。気張りすぎです」

「でも、真の姿を現したら、怖がらせるじゃないか」

今の姿でも充分に怖いと沙耶子も太田も思ったが、口は閉ざした。那薙は草薙の横に立ち、沙耶子と太田の額に交互に触った。

「もう声を出していいですよ。草薙のそばに小物は近寄れませんか

ら

那薙は、太田と沙耶子を草薙に紹介した。草薙は凄絶な美貌で笑いかけ、太田も沙耶子もこわばった笑顔を返した。

「叢雲を助けてくれたそうだね。辰子どのの搜索は、叢雲が我らのもとに戻るずっと前から行われていたんだけどね。彼女は完全に気配を消してしまっていて。まあ、彼女が隠れていたければ隠れていて、私たちはいっこうに構わないんだけど、辰子どのにぞっこんのご主人の八郎どのがうるさくてねえ。あの御仁に東北や北陸で暴れてもらっても困る。去年やっと有力な手がかりがつかめて、御佐和湖を調べようという話は出ていたんだ。だけど、場所が場所だけに私達には手が出せなくてね。御佐和湖の主はまだ若い、まつろわぬ神だから、われわれが出て行くとへそを曲げて何をするかわからない。そこに辰子どのがかかわっているとなるとね、慎重にならざるを得ないんだよ。そこへひよっこり叢雲が人間になって私たちの前に現われたものだから、これ幸いと彼に命が下ったんだよ。気の毒に」

ちつとも気の毒でなさそうに、広げた桧扇で口元を隠してくすくすと笑った。

「こんな面倒が待ちかまえていたと知ったら、今年の神議には行きませんでしたよ」

那薙は腕を組み、菅公に言ったのと同じ苦情を呟いた。

「ああ、君はでも、行かずにはいられないんだろ。神議の時期にしか、あの国の境を越えることが許されないのだから」

開いた扇の後ろで、耳に囁きかけられ那薙は渋顔になった。

「それで、菅公から報告は受けているけど、辰子どのが不穏なくらみを働いているというのは本当なのか」

那薙は重々しくうなずき、流木の龍像を顎で示した。

「御佐和湖畔に打ち上げられたものです」

草薙は腰を屈めて龍像を検分し、扇の先でつついてみた。

「たしかに辰子どのの痕跡が感じられる」

「御佐和湖では、人間たちが年に数回、不審な自殺を遂げているんです」

草薙は腰を伸ばして那薙の側に立った。

「それは穏やかじゃないね。人の祈りでなく、精命を糧にしているのでは、神とは言えない。誰かが止めなくては、やがて磁界層の律が乱される」

「辰子さんをですか、それとも、御佐和主をですか」

「どちらが主犯かによるでしょう」

草薙は桧扇を畳んで自分の首をとんと叩いた。思案顔で空を見上げる。眼を瞑り、風に耳を傾けて数分。皆が沈黙して草薙の言葉を待った。

ぱつと眼を開けた草薙は、ポンと桧扇で手を叩く。

「詔みことのりが降りました。辰子どのはとりあえず見つけ次第、封印。うちで次の神議まで預ります。裁定は評議の末、天つ大御神によつて下されるそうです。そうすれば、誰も叢雲を恨んだりはいしないでしょう。叢雲には御佐和主の処分を任せるとのことです」

「御佐和主の恨みを買いますか」

那薙は眉間に皺を寄せて指摘した。

「叢雲の名の下にまつろわせてしまえばいいじゃないか。国津神系くにつかみ統いっせいの荒神組合いっせいなら喜んで入るんじゃないかな」

「いつの間にそんな組合にぼくが入ったんですか」

那薙の声がいつそう低くなる。草薙は気にしたようすもなく上機嫌に続けた。

「叢雲といえど、荒神界の大御所でしょ。菅公が君なら組合長も務まると推していたよ」

「こちらから願ひ下げです」

那薙の返答も終わらぬうちに、草薙がくるつと体の向きを変えた。鋼色に輝く瞳が、沙耶子と太田をにこやかに見つめる。

「叢雲はいまはこんな無害な為りをしているけどねえ、かつては国中を怖れさせた祟り神なんだ。まあ、怒らせさえしなければ、命が

けであなたたちを守ってくれるから、かれをよろしくお願いするよ」
那薙は観念したように長く深い溜め息をついた。

草薙は数歩進んで沙耶子に近寄った。沙耶子にひたと視線をあてる。

「あなた、さやさんとおっしゃる？」

「はは、はい」

草薙の金属的な艶を帯びた白い頬に、混じりけのない喜色が浮かぶ。切れ上がった目尻が心なしか下がり、思いがけなく優しい表情になる。どこかで見たことのある笑顔だが、沙耶子は思い出せなかった。

「よい名です」

扇を広げて、太田と那薙から隠すように沙耶子の耳元に顔を近づけた。沙耶子にさえ、ようやく聞き取れるほどの小さな囁き。

「もし辰子どのや御佐和主との交渉がこじれたら、那薙にはあなたの助けが必要です。叢雲の神威は那薙の意志のみでは発動しない」

草薙は、緊張で固まっている沙耶子の耳に口を近づけ、さらに言葉注ぎ込んだ。沙耶子の鼻腔に、嗅いだことのない芳しい香りが満ちる。

「こんなところまで来て女性をナンパしている場合じゃないでしょう、草薙」

不機嫌に腕を組む那薙のもとへ戻り、その肩をとんとんと桧扇で叩いてどこまでも朗らかに草薙が励ました。

「もし荷が重くなるようなら、駆けつけるよ。これを鳴らしてくれたらいい。叢雲と私の御霊がとけあった依り代であれば、短時間ながら結界がなくても顕現できる。私の霊力を叢雲に流し込むこともね」

桧扇を差し出し、那薙に手渡した。扇をどう鳴らすのだろうと沙耶子と太田が疑問に思っていると、草薙の姿がどんどん薄くなっていってやがて掻き消えた。那薙の手の中には、扇は消えて草薙の依り代に使った短刀が残された。そして、その短刀には鍔の部分に八

個の鈴が付き、柄の端には五色の細布が垂れていた。

鈴になった分、刃渡りが半分以上短くなっているのを見て、那薙はひどくがっかりした。

「この短刀、夏のボーナスを全部つぎ込んで名匠に鍛えさせたのに、神楽鈴にされてしまうなんてあんまりです」

那薙の苦情に応えるように、鈴がラインと冬空に澄んだ音を立てた。

草薙が去ったのを見て、太田がこれまで呼吸を止めてでもいたかのように大きな息を吐いた。掠れた声で那薙に問いかける。

「あの、つまり、これが矢幡さんの親戚側の事情なんですか」

「ご理解いただけましたか」

太田と沙耶子は首を横にふった。沙耶子がおそろおそろ訊ねる。

「それで、矢幡さんは、人間じゃないということなんでしょうか」

「草薙の話を聞いてましたか。ぼくは人間ですよ。今はね」

「で、ムラクモというのは」

「彼らの世界での、ぼくの通り名です」

「で、草薙さんと叢雲の矢幡さんはご親戚同士と……」

「那薙でいいです。草薙は叢雲の御魂を分けた神霊です。叢雲にもつとも近い、そして唯一の親族です。草薙は某大手神社の立派な祭神ですが、叢雲は海の底で神体を失って以来、人間に生れることを繰り返してきました。叢雲の記憶や属性が半端に残っているので、両方の世界に片足ずつ突っ込んでいるような人生です」

まぶたを掌で押さえながら、那薙の疲れた声が寒風の中に沈んでいく。

太田と沙耶子は顔を見合わせた。

「国際秘密警察のエージェントじゃなかったな」

「陰陽師でもなかったのね」

それから声をそろえる。

「じゃあ、矢幡さんは、かみさま」

「人間です。かつては八百万の神々の一柱であった、というだけの」

ふうーと息を吐いて沙耶子はしゃがみこんだ。那薙も膝をついて、心配そうに沙耶子を覗きこむ。

「信じられないでしょう？」

沙耶子はこっくりとうなずいた。草薙の靈威に感応したために、那薙の瞳孔は玉鋼色に輝く虹彩の中心でやや縦長になっていた。人間離れたそれを、しかし沙耶子はきれいだと思う。

「でも、納得しました」

太田も同感らしくうなづく。

「ああっ」

那薙が突然立ち上がり、空を仰いで呻いた。

「どうしたんですか」

沙耶子と太田が驚いて声をかける。

「菅公がぼくにクラチとミズチをつれて来させた理由を訊くのを忘れました。彼らの役割がなんなのか、ぼくも知らないんです。草薙はいつも自分の言いたいことだけ言って行ってしまふ。呼び出しているのはこっちなのに」

沙耶子と太田は顔を見合わせた。互いの瞳と表情から、那薙に対して抱えていた不気味さと怖れが氷解していくのが見て取れる。どちらからともなく口の端がゆるんで笑い泣きのような顔になった。

「神様ってほんとうにいるのね」

沙耶子は口の中で呟いた。

那薙は手早く片づけをすませ、杜からさらに数本の榊の枝を切ってきた。揃えた榊を束ねたあと、バックパックから袋菓子を出して太田と沙耶子に勧めた。ソフトタイプのチョコレートクッキーだ。

「お腹がすいたでしょう。どうぞ」

沙耶子はカロリーが高そうだと思い、来る前に昼食を食べたばかりだと言おうとしたが、太田が胃の辺りを押さえて同意した。

「そっいえば、そうですね」

なるほど沙耶子も空腹を感じた。しかし指摘されなければそれに

気づかないほど気分がよかった。百メートルを全力で泳いだような爽快感と疲労感に似ている。

「草薙のように霊力の強い神に近づきすぎると、命の気が活発に流れて新陳代謝が上がります。活力に溢れるのはいいのですが、それは老化を促進することにもなるので要注意です。人の肉体が維持できる気には、限りがありますからね」

促されるままに沙耶子たちは渡されたクッキーを齧った。那薙もひとつかみとって食べ始める。

「八幡さんは……」

沙耶子が遠慮がちに問いかけた。

「那薙でいいです」

「那薙さんは、大丈夫なんですか。ご親戚だから？」

「ぼくも人間の肉体を持つ以上、彼らとかかわっていたら、あまり長生きはできないと思います」

なんでもないことのように、さらりと断言してしまう那薙に、沙耶子も太田も絶句してしまった。

流木を抱え上げた那薙は、二人を促して車へと向った。鳥居の下で暇乞いの礼拝を捧げ、石段を降りる。

「槇田さん、前に座りたかったらどうぞ、あとは御佐和湖まで一本道ですから、太田さんの運転にぼくの案内は必要ありません」

「私は別に、どちらでも……」

スーツケースの中身のことを言っているのだと気づき、沙耶子は迷った。蓋はしてあるのだし、那薙にとって特別らしい蛇たちを嫌悪する態度はどうかと思う。言葉に詰まっている沙耶子に、那薙は助手席のドアを開けて入るように促した。

沙耶子は礼を言っただけで助手席に座った。

御佐和湖へと車が向かう間、太田はときおりちらちらとバックミラーに眼をやって那薙のようすをうかがう。太田が何を見ているのかと沙耶子も気になり、首を少し曲げて後ろを見た。

那薙は、草薙の残した鈴つきの短刀を掌に乗せてじっと見つめて

いる。

「どうかしたんですか」

沙耶子は不安になって訊ねた。那薙ははっとし、夢から覚めたように沙耶子の顔を見た。

「草薙がこれを置いていった理由を考えていたんです」

「理由？　これで草薙さんと呼ぶんですよね」

「草薙が出てこなければ片づかない事態になるかもしれない、ということがある。太田さんたちにはばくを御佐和湖でおろしてもらって帰ってもらったほうがいいんじゃないかと思っていたんですよ」

太田が語気を強くして口を挟む。

「どういうことですか。おれたちじゃ役に立たないからですか」

「危険なのは確かです。辰子さんや御佐和主が攻撃に転じたら、ぼくにはあなたたちを守りきれない自信がない」

太田と沙耶子はそれぞれに那薙の言葉を咀嚼した。これまで相手を煙に巻くような話し方しかなかった那薙の話が、妙にわかりやすくなったのが気になる。

体格で劣る那薙に守ってやれないから帰れと言われたことに、太田はムキになった。

「那薙さんに守ってもらわないですよ。ぼくはこれでも柔道二段ですし」

那薙は口の端を少し上げた。笑ったようだった。

「この神楽鈴は、ほこきすすず銚先鈴すざきすずといって三種の神器をかたどったものなんです。銚は剣、鈴は玉、鐸は鏡。あらゆる神を鎮める力を表しています。RPG風に言えば、最強のアイテムなんです。表しているといっても、効果はこの祭具に乗せる力の質と強さに左右されます。それを託された意味を考えるとですね……憂鬱になりませんか」

なりませんか、と問われても、太田も沙耶子も返事に困った。太田としては危険だから下がりなさいと言われても、奈津子の消息は確かめなくてはならない。那薙が辰子と御佐和主で手一杯なら、沙耶子を守り、奈津子を助けるのは自分ではないかと肩に力が入る。

そして沙耶子は草薙に言われたことが心にかかっていた。

「草薙さんが、那薙さんには助けが必要だと言っていました。人の助けが」

那薙は驚きをあらわにして、沙耶子を見つめた。それから眼を細めて窓の外へと視線を向けた。

「他に何か言っていましたか」

「叢雲の神威は、那薙さんの意志だけでは発動しないと」

那薙は低く唸って顔をこすり、前髪をかきあげて、かきむしった。「草薙に謀られましたね。叢雲自身の神威を出さないと、まつろわせられぬ相手というわけですか」

那薙はそのまま窓のほうへ顔を向けたために、二人から表情が見えにくくなった。

第七章 入瀬主の証拠

太田は御佐和湖への登山口駐車場へと車を入れた。

トランクからダイビングの道具を引っ張り出している沙耶子に那薙が声をかける。

「酸素タンクは必要ありません」

「え、でも、湖の底まで行くんですよ」

「今日は一気に辰子さんか、御佐和主の居場所に行きます。そこでは逆にタンクは邪魔になります」

「あのおれは……」

ダイビングの道具を持ってきてない太田は手持ち無沙汰だ。

「太田さんにも役割があるはずですが、ぼくにはまだわかりません。奈津子さんをこちらに取り戻すために、きっと太田さんの力が必要なのでしよう」

太田は緊張してうなずいた。

「あ、おれ、スーツケース持ちます」

重たそうなバックパックを背負って、スーツケースをふたつ抱えた那薙に、太田は慌てて申し出る。那薙は礼を言ってスーツケースのひとつを渡した。

那薙はふたりに背を向け、低い声で詠唱を始めた。それはふたりには理解できない言語と思われた。痩せた体から出せるとも思われない深く低い言霊が、山の中で反響し繰り返し木霊する。カラスが一羽、二羽と駐車場に舞い降り、集まり始めた。沙耶子と太田は体を寄せ合って黒さを増してゆく駐車場を見回した。中にはカササギや雀、雉のほか、種類のわからない野鳥が混ざっている。森のはずれに目をやると、鳥だけでなく鹿や猪の影まで見えた。

那薙は両手を広げ、頭の上で二度叩いた。

鳥は一斉に飛び立ち、獣たちの影も消える。

「今のは……？」

問いかけたのは太田だ。振り返った那薙の瞳が、草薙のそのように玉鋼色に光っている。

「ここの山の神とその眷族に人間たちがしばらく入ってこれないように、湖と周辺の山に結界を張るように要請したのです」

太田と沙耶子はぐると空や周囲の山々を見渡した。そこかしこに那薙の命を聞く神霊が満ちているのかと思うと、ぞっとしたものか、畏れ入ったものか判断がつかない。

「行きましょう」

三人は登山道へと足を踏み入れた。

冬の凜とした空気のなか、森の常緑樹の梢から弱い陽光が射しこむ。川の清涼なせせらぎに沿って整備された登山道に人影はない。樹木の切れ目に、細い滝の落ちる断崖が垣間見える。森は静寂に包まれていた。

「山道から外れないように、それから、ぼくからあまり離れないで下さい」

那薙は後ろのふたりに警告した。

「おれたちのほかには、誰もいないんですよ」

太田があたりを見回して訊ねた。

「人間はいませんけどね。複数の神に結界を張らせましたから、磁場が不安定になっていて、神や人間でないものも引き寄せやすくなっています。たとえば」

那薙は歩調をゆるめて、ふたりへとふりむいた。脅すように薄い微笑を口元に浮かべて立ち止まる。

那薙はスーツケースを太田に渡し、ふたりの間を抜けて足早に数歩戻った。遊歩道から三歩外れて、羊歯したの繁みに手を伸ばす。何かを掴み、持ち上げる動作をした。

「見えますか」

戻ってくる那薙の手元を見て、太田はきょとんとし、沙耶子はひっ、と息を呑んだ。

「何が見えるんだよ、さっちゃん」

「太田さん、見えないの？ クラゲみたいに透けたぶよぶよしたのが」

太田は蒼ざめ、沙耶子は身震いをして訊ねた。

「なんですか、それ。那薙さん」

「粗霊の一種です。太田さん、手を出してください」

太田は言われるままに右手を差し出した。那薙が見えないものを差し出す仕草をしたと同時に、太田の背筋に悪寒が走った。何かに触れた感触もないのに、掌からぞぞと体温を吸い上げられて悲鳴を上げる。

那薙は一步下がり、太田は泥水でも切るように右手をぶんぶん振った。

「人間の精命を糧にするタイプのものですね。まだ雑魚のうちですが、念は強い。憑かれたら厄介です」

言い終えた那薙は、両手で『粗霊』なるものを挟むように胸の前に持ち上げた。

「ホムスビノカミ、浄めたまへ」

那薙の低い声に、半透明の粗霊がのたうつのが沙耶子の眼には見えた。セロハンに火をつけたように、あつというまに青褪めた火焰を上げてくるくと縮れてゆく。

沙耶子は両手を口に当てて息を詰めた。太田が息を呑むのが聞こえた。

「太田さんにも見えるの？」

「青い色の線香花火みたいなのが……」

太田は掠れた声で応えた。見えているものが同じでないということに、沙耶子は愕然とする。

那薙の掌には、青白い小さな繭のような、卵のようなものが残された。

「火産霊ほむすびの火で浄化しましたから、春には別の命あるものに生れてくるでしょう」

那薙はその小さな粒を森の奥へ放り投げた。

沙耶子は、遊歩道の左右を見回してぞっとする。

「この森には、あんなのがいっぱいいるんですか」

「粗霊そのものは、森にも街にも、どこにでもあります。だれも、見えないから、気がつかないだけです」

那薙は憐れむように言った。太田からスーツケースを受け取る。

「ただ、この森の磁場に異変を感じて、もっと上級のもものが集まり始めています。『念』だけでなく『意思』を持つ粗霊や、実体を備えた妖霊がね。気をつけてください」

太田と沙耶子は足早に那薙の後を追った。

遊歩道が川の岸まで近づいたところで、那薙は両手の荷物を置いて水際へ降りた。砂利に膝をつき、バックパックを背中からおろす。太田と沙耶子も荷物を置いて、那薙の背中を見守った。ふたりとも、那薙が前置きもなくかれにとって『必要な手続き』を始めるのに慣れ始めていた。

那薙はバックパックから取り出したかわらけに、小瓶の吟醸酒を注いだ。豊潤な香りのする液体に、抑揚をつけて水神の名を吹き込んだ。

「くらおかみのかみ、くらみつはのかみ、くにのみくまりのかみ」

一度だけの詠唱が森の空気に溶けたころ、那薙はかわらけを持った手を水の上に伸ばした。手首を返し、かわらけごと酒を川中の石に投げつけ、大声で川の主を呼ばわった。

「ハヤセオオサワイルセヌシ」

素焼きのかわらけの割れる音に乗って、那薙の言霊は草薙を召喚したときのように空気を震わせ、水面に大きな波紋を広げた。那薙はさらに早口で何か唱えながら水の上に前かがみになり、パーカーの袖を上げて左腕を肘まで川の中に入れた。とたんに焼けた鉄に水をかけたように蒸気が上がる。その蒸気が凝って白い塊となった。塊の上部の、丸い頭らしいものが那薙のほうへ向けられる。那薙の深みを増した声が腹の奥から流れ出た。

「入瀬主、たしかにこの流れでクニマスを見たのだな」

『是』

「クニマスはその後、現われたか」

『否』

「その骨も残ってはいないのか」

那薙の左手が浸かっている近くの水面に泡が立ち昇る。白い小さなかけらが浮かび上がってきた。那薙は右手でそれを掴み上げた。

「礼を言う」

左手を水から引きあげると、蒸気はおさまり、入瀬主の白い影はかき消すようになくなった。那薙の左腕は赤みを増してまだ湯気を立てている。

パーカーの袖は巻き上げられていたものの、飛沫を浴びたために那薙の髪も肩もずぶぬれなのを見て、沙耶子はタオルを出して駆け寄った。

「必要ありません」

「でも雪が降ってくるのに濡れたままでは」

沙耶子が言い終わる前に那薙のパーカーから蒸気があがり、数瞬後にはパーカーも髪も乾いていた。

「すごいですね」

沙耶子は感嘆の声を上げた。

「けっこう便利ですよ」

那薙は眼にかかる前髪をかきあげた。朝に見たときより伸びているような気がする。沙耶子は思った。霊力と新陳代謝がどうかと言っていたのを思い出し、那薙自身も異能を発揮するたびに髪が伸びているのだろうかと推測する。

「あの白い影は川の神様？」

沙耶子は川のほうを見て訊ねた。

「早瀬大沢入瀬主。はやせおおさわ いるせぬしイモリ属性らしいですが、ぼくも詳しいことは知りません」

那薙は会話を打ち切るように川岸から山道へと大股に駆け上がった。沙耶子たちは慌ててあとを追いかけた。

山道は傾斜を増し、三人は息が上がらないよう無口になる。雪は止んでは思い出したようにひらひらと舞い、那薙はときおり気がかりそうに鉛色の空を見上げた。山に入ったときはまだ見えていた青空は、もうどこにもない。今朝の天気予報では、雪雲の前線はここまで来てないはずだった。だが、山の天気は予測がつかない。吹雪にならないことを祈るしかなかった。

ようやく森が開けた。鉛色の空を映すこともなく、濃い瑠璃色をたたえた御佐和湖が見えてくる。那薙は遊歩道から離れ、上下左右に注意を払いながら木々の間を歩き回った。あまり湿っていない枯れ草の上に荷物を降ろすよう、二人に指示した。

沙耶子はふたりから離れすぎない木陰で、特別に調達した潜水用のドライスーツに着替え始めた。

「太田さんにはここで待つてもらおうことになりますから、妖霊や粗霊の干渉を受けないよう、結界を張っていきます」

那薙は口を動かしながら、スーツケースの中から長い麻縄を取り出し、周囲の木に結わえ付けていった。八本の木の下枝に張られた縄は八角形の閉じられた空間を作り出す。麻縄には等間隔をおいて何度か折り返した白い紙が下がっていた。

「これは、注連縄しめなわですか」

太田は頓狂な声を上げた。

「そうです。ぼくたちが戻るまで、ここから出ないで下さい。この中にいる限り、太田さんは安全です」

「神道の作法には詳しくないんですが、中にいればいいんですか」

「ぼくもいまどきの神道には詳しいわけじゃありません。叢雲が祀られていたのは八百年以上も前のことですから、当時とはやり方も随分違いますし」

那薙は顔を上げて困惑気味に笑った。

手際よく注連縄を張り終え、那薙は注連縄に沿って塩をまいた。

柵にも白い半紙を折り返した紙垂しでを麻紐で結わえ付け、手際よく丸石を集めた竈かまどの四方に立てる。竈の中には枯れ枝を積み上げ、丸め

た紙を下に入れてマッチで火をつけた。風が当たらないように両手で小さな炎を包み込み、低い声で囁きかけた。

「ひのかぐつちの……うわっ」

名を呼び終わる前に炎は突如高く舞い上がり、那薙は驚くほどの敏捷さで後ろに下る。たんぱく質の燃える臭いがした。那薙は縮れてしまった前髪を払い落とした。

「大丈夫ですか」

太田が勢いよく燃え盛る炎と那薙を見比べながら訊ねた。

「髪が焦げただけです。相変わらず、こっちが人間だってことをあつさり忘れてくれます」

それから那薙は手早くウェットスーツに着替えた。いろいろ異能はあるにしても、ウェットスーツは必要なんだなと感心している太田のほうをふり返る。

「その焚き火に薪を足す必要はありません。この火が消えたら、ぼくたちは帰ってこれないという意味です。そうなったら太田さんは榊をひとつ持って、すぐにこの山を降りてください。榊を持っていれば、邪霊は太田さんに触れることができません。駐車場までいけば、人界に戻れます。榊はどこか通りすがりの神社に納めてください。そして関東に帰り、何もかも忘れて以前の生活に戻るのです」

「奈津子は」

太田は掠れた声になる。

「ぼくたちが戻れなければ、奈津子さんも戻りません。沙耶子さんも」

那薙は、ドライスーツに着替え終わってそばに来た沙耶子へと向き直った。

「本当に、ぼくと来るつもりですか。人の世に帰ってこれないかもしれないですよ」

「おれが那薙さんと行くべきなんでしょうが」

太田が情けない声をだした。

「太田さん、ダイビングしたことないでしょう。まして冬の湖でス

キンダイビングなんて、いくら男性でもアマチュアには自殺行為よ。私を信じて」

「たいした自信ですね」

那薙は薄い笑みを浮かべる。

「草薙さんが言っただんですよ。那薙さんには私の助けが必要だと。だから、ついていかなかったら、那薙さんが困るんです」

「怖くないんですか」

沙耶子は青く澄んだ湖を見つめ、また那薙へと視線を戻した。

「なんだか、とてもわくわくしているんです。変ですよ。草薙さんが魔法をかけたんでしょうか」

那薙は沙耶子のオーラが草薙に会ってから変わっていることに気づいていた。明るい真珠色に虹色が混ざり、ときおり太陽のようなオレンジ色に輝く。

那薙が森で捕まえた粗霊を、沙耶子のはつきりと見る事ができた。そのことから、草薙が沙耶子に何かを授けたのは確実と思われた。

君を信じますよ。草薙。

「方向が定まるまで、沙耶子さんも注連縄の中にいてください。御佐和主か、辰子さんの磁界まで押し通るのに、山津神や水神たちと協議しなくてはなりません。その間、ぼくはあなたたちのことまで気を配れないので」

那薙は浜に下りた。二本の櫂を並べて立てた間に、流木の龍像を据えた。湖に赤瑪瑙の眼を向け、入瀬主に渡された魚の小骨を角の間に乗せる。

那薙は地面に膝をつき、詠唱を始めた。深く、低い声が冬の空に流れてゆく。

「くにのさづちのかみ、くにのさぎりのかみ、くにのくらどのかみ……」

森が、鏡を合わせたように幾重にも奥行きを増した。ちらつく小雪も、冷たい風も変わらないのに、結界の中から見える世界が歪み、

馴染みのない時空と重なってゆくのがわかる。沙耶子は息を詰めた。神々の領域。

那薙の姿が陽炎のように揺れる。かれはいま、山の神霊たちに囲まれているのだ。

那薙は山の隅々に居坐す神々の名を呼ばれる長い詠唱を終え、砂利に額づいて拝し、呼吸を整えた。さらに音階を上げて水神たちの名を唄い始める。

「あめのみくまり、くにのみくまり、たかおかみのかみ、くらおかみのかみ……」

沙耶子はこれが叢雲の声なのだと悟った。大地の底からわきあがるような、それでいて荘厳な響きをもち、大気も水も震わせる。那薙が神々の名を呼ぶときに、叢雲の靈威がその声を包み込む鞘となり、時空を突き抜けてゆく。

湖がさざめき、水面が泡立つ。那薙が詠唱を終え、濡れた地面に再び額づくのがぼんやりと見えた。

那薙が体を起こした。

森のあちこちから海鳴りにも、あるいはパイプオルガンにも似た、腹の底に響くさまざまな音階の音が押し寄せる。

沙耶子と太田には何が起きているのかわからない。那薙の後姿はすりガラスの向こうにあるように、ぼんやりとしか見えず、御佐和湖の波は高く泡立ち、厚い霧が絶えず森から流れてくる。

息を殺しているふたりの横でカチリと音がした。スーッケースが開き、中からミズチが這い出す。

「あ、出たらダメ」

止めようとする沙耶子に注意を払うこともせず、ミズチは注連縄の下を潜り抜け、那薙の元へと這い進んでゆく。スーッケースの中からクラチが首を出してことの成り行きを見守っていた。

那薙が膝に登ってくるミズチに気づいて下を向いた。ミズチ是那薙を見上げ、そのまま前へ進んで龍像に巻きつく。クニマスの小骨を飲み込み、ふたつの赤瑪瑙も飲み込んだ。

一切が、静まりかえった。波はおさまり、那薙を囲んでいた霧のような影も消えた。

那薙はゆっくりと立ち上がり、沙耶子たちの注連縄で張られた結界へと戻ってきた。

「ミズチが水先案内の役割を負っていたとはね。ということはクラチはここに残ることになるようです」

手を差し招いてクラチを呼び寄せる。

「クラチ、太田さんをよろしくお願いします。この結界を守ってください」

太田へと、玉鋼色に光る瞳を向けた。神霊たちに囲まれたせいか、肌の色も心なしが白さを増し、金属的な艶を帯びていた。草薙の肌がそうであったように。

「何があっても結界から出ないで下さい。クラチが敵意を見せるものには、視線を向けても呼びかけに応えてもいけません。たとえそれが、奈津子さんの姿をしたものであってもです。ぼくたちが行った後は、この森にいる人間はあなたただけだということを忘れないで下さい」

太田は唾を飲み込みながらうなずいた。那薙はバックパックから防水のウェストポーチを出して鉾先鈴を入れ、腰に下げた。そして脱いだシャツの内側から小刀を取り出し、左腕の革ストラップに抜き身で差し込んだ。

いったい何本の刀を持っているのかと、沙耶子が呆れる。その目つきに、那薙が苦笑いを返した。

「この二本だけです。どちらも高価なものですからね。やたらに替えがききません」

「刀って、高いんですか」

「この小刀と短刀は最高級の和鋼わこうを鍛えた刀です。この二本で軽自動車が新車で買えてお釣りがきますよ」

「そんなにするんですか」

包丁の値段くらいしか知らない沙耶子は息を呑んだ。

「本物の和鋼ですか。日本刀にしか使われないって……」

太田が近づき、那薙の短刀に触りたそうにする。

年々生産量の減っている和鋼、日本古来のたたら吹きたまはかねの製鉄法のみで造られる玉鋼。十三トンの砂鉄から、わずか一トンしか造り出せない玉鋼を鍛錬した刀剣は、高価であるという以上に、なかなか手に入るものではない。

刀剣の価値に多少の知識を持つ太田は、同情を込めて囁いた。

「それを鈴にされたんじゃ、残念なわけですよね」

「わかつてもらえますか」

那薙は口調に落胆を滲ませつつバックパックの中をかき回し、数枚の板チョコを出して銚先鈴を入れた防水バッグに詰め込んだ。太田にも一枚差し出す。

「バックパックには他にも食べものが入ってますから、お腹がすいたら食べてください。動かないと寒いですからね。食べて体温を保つしかありません」

そう言いながら板チョコをひとつ、包み紙を破って半分に折り、沙耶子に手渡した。

「食べられるときに食べておきましょう」

言われるままに沙耶子はチョコレートを頬張った。

那薙はクラチの首を掴み、ふたりから少し離れ、背中を向けた。

「さきみたま、くしみたま、あらみたま、にぎみたま」

あの深く低い声で言霊を紡いだかと思うと、那薙はふたりに背中を向けたままうつむく。同時にクラチが胴を鞭のように波打たせ、那薙に絡みついた。沙耶子も太田も食べかけのチョコを手には啞然とする。那薙は何食わぬ顔でふり返り、体に巻きついたクラチをほどこいて結界の中に戻した。

「ではクラチをよろしくお願いします」

元気に這い回るクラチを後に、那薙はミズチの待つ波打ち際へ向けて歩き出した。いまのはなんだったのだろうと首をかしげながら、沙耶子も後に続く。

水際まできた那薙は、沙耶子にふり向いた。その眼に戸惑いが浮かんでいる。

「どうしたんですか」

「水面下で息を保つために、必要なことがあるのですが」

「なんででしょう」

「風神の力と叢雲の言霊を混ぜて、あなたの体内に注ぎ込みます。それで水底でも半時は持つはずですよ」

「わかりました」

那薙は右手を上げて小さな円を描き始めた。ゆっくりと名を呼ぶわ。

「しなつひこ、しなとべのひめ」

二人の回りで小さな龍巻が起こり、那薙の指先に集まった。その指先を口元へおろす。

「さきみたま……」

さきほどクラチに授けたのと同じ言霊を唱え始めた。

「沙耶子さん、口を開けてください」

そういえば、いつからか那薙には名前と呼ばれている。沙耶子はそんなことを思いながら口を開けた。那薙と沙耶子の髪が靡き、眼や頬に当たる冷たい空気に風が渦を巻いているのがわかる。那薙はその風を吸い込んだ。何が起こるのだろうと思っで見つめている沙耶子の後ろ首に手を伸ばした那薙は、沙耶子を引き寄せるとそのまま唇を重ねた。

え、ちよつと待て、と沙耶子が反応する前に、熱い気体が沙耶子の喉を駆け下り、胃の腑に落ちた。それがなんなのか考える間もなく、体中に陽の気が満ち、活力がみなぎった。

それは最初に会ったときに人工呼吸を施された、あの感覚と同じだった。頬がぼうつと熱くなる。

「失礼しました。最初に言っ嫌がられたら困るので」

顔を放した那薙は謝罪した。嫌ではなかったが、それより沙耶子は気がかりなことを思い出した。

「もしかして、クラチにもおなじことをしませんでしたか？」

那薙は決まり悪そうに眼をそらした。

蛇と間接キスって、どうよ。

絶句したまま固まっている沙耶子の横で、膝を曲げて屈みこみ、那薙はミズチを拾い上げる。やはり先ほどの『さきみたま……』を唱えた後に、ミズチの口の中に息吹を注ぎ込んだ。ミズチは激しく胴体を波打たせて那薙に絡みつく。沙耶子はますますゲンナリした。那薙は本心から申し訳なさそうに謝った。

「すみません。叢雲の御霊を込めた言霊を体内に注ぐ方法が、他にないものですから」

問題はそこじゃなくて。蛇と同列……。

数秒前に頬に上ったのとは別の熱が、耳まで駆け上がる。沙耶子はきつと顔を上げた。

「半時しかもたないんですね。急ぎましょう」

すたすたと波打ち際へと歩き出し、沙耶子はそのままばしゃばしゃと水の中へと進んだ。そのあとをミズチを腕に絡ませた那薙がついていく形になる。追いついた那薙は沙耶子の腕を掴んで、そのまま潜るように促した。

ふたりが水面に残した波紋を遠くに見つめながら、太田は腰を下ろした。那薙はちょうどよい具合に、切り株の近くに焚き火を用意してくれていた。手の中には板チョコ。那薙のバクバクの中を覗きこんで苦笑いしてしまう。コンビ二おにぎりとアンパンが三個ずつ。これは遠足かと思うほどの高カロリーー携帯食。

「なんというか、祟り神にしては気の回る人なんだな。気苦労が耐えない感じだけどさ、君のご主人さまは。甘党らしいのに太れないようだし」

小瓶に少し残った吟醸酒を舐めながら、火の横でとぐろを巻いているクラチに話しかける。クラチは持ち上げた鎌首を同意するように上下に動かした。こうして見ると離れた眼と長い顔に愛嬌があり、

それほど怖いとか気持ち悪いとか感じなかった。むしろ、ひとりぼっちで待たされずにすんだことに少しばかりの安堵を覚える。

太田はちらつく雪を見上げ、頭を濡らさないようジャケットのフードを頭にかぶった。

「さっちゃんに気があったとはね。そんな素振りもなかったのに。わかんないものだ」

太田はかぶりをふりながら、チョコレートを齧った。

第七章 入瀬主の証拠（後書き）

この原稿を書き終えたときには、まだサカナくんはクニマスを発見されてませんでした。

絶滅が信じられていたのに、まさかネタにして書いて半年後に生存が確認されるとは……愕然としました。

第八章 御佐和主の磁界

湖の底は、透明な青が群青の闇へと続いている。ゆきすぎる大小の魚影や、ゆれる水藻、屈折する光の織り成す青の濃淡を愉しむ余裕もなく、先を行くミズチの後を追って那薙と沙耶子は深みへと潜っていた。

水の中にも、那薙の言う神や妖の結界なるものがあるのだろう。体をうねらせながら泳ぎ進むミズチは、ときおり動きを止める。くるくると回転しては、直進を諦め左右や上下へと方向を転換した。そのたびにあとを追うふたりも向きを転じる必要があった。一度、ミズチに近づきすぎて方向転換の間に合わなかった沙耶子は、たしかに青く透明な、ゼリーにも似た障壁に触れたと思った。

フルフェイスの潜水マスク越しに水中ではつきりと見えるのは、淡く青白い燐光を放つミズチの、細長い体だけだ。

沙耶子の上腕に那薙の手が軽く添えられたまま、その手が離れることはない。ドライスーツ越しに、那薙の熱い体温が伝わってきた。雪の降る高山の湖であるにもかかわらず、まったく冷たさも寒さも感じないのは、アイスダイブ用のドライスーツのお陰だけでもないと沙耶子は思った。沙耶子の潜水スーツは防水性の、頭のてっぺんから指先まで覆う、露出のない特殊なものだが、那薙のは普通のウエットスーツだ。頭と顔、手は露出していて、マスクもしていない。肌に触れる水が冷たくないのだろうかと沙耶子は心配になる。

ミズチの青い燐光に、那薙の頬は白く硬質な輝きを返す。おそらく、いまの那薙は皮膚感覚も人間のそれを越えているのだろう。

ミズチは岩の切り立った断崖に沿ってしばらく進んだあと、V字型の切れ込みの上で二回円を描き、垂直に降り始めた。もう自然光は届かない。

少し前から耳の痛みを感じていた沙耶子は、腕のダイバーコンピュータを見て水深を確かめた。すでに沙耶子のライセンスでは限界

の三十メートルを超えている。この手のカルデラ湖の水深は、百メートルを超えることもあることを思い出した。沙耶子の潜水能力では、これ以下の水深は十分ともたないだろう。

那薙が沙耶子の動きに反応して、速度を落とした。沙耶子は腕の蛍光表示を那薙に見せる。ちらりと数字を見た那薙は、真の闇へと続く断崖の下を指差してから、両手を伸ばして沙耶子の耳を包み込んだ。耳の痛みがすうっと退いた。

白い燐光を放っているかのような指を伸ばし、那薙は水中に円を描いた。薄く開いた口から小さな気泡が立ち昇る。那薙の指先から生れた小さな水流が、輪を描いて那薙の吐く気泡を巻き込み、沙耶子たちを包み込んだ。絶えず感じていた水圧がふうっと消える。

那薙が手振りで沙耶子の腰を示した。沙耶子は、もしかしたら必要かもしれないと思って腰に装備しておいたハロゲン水中ライトに手を伸ばし、明かりをつけて断崖の下を照らした。

驚いた魚の群れが、崖のあちらこちらで逃げたり隠れたりする。少し先で待っているミズチの青や緑の鱗が、白いライトの中で煌いた。美しい生き物だと沙耶子は思った。蛇であることを除けば、であるが。

那薙に促されて、沙耶子はさらに底を目指して潜り続けた。

崖の途中に、洞窟があった。種類のわからない大小の淡水水棲生物の姿が見られるが、数は少ない。ミズチはその洞窟の中へとふたりを導いてゆく。

沙耶子の持つハロゲンライトに照らされた洞窟の中には、二十センチから三十センチあまりの、眼の大きな灰色の小さな魚群が泳ぎまわっていた。かれらは沙耶子の照らす突然の光に脅え、一斉に洞窟の奥へと泳ぎ去った。

那薙はミズチの前に出て、逃げる魚たちを追う。洞窟の奥まで泳ぎ着くと、体長が三メートルを超えた巨魚が、灰色の魚たちを飲み込んでいた。灰色の魚たちはわれ先にと巨魚の口の中へ逃げ込んでいるようだ。

ハロゲンライトの白い光に照らされた巨魚の体は、茶色に黒の縄目模様の鱗に覆われ、魚というよりは爬虫類を思わせる。サンショウウオを連想させる半円の平たい頭、がま口のようにぱくりと割れた大きな顎の奥へと魚群は消えた。閉じられる前の大きな口には、鋭そうな歯がぞろりと並んでいる。

巨魚はざろりと闖入者たちを睨みつけ、太く長い体を翻してふつと姿を消した。那薙が巨魚の姿の消えたところまで進んだが、そこは行き止まりになっていた。見上げると巨魚は岩の裂け目を通って上へと泳ぎ去ってゆく。

那薙はミズチを呼び寄せ、何事か囁きかけると、躊躇なく巨魚のあとを追いかけた。あとを追おうとする沙耶子の側にミズチがすり寄り、するすると沙耶子の胸にまきついてきた。驚き叫びそうになって危うく踏みとどまる。ミズチは沙耶子の胸にふた巻きしたあと肩の後ろから顔を出して、沙耶子の目線に鎌首を持ち上げた。

至近距離で眼が合う。頭は青い燐光を放ちながら左右に揺れていた。理由があつてこうしているのだと考えた沙耶子は、ミズチに巻きつかれたまま那薙の後を追った。

数メートルも上昇したところ、ふいに重力を感じた。まるで、一気に浅瀬に浮き上がったかのような錯覚を覚える。那薙の張った水の結界は急激な減圧から沙耶子を守ってくれたようだが、突然体が重たくなる感覚は避けられなかった。

突然、固まりかけたゼリーのなかに突入したような感覚に体が絞られる。沙耶子は那薙の姿を眼で追った。重くまとわりつく水の中で、ミズチが沙耶子の体を引きずるように進んでいく。

ねっとりとした水の壁を突き破って、沙耶子は濡れた岩の上に倒れた。ミズチは沙耶子から離れようとしなない。ハロゲンライトの中に浮かび上がる洞窟は、ブラックライトに照らされたかのような青い闇に包まれていた。そこが水の中なのか、陸なのか、沙耶子にはわからなかった。

「沙耶子さん、ミズチから離れないで。ここは御佐和主の磁界の中

ですから」

那薙の声が洞窟に反響した。体の重さから、沙耶子はここが水中でないことは確信したが、空気中とも思えなかった。

那薙は岩棚の上に立ち上がり、暗い奥を見つめていた。

「御佐和主、辰子さんの居場所を教えてくださいませんか。そうしたらあなたの領域には手をつけずに立ち去ってもいいですよ」

那薙は洞窟の奥へ向って話しかけた。ばしやり、ぞろり、と音がして先ほど見た巨魚が岩棚を這い出、ハロゲンライトの明かりの中に半身を浮かび上がらせた。魚であることはわかるが、体は横に平たく、なまずか肺魚に似ている。腹這いになって体をうねらせ進むようすは寸詰まりの大蛇を連想させた。

「辰子どのは、この御佐和主とは何の関係もないぞ」

鼓膜の奥で反響する音があった。御佐和主の声だ。それは言語というよりも、かろうじて理解可能な思念に似ていた。

「その口の中いっぱい クニマスをどう説明するつもりですか」

「この魚は、わが水の領域に生きるものだ。わしの眷族だ」

「辰子さんがこの湖にいたことは、すでに判明しているのです。ミズチ」

那薙に声をかけられたミズチは、赤瑪瑙の丸石をひとつ吐き出した。のそり、と巨魚は無感動な丸い眼を赤瑪瑙に向けた。

「辰子どのが通りかかったことはあるかもしれん」

ふてぶてしい響きだった。

「御佐和主、ぼくが誰だか知っていますか」

「人間に見えるが」

「ぼくが何かとは訊いていません。ぼくが誰だか知っているのかと訊いているんです」

「ヤマトの犬であろう。それも負け犬だ」

数秒の沈黙。那薙は片方の肩をすくめた。

「間違いではありませんけどね。その負け犬が、力づくであなたに辰子さんの行方を訊ねたら、どうなるでしょう」

那薙は一步踏み出し、巨魚は器用に体をくねらせて後ずさった。

『きさまなど辰子どのには敵わんぞ』

「ぼくは辰子さんと戦いに来たんじゃありません。でも、邪魔をするものをねじ伏せるくらいのはするかもしれませんがね」

沙耶子は那薙の高飛車な態度と口調に驚いた。明らかに御佐和主を見下した言い方は傲慢ですらあった。目の前の巨大な魚に対して圧倒的な有利を確信している。

洞窟に入ったときから沙耶子の鼻腔を刺していた電気臭が、徐々に濃くなってゆく。

御佐和主が口を開き、丸い顎が笑いの形になった。ぞろりと並んだ鋭利な歯がライトを反射して凶悪さを増した。

『ここはわしの磁界の内側だ。きさまが何者だろうと、わしを封じることができん。わしがきさまを封じてやるわ』

ぬめりを帯びた、灰茶と焦げ茶の模様を彩る鱗の周囲に、静電気の青い光が閃き始める。

「オオミカツチミサワヌシ」

那薙の声がぐんと深みを増し、叢雲のそれに変わった。左手があら、御佐和主の産み出す雷いかづちに向けられる。青ざめた雷電は、御佐和主と那薙の左手の間に幽明の狭間を思わせる流れを生み出した。洞窟が青白い蛍光色に満たされる。

「外来種の未熟な神に、たいそうな名をつけたものだな」

嘲けりを隠さない叢雲の声が、洞窟内に反響した。壁に叩きつけられる音波の衝撃は、物理的な振動を起こし、壁に沿って火花が散った。

「いかづちでこの叢雲に張り合えはしない。しかも、おまえが操れるのはいかづちのみと知れている。大人しくわれらをタツコヒメの磁界へ案内するか、タツコヒメをここへ召喚するか。好きなほうを選べ」

那薙の人格と、叢雲の神格が入れ替わったのだろうか。沙耶子からは那薙の後姿しか見えない。だが、その全身から放たれる威圧感

に沙耶子は身が縮みそうになる。

那薙の頭に視線がいったとき、その襟足の髪が肩を過ぎていることに気がついた。朝は首のあたりまでしかなかったはずだ。

やっぱり、髪がすごい速さで伸びてる……。

こんな緊迫した状況ではあったが、このまま叢雲が靈力を発揮していたら、代謝が活発になり、那薙があっというまにおじいさんになってしまふのではないかと沙耶子は心配になった。

こっちを向いたら髭が伸びてたりとかしたら、笑ってる場合じゃないけど。

沙耶子は自分の緊張感のなさに呆れた。対決している魚が、巨大なドジョウみたいに間の抜けた顔をしているのがいけないのではないのかと思った。あの歯で噛みつかれたら危険ではあるが。

『神威では敵わぬということなら、これではどうだ。体は人間のようだからな』

御佐和主は胸を撓^{たわ}ませ、一瞬の動きで那薙との距離をつめて飛びかかった。最初の跳躍を間髪^{まは}の差でよけた那薙は、体の向きを変えて巨魚に対面する。御佐和主はすでに二度目の跳躍に入り、那薙の正面から飛びついた。大きな口が那薙の頭を食いちぎろうとする。那薙は膝を落としてかわし、頭上の尾鰭が顔を叩きそうになるのを左手で払いのけた。

「きやあ」

沙耶子の悲鳴に那薙が膝立ちになってふり向く。着地した御佐和主と沙耶子の距離は二メートルもなかった。飛びかかられたらひとたまりもない。ミズチが鎌首をもたげ、牙をむき出して威嚇したが、その頭が沙耶子の握り拳ほどしかないミズチが相手では、沙耶子ともども頭を食いちぎられそうだ。

沙耶子は慌てて後ずさろうとしたが、御佐和主の磁界を封鎖するゼラチン状の水壁に背中をおしつけるだけだ。実体は魚であるはずの御佐和主の動きが自在である理由を、沙耶子は突然理解した。

磁界とは、その神の神威で満たされ、閉ざされた、異空間である

ということ。

『人の肉は旨いというが。これを食せば霊力が増しておまえを封じることができるかもしれぬ』

潜水マスクを着けているにもかかわらず、その息の生臭さと、隙間を埋める電気臭が鼻腔に侵入してくる。沙耶子は顔をしかめた。そこへ叢雲の嘲笑が落雷のように磁界を揺るがした。

「人の精命を喰らって妖のものになり下がるか。わたしはおまえを滅ぼそうが封じようが、どちらでもかまわぬのだからな」

こちらを向いた那薙の姿に、沙耶子は驚きで声を飲み込んだ。一瞬、草薙がそこにいるのかと思うほど、那薙の面差しは草薙の顔立ちに酷似していた。

だが、伸びすぎた黒髪に縁取られた那薙の表情や目つきに、雅な美貌はかけらもない。

那薙は御佐和主の尾鰭を両手で掴んで引き寄せ、左側の壁へと投げ飛ばした。壁に叩きつけられた御佐和主は体を曲げて跳ね返り、那薙ではなくて再び沙耶子を狙って飛んだ。那薙はひと跳びで沙耶子と御佐和主の間に入り、左腕を突き出した。

御佐和主が那薙の左腕を肩口まで飲み込み、鋸のように鋭い歯が左肩に食い込んだ。苦痛に顔を歪ませる那薙の脳内に、御佐和主の笑い声が響いた。

『いつそ貴様を飲み込んでくれる。神を喰らった神はさらに力と寿命を延ばすというのが本当かどうか、試してやろう』

那薙は歯を食いしばった。ウェットスーツが肩口から裂けて、赤い血が濡れた岩棚に滴り落ちる。那薙は右腕を伸ばして御佐和主の胸鰭を掴み、蔑みの言葉を吐き捨てた。

「たかが一世紀を数えただけのドジョウがふざけたことを」

那薙の喉から放たれた叢雲の叫びが異様に反響し、空気を震わせる。同時に金属を打ち合わせる甲高い音が響き、御佐和主の胸がぴんと伸びて硬直した。

「自ら剣に貫かれるとは、まぬけな神だな」

那薙の顔に凄惨な笑いが浮かんだ。その瞳は研ぎ澄まされ磨きぬかれた鋼の輝きを放ち、瞳孔が縦に伸びる。那薙の耳の下、頬、顎にかけて、人の肌ではないものが広がり始めていた。研磨された刃の色、くもりのない鏡を思わせる鱗が皮膚の下から浮かび上がる。「一寸でも動いてみる。叢雲の剣がおまえの胃を突き破り、そのぬるぬるとした腹を斬り裂いてくれるぞ」

叢雲の神威に当てられて、那薙の左腕に食いついたままの御佐和主は、尾びれだけを痙攣させる。長大な雷魚の丸い眼は恐怖に満たされた。

雷魚の鋭利な歯に切り裂かれたウェットスーツの下には、金属の光沢がハロゲンライトの光を反射して煌いた。雷魚の歯は鋼に食い込み同化したまま、顎を開こうとしても抜き出すことはできない。叢雲の笑い声は空気だけでなく、磁界の壁も水面も震わせて波を立てた。

「わたしを喰らうか、地水火風の結晶である鋼と、人の御魂を練り鍛えた神剣叢雲を。雑魚でも神の属性を備えたおまえの磁界、叢雲が実体化できる異空間に、おまえ自身が招待した愚かさかわからぬか。この鋼の腕に突き立てたおまえの歯が砕け、飲み込んだ剣がその肉を切り刻み、剣の放つ真の雷でおまえをほどよく焼き上げてやるう。愚かなどじょうが^{オオミカツチ}大雷鎚を名乗るなど片腹痛い。神々が真の^{ミカツチ}雷鎚と呼ぶものを、その体に刻みつけてくれるわ」

神威を叢雲に吸上げられてゆく御佐和主の髭が恐怖でふるふると震える。那薙と御佐和主の周りで稲妻が閃いては消えた。遠くに雷雲を眺める美しさとは別の、間近に迫った危険に、沙耶子もまた恐怖に陥った。これだけ濡れた場所で雷を落とされたら沙耶子も感電死してしまう。しかも、金属製のものをいくつか身につけてもいる。「那薙さんっ。いえ、叢雲さんっ。その神様、殺していいんですか？　まだ辰子さんの行方を聞いてませんよ。奈津子の無事だって確認してないっ」

沙耶子は必死で叫んだ。

ゆつくりと、ひどく緩慢な動作で那薙は沙耶子にふり返った。鋭利な刃物のごとき叢雲の瞳と眼が合った途端に、沙耶子は口を挟んだことを後悔した。双子のようにそっくりなのに、叢雲には草薙の艶やかな美はかけらもない。顔からウェットスーツの襟へと続くうなじは玉鋼の鱗で覆われ、ハロゲンライトの明かりの外にあってもはつきりと見て取れた。わずかに開いた唇の下には、やはり鋼色の牙がのぞいている。いま、命を脅かされている御佐和主と同じくらい、那薙は人間にとって異質な存在へと変化していた。人間や下級の神々が、慈悲など請うことじたいが無謀で無駄なことだと思い知らされる。

崇り神。

ミズチも主人の放つ禍々しい波動に脅え、沙耶子の頭の後ろに隠れている。

左肩から御佐和主をぶら下げたまま、沙耶子とミズチを眺めること数秒、沙耶子にとっては数十分に感じられた間のあと、那薙はゆつくりと息を吐いた。目を閉じ、洞窟の天井を振り仰ぐ。右手で髪を梳き、頬を撫で、顎をさすった。自分の口に入れて歯に触れ、牙に触った指が止まる。ふたたび沙耶子のほうを流し見た。

「ぼくは、叢雲になりかけてますね」

「そ、そうなんですか」

どもる沙耶子を、憂いの影の差した鋼色の瞳が見つめる。

「ぼくが、怖いですか」

沙耶子は息を呑んだ。間違った答えを返したら、崇られるかもしれない。

「いまは、怖くないです。さっきは、ちょっと、怖かったですけど」
胸の下に巻きついているミズチの青い胴を心の支えに握り締めながら、沙耶子は正直に答えた。

「現し世にいる限り、ぼくの肉体は人間であり続けます。ですが、こうして神々の磁界に足を踏み入れ、その神威に触れると、叢雲も本来の姿に戻ろうとする。神威の発動とは別に、真の姿を現してし

まうのです。いまは雑魚にすぎない御佐和主の磁界ですから、まだ人の形を保っています。辰子さんの神威に触れたら、どのような姿になるかわかりません。見たくなければ太田さんのところに戻して差し上げますよ」

投げやりで、鬱々とした那薙の口調には、先刻までの叢雲の熾烈さは跡形もない。

「あの、叢雲の真の姿って……？」

まだこれ以上変化するのか、巨大化でもするのかと沙耶子は恐る恐る訊ねた。

「自分で自分の姿を見たことはありませんがね。常世や磁界に鏡はありませんから……。話によれば草薙と同じようなものらしいです」「じゃ、あ、見たくないってほどすごくはならないんじゃないですか。草薙さん、とつても美しくていらっしやいますし」

息も絶え絶えに言い訳する。叢雲の姿が二目と見られないほど恐ろしいものだから協力しませんでは、祟り神さまに対してとても失礼な気がしたのだ。

「草薙が？」

肩にぶらさがっている御佐和主のことは完全に忘れ去ったように、那薙は眉を寄せて沙耶子を見つめた。何か不機嫌にさせるような発言をしただろうか。沙耶子は焦った。身内を誉められたら、普通は嬉しいものではないだろうか。

「ええ、世にも稀な美女かとみまごうほどの……」

沙耶子を睨みつけていた那薙の眼がすうつと細くなり、真珠色の唇が一文字に結ばれた。沙耶子の語尾は弱々しく青い闇に吸い込まれる。冷や汗がドライスーツの下でたらたらと流れた。

「草薙には穢れがありませんからね。沙耶子さんは、ああいうのが良いのですか」

何が気に障ったのか、さらに声のトーンが下がった。沙耶子はずぶずぶと蟻地獄に沈んでいく気分を味わった。

「いえ、私は百合系に興味はないです。あ、それとも草薙さんは男

性ですか……好みかと訊かれるとちよつと違いますけど」

何か墓穴を掘りながらわき道へとそれていくばかりのような気がしたが、沙耶子は那薙が那薙であるいまの状態を維持したかった。

「草薙は男でも女でもありません。もつとも、それを言ったら叢雲も同じですが」

「そうなんですか？」

もう完全に話が逸れていると沙耶子は思った。置き去りにされている御佐和主が気の毒だ。その御佐和主の体長が縮んでいるようだが、気のせいだろうか。三メートル近くあったはずだが、いつのまにか那薙の身長と変わらなくなっている。

「草薙は人の姿をとるときの見た目には気を遣ってますからね。人間は外見の美しさを尊ぶ。我々は、現し世に顕現するときには、美、威、力のいずれかに重きを置くのですが……磁界における真の姿は、神威とその属性を体现するものですから、また違います。人間も女性がそうですね。内と外では随分と印象が違う」

沙耶子は、もしかしたら那薙または叢雲は、深刻な女性不信にとられていたのではと悩みだした。朝食の席で奈津子と太田の話をしていたときも、そんな感じがしたのを思い出す。

那薙は左腕を軽く振った。御佐和主はますます縮んで、尾鰭がようやく地面につくほどの大きさになってしまふ。那薙は右手を左肩に伸ばした。御佐和主の歯を引き抜こうとして、沙耶子の歯茎を浮き上がらせるような、金属をぎりぎりとしり合わせる音が響いた。御佐和主の顎が那薙の肩から剥ぎ取られ、岩棚の床に赤や金色に煌くかけらが落ちて跳ねた。目の前に飛んできたそれを沙耶子が拾ってみると、鱗の形をした薄い鋼のかげらだった。

那薙が肩から裂けたウェットスーツを小刀で手首まで切り裂き、袖の部分をむしり取った。那薙の肩から左腕、左手の甲にかけて、鮮やかな紅、赤、オレンジの鱗に覆われている。そこには火傷の古い痕があったはずだ。青い闇の中で炎のような輝きを放つそれはとても幻惑的で、沙耶子は息を呑む。

那薙がちらりと沙耶子を見た。うつむいたまま、沙耶子に話しかけた。

「変なものを見せてすみません。気持ち悪いでしょう」

「いえ、そんなことはないです。とてもきれい。火が燃えているようです。ここで見れないんですね。すぐく残念」

那薙は戸惑ったように沙耶子を見て、御佐和主に視線を戻した。右手を左の肩に当てる。

「これは、迦具土の刻印です」

「カゲツチ？」

那薙は御佐和主の口を両手で掴み、大きく広げて中を覗きこんだ。「叢雲の祖神おやがみです。叢雲が御佐和主や辰子さんの搜索に借り出された、最大の理由じゃないでしょうか」

那薙は御佐和主の口の中に右手を突っ込んだ。灰色の魚を一匹づつつかみ出しては、岩棚のそこそこにある水溜りに放してゆく。魚の数は全部で二十三匹だった。

「これで全部ですか」

御佐和主に訊ねたものらしい。霊力を吸い取られてしまった御佐和主がなんと答えたのか、沙耶子には届かなかったが、那薙は納得したように御佐和主を足元に横たえた。

「辰子さんとの契約を吐きなさい」

やはり御佐和主の思念は沙耶子の脳内には響かなかったが、那薙には聞こえるらしかった。膝についてじっと御佐和主の丸い眼を見ていた那薙は「そうですか」と言いつつ立ち上がった。

「辰子さんに特別の想いがあったというなら、それも考慮しますが、あなたのしたことは磁界層の律を乱します。神議において、あなたの裁定は叢雲に一任されています。叢雲の足元に降りますか」

御佐和主に選択の余地はないのだろうが、わざわざ確認するところか那薙らしいと沙耶子は思った。

那薙は、普通の雷魚の大きさとなって、床に這う御佐和主の正面に膝をついた。床に落ちていた叢雲の赤金色の鱗を拾い、御佐和主

の額に乗せ、左手の中指で押さえつける。那薙は大きく息を吸い込んだ。

「ヤハタノワケイカツチミサワヌシ」

叢雲の放つ言霊に、御佐和主は体を震わせた。それは制御できない痙攣となって髭や尾びれまで及ぶ。そしてふたたび体長が伸び始めた。二メートルばかりに伸びたところで、痙攣も止まった。

御佐和主の額には、そこに根付いた赤い鱗が第三の目のように脈打ち、妖しい光を放っていた。

鰻^{アンコウ}みたい……。

沙耶子はどうも緊張感のない想像力を刺激されてしまう。御佐和主の左右に間延びした顔のせいだと断言できる。やはり神としては、顕現する際の見た目は重要なポイントなのだと沙耶子は思った。

御佐和主はずりずりと洞窟の奥へと引き下がった。

第九章 叢雲の眷族

那薙はひどく疲れきったようすで岩棚の上にへたり込んだ。沙耶子は膝でいざりながら近づいた。

「大丈夫ですか」

「御佐和主は新しい名が馴染むまで霊力が使えません。早ければ数分、長ければ二、三時間。辰子さんを探すのは彼が動けるようになってからです。それまでこの磁界を維持しなくてはなりません」

腰の防水パックを開けて、板チョコレートを出して沙耶子にも勧めた。沙耶子は潜水マスクを外して、チョコレートを受け取った。

磁界の空気はやはり電気臭に満ちていて、イオンの味が口内にわだかまる。チョコレートは甘美な味を舌に残して胃を温めた。

濡れた岩棚に腰を下し、しばらくはもぐもぐとふたりしてチョコを頬張っていたが、那薙がふいに沙耶子のほうをふり向いた。

「自分がされて嫌なことを、普通は人にしないものじゃないですか」「そう、ですね」

那薙の唐突さに、沙耶子は少し引いてしまう。

「名を変えられるというのはですね、そのものの存在も、生きてきた過去も、この世界に生れてきた意味も、否定されるということなんですよ。ですが、力及ばず敗れた負け犬に、名を選ぶ権利はありません」

ひどく憂鬱そうな口調に、沙耶子はただうなずいた。そのあと、

那薙は板チョコを食べ終わるまで無言だった。

食べているうちに、那薙の皮膚も腫も、いつしか人らしいものに戻っていた。牙でチョコを齧るというのも見てみたかったが、そつと見上げてみた那薙の口には普通の犬歯が垣間見えるだけだ。御佐和主の神威が衰えたためだろう、叢雲の影響も薄まったようだ。

ところでミズチはいつまで巻きついていいるつもりなのだろうか、と沙耶子は気になったが、沈んだ表情で水溜まりのクニマスを眺め

ている那薙に声をかけるのは憚られた。

「寒くはありませんか」

左手首のダイバーウォッチの損傷を確認していた那薙は、沙耶子にふり返った。

「そういえば、少し」

横を見ると、ミズチが疲れたように首を沙耶子の肩に乗せて眼を閉じている。

「御佐和主の磁界は、地上に通じる門がありません。入り口の洞窟に戻るにしろ、他の神の磁界を通して近道をするにしても、生身の体には負担が大きいです……」

那薙は言いくそうに言葉を濁した。沙耶子と視線を合わせようとしな。沙耶子は那薙の横顔と、寒さと疲労でぐったりとしてきたミズチの頭を交互に見た。そして、手足から這い上がってくる冷えを、初めて自覚した。

「つまり……あれですか」

沙耶子の鼓動が早まり、首のあたりが温くなる。那薙にとっては『手続き』でしかないのだろうが、意識のはっきりしているときに人工呼吸されるのは抵抗がある。沙耶子はその職業柄、ファーストエイドの講習は定期的に受けているが、相手は人形で、実物を相手にしたことは男女ともにない。ああいうのは生きるか死ぬかという事態でないと、よく知らない相手などにはしたりされたりできないものだと思う。

いま現在、沙耶子の命がかかっている状況なのかもしれないが、なぜか納得が行かない。

「那薙さんは、叢雲さんの力を分けるためには、誰にでもしてあげるんですよ。クラチでも、ミズチでも……。御佐和主さんが死にそうだったら、かれにも」

苛立ちを含んだ沙耶子の言いがかりに、那薙は面食らって瞬きをした。それから闇に半分隠れている御佐和主をちらりと流し見て、咳払いをした。

「御佐和主は若くても神ですから、普通に靈力の交流はできます」
「どういうやり方が神さまの『普通』なのか、沙耶子はちらっと思
ったが訊かなかった。那薙も細かい説明せずに結論だけを述べた。
「口から注ぎ込む必要はありません」

ナマズと間接キスの心配はなくなったわけね。

そのことで安堵していいのかどうか、沙耶子にはわからない。
悩んでいる沙耶子からはなれた那薙は、膝をついて床に散らばっ
た叢雲の鱗を拾い始めた。集めた鱗をきれいな水溜まりで濯ぐ。臍
を曲げていた沙耶子は、なんのためにそのようなことをしているの
か興味をおぼえたが、話しかけるのも気まずくて黙って見ていた。
鱗を洗い終えた那薙はおもむろにふりむいて、沙耶子の眼をじっと
見つめた。

「御佐和主と同じ方法が良ければそうしてもいいですが、そうする
とあなたも人間ありながら人間でないものになってしまいます」

「どうなってしまうんですか」

サカナや妖怪にはなりたくないと言った沙耶子は強く思った。蛇も嫌だ。
「叢雲の眷族になってしまいます。あなたの肉体が滅び、今生の命
が尽きるまで」

沙耶子は那薙が御佐和主に授けた新しい名を思い出した。矢幡沙
耶子は悪くないと思わないでもないが、まだ二度しか会ってない。
相手のことをよく知らないのに一生離婚できないのは、将来困るか
もしれないと思った。

いや、私、何を飛躍してるのよ。眷族って、結婚と違うでし
ょう。冷静に考えるのよ、沙耶子。

現状があまりに現実離れしていて、常識に沿った論理的思考が難
しすぎる。沙耶子は自分を叱咤した。

「私も神さまになってしまふんですか？」

那薙は眼を瞞って沙耶子を凝視した。ゆっくりと息を吸い込み、
ひとことひとこと注意深く囁いた。

「あなたが、強く望めば、それも可能です」

沙耶子はさらに考え込んだ。そして首を横にふる。

「いますぐに結論出せません。やっぱりこういうのって、手順があると思うんですよ。那薙さんはとても誠実で勤勉な方だと思っ
うんですけど、女性に対してデリカシーがないっていうか。眼鏡と
ヘアスタイルのセンスとかもイマイチで気になるし」

何を言えば叢雲の地雷を踏むのかわからないが、那薙には多少の
ことは言えそうな気がして、沙耶子はひたすら言い訳した。

那薙の左手に乗せた六枚の鱗が、青い闇の中できらきらしている。
それを見た沙耶子は那薙の負傷を思い出し、はっと顔を上げた。

那薙の皮膚は古い火傷のあとに戻っており、鱗が剥けたとおぼし
き場所には御佐和主の歯型が生々しく残っていた。中にはぱっくり
とピンク色 青い薄闇の中では淡い紫色といったほうが正しかっ
たが をした断面の覗く傷は、出血こそ止まっていたがじくじく
と体液が滲み出していた。沙耶子は慌てて防水性ウエストポーチか
らファーストエイドパックを取り出した。強引に那薙の膝をつかせ
て消毒を始める。

「ナマズには寄生虫がいるかもしれないから、ちゃんと消毒してお
かないと後で大変なことになりますよ」

那薙は御佐和主がナマズではなく雷魚であることを指摘しようと
したが、触れられた痛みと消毒液の焼けるような刺激に歯を食いし
ばった。

化膿止めを塗りこみノンスティックのガーゼで傷を覆い、防水の
絆創膏を貼り付ける。

「服は乾かせても、傷はすぐに治せないですね。戦闘能力が高い
と治癒能力が低いって、基本ですよね」

ようやく那薙の役に立てたことに、沙耶子は純粹な喜びを感じた。
さつきまで臍を曲げていたことも忘れる。その屈託のない笑顔に、
那薙も困惑した微笑を返した。

「ぼくは、デリカシーがありませんか」

「ちよつと足りません」

ちよつとどころではなかったが、少し婉曲に言つたほうが祟られずにすむと沙耶子は思った。那薙はふうつと溜め息をつき、ファーストエイドキットを片付ける沙耶子の横に立つ。

「叢雲の眷族になリたくなければ、沙耶子さんが生き延びる方法はひとつしかありません」

「え？」

油断して顔を上げた沙耶子の首に右手を回し、左手で顎を押さえた那薙は強引に唇を重ねた。熱い息吹を吹き込まれ、沙耶子の冷え始めていた体は内側から一気に温まった。鼓動が早まり、心臓が熱い血を体中に送り出す。加速された血流が体の隅々へと駆け巡り、『靈力』が細胞をひとつひとつ活性化させてゆく。喉を焼く強い酒のようなそれが、胃を通り過ぎても唇ははなれない。

那薙の右手が沙耶子の頭を支えたまま、左手が沙耶子の顎を持ち上げて口を閉じさせた。そして再び唇を軽く触れ合わせるこト十二秒。

沙耶子の頭を支えていた手から力が抜けて、那薙が顔をはなす。

灰色の眼が笑いを帯びていた。

「デリカシーがなくてすみません」

脱力感と羞恥心に沙耶子の耳たぶが熱くなる。わなわなと震えつつ言葉も出せない沙耶子から、その横のミズチに視線を移した那薙は、右手を上げた。

「ミズチ、あなたはもともとぼくの眷族ですが、これでさらにパワーアップですね」

期待に口を大きく開けたミズチの口に、オレンジ色のきらきらしたものを放り込んだ。

叢雲の鱗をぱくつと飲み込んだミズチは鎌首を持ち上げ、度数の高い酒を飲み下したように体を痙攣させた。爬虫類の鱗が波のようにそそけだち、その下の筋肉が収縮したのが沙耶子のスーツ越しに感じられた。痙攣がおさまったミズチの体はひとまわり大きくなつたようデ、真横にあつたはずの目線が上から沙耶子を見下ろしてい

る。その黄色い瞳が優越感に満ちて沙耶子に流し目をくれた。さきほどのぐったりした動きではない、上下に揺れる鎌首の下に、扇の形をした明るい黄銅色の鱗が燦然と輝いていた。

蛇に張り合われている？

沙耶子は眼をぱちくりさせてさらに絶句してしまった。ミズチの体重が増えたこともあり、沙耶子は無理やりに不機嫌な声で苦情を申し立てた。

「ところでミズチはいつまで私にからまっているんでしょうか」

那薙は両腕を組んで沙耶子の顔を覗きこんだ。

「磁界が出るまでです。御佐和主にはもう害はありませんが、ここはいわゆる人界とは違う空間で、空気の組成も違いますし、空間そのものが一時的なものであったり、他の神の磁界と重なりあっていることもある。ミズチが結界を張って、磁界が沙耶子さんの心や肉体に及ぼす影響を防いでくれています。例えば、御佐和主と叢雲の雷がぶつかりあったとき、沙耶子さんが感電しないようにミズチが避雷針の役割を果たしていたこととか」

沙耶子はびっくりしてミズチの顔を見上げた。ミズチが誇らしそうに沙耶子を見おろしていた。

バシャリ、ペタリ、という音が響いて、那薙と沙耶子は足元を見おろした。御佐和主の半円形の顔の両側についた、つぶらな丸い目がふたりを見上げている。

「動けるようになったようです。辰子さんのところへ、案内してくれますね」

御佐和主はしぶしぶといった仕草で頭部を揺らした。那薙は鉾先鈴を入れたビニールパックを沙耶子に渡した。

「ぼくが辰子さんに封じられるようなことがあれば、これを鳴らしてください。草薙が沙耶子さんを守ってくれるでしょう。奈津子さんがそこにいれば、一緒に連れて逃げるといい」

沙耶子は仰天して那薙を見上げた。那薙の瞳は静かな風の夕べにも似て、ただ、穏やかだった。

「辰子さんって、そんなに強力な神様なんですか？ 始めから草薙さんと呼んで対決してもらったらいいじゃないですか」

那薙は首を横にふった。

「草薙に、戦うことは許されない。かれは、護るだけです」

ひとこと区切るたびに、那薙の呼吸が浅くなる理由は沙耶子にはわからない。

「辰子さんの説得を命じられたのはぼくですから、ぼくが成し遂げなければなりません。彼がこれを置いて行ったのは、あなたたちを巻き込むことで起きる災厄を防ぐためなんです」

沙耶子はビニールパックを那薙の手に押し返した。

「那薙さんが使ったらいいじゃないですか、人間の私に何ができるっていうんですか」

敗北も覚悟しながら平然とした那薙の態度に、沙耶子は泣きそうになった。

「この鈴は、人の女性が鳴らすものなんです。巫女舞いの祭具ですから。ぼくが鳴らしても神は応えません」

ビニールパックを沙耶子の手に戻す。沙耶子が受け取らない態度を変えないでいると、那薙は抱きしめるように沙耶子の腰に腕を回した。ミズチが遠慮したのか頭を後ろにずらす。沙耶子の脇で、ビニールパックのハーネスクリップがはまり込む音がした。沙耶子の頬に触れた那薙の頬が、驚くほど冷たい。

沙耶子は訊きたいことがいっぱいあったが、那薙はすぐに体をはなした。腿に付け替えたストラップに、小刀を差し込む。

「行きましょう」

御佐和主は体をうねらせながら床を移動し、那薙はそのあとへと続いた。沙耶子は急いで潜水マスクを装着した。それを待っていたように、磁界を隔てていた水の壁がゆっくりと融解を始めた。

水に満たされた洞窟の中で、灰色の魚たちが泳ぎまわる。ライトの中で踊る魚たちはやがてくると輪を描き始めた。その中を御佐和主が潜り抜けてゆく。沙耶子と那薙は後を追ってクニマスの輪

を潜った。輪の向こう側は洞窟ではなく、自然光の届かない深い水中だった。御佐和主はどんどん泳いでいく。水圧の変化から、水面へと上昇していると思われた。

どのくらいの深みにいたものかわからないが、減圧からくる不調を感じないのは、那薙が結界を張っているのか、それともまだここが異界に接しているからなのか。だんだんと現実離れた思考に馴染んでくる自分に、沙耶子は妙な感慨を覚えた。

上方に明かりが見え始めた。その光の広がり方と屈折から、弱い太陽光であることがわかる。上昇するにつれ、光はどんどん強くなり、沙耶子はライトを消して腰のベルトに固定した。数分とかわからずに、一行は水面を割って冬の木立の中に顔を出した。

そこは深い森の中の、十五平方メートルばかりの池の中だった。鯉やヤマメが珍しそうに突然の闖入者たちの肩を丸い口でつついている。

沙耶子の横で、那薙が立ち上がった。沙耶子は池の中に膝をついていた。水深は一メートルかそれくらいだ。あたりを見回してわかることは、池は野趣にあふれた庭園の隅にあり、正面には小さな庵があった。

「マスクをとつても大丈夫ですよ。ミズチも、沙耶子さんから離れていい。ここは御佐和主からそれほど離れていない、人界です」

再び水の中に膝をついた那薙は、二人の周りをぐるぐる泳いでいた御佐和主を招き寄せた。

「ここまでで結構。あなたはもう戻ってもいい」

水から半分頭を出した御佐和主の、左右に離れた眼がじつと那薙を見つめた。

「ぼくの目的は辰子さんを傷つけることでもないし、クニマス処分することでもない。あなたが慈しみ護りたいと願うものを滅ぼしたりはしません」

御佐和主はゆっくりと尾びれを揺らしながら、名残惜しそうに庵のほうを眺めやり、再び那薙を見上げた。

「御佐和主、あなたの責務はクニマスを守護することです。決して人の目に触れないように、彼らを育ててゆくことです。それが、辰子さんがあなたに御魂を分け名を与え、眷族神にした理由なのでしょう。あなたがクニマスを護り続けることに、叢雲も異存はありません」

もう一度頭を水面から上下させた御佐和主は那薙の周りをぐるりと回り、水底へと消えた。あぶくがいくつか上がってきただけで、浅い水の底にいるのは鯉や小さな鱒、ヤマメといった魚だけになる。

沙耶子は潜水マスクを外して、森の空気を吸い込んだ。

「あの庵に、辰子さんがいるんですね」

「そうだと話が早いんですが」

沙耶子の問いに、那薙は顔にまつわりつく髪を両手で梳き上げながら、憂鬱そうに応えた。本心では辰子に会いたくないのがあるりと聞き取れる。

那薙が先に池から上がり、沙耶子に手を貸そうとしたとき、庵から人が出てきた。その人物に、沙耶子が大声を上げる。

「奈津子っ。無事だったのね」

「沙耶子、どうしてここにっ？」

写真よりもずっと華やかな二十代半ばの女性が、ふたりに駆け寄ってきた。背は沙耶子より頭半分低い。

「というか、池で何してるのよ。そんな重装備で」

いくら冬の東北でも、流水ダイブ用のスーツとフルフェイスのマスクは、庭の池に潜るには確かに大げさである。沙耶子は自分の格好が恥ずかしくなったが、着替えはない。

「その人は？」

奈津子は訝しげに那薙を見上げた。破れたウェットスーツから突き出た那薙の左腕は、火傷の痕が無残に曝け出されている。那薙がとつさに腕を背中後ろに引いたのを見て、沙耶子は無意識に進み出た。奈津子に抱きつき、那薙の左半身を奈津子の視界から押し出した。

「奈津子を心配して、探しに来たのよ。この人は土地のガイドの那薙さんっ」

「池の中を？」

「この池の底、御佐和湖の地下水脈に繋がっているの。奈津子が御佐和湖で自殺したかもって、潜っていたらここに出てきちゃったの」
「強引な筋書きである。那薙は感心しているのか驚いているのか、ひと言も口を聞かない。この場を沙耶子に任せてしまったようだ。」
「私が自殺？ どうしてそうなったの？ とにかく抱きつかないでよ。濡れちゃうじゃない。タオル持ってきてあげるから待ってて。その人のウェットスーツすごいことになってるし。鯨にでも襲われたみたいよ」

鋭い指摘に、沙耶子は心臓が跳ね上がった。

いちど庵に駆け込んだ奈津子は、タオルを両手に再び駆けだしてきた。沙耶子たちは庵の縁側でタオルを受け取り、水を拭き取った。那薙はタオルを肩にかけたまま、あたりを見回す。

「ここは、奈津子さんひとりで住んでいるんですか」

奈津子は乾いたタオルを差し出して、濡れたのを受け取った。

「この庵の所有者が、ときどきようすを見に来てくれます。那薙さん、でしたね。怪我してるんですか、ここも破れてますけど……男性の着替えてなくて」

喋りながら那薙の横に身を屈めた奈津子の肩を、那薙は乱暴に突き飛ばした。奈津子はよろめき後ろに倒れそうになる。沙耶子が反射的に飛び出して奈津子を後ろから抱きとめた。

「なんてことするんですか、那薙さん。奈津子は妊婦なのに」

「それはあなたの奈津子さんじゃない」

上気した頬で那薙が叫び、奈津子に踊りかかろうとする。驚いた沙耶子は奈津子を庇って下がったが、視界のはしに映った親友の顔を見て息を呑んだ。

奈津子は笑みを顔にはりつかせ、両手に那薙の小刀を握りしめていた。奈津子は沙耶子突き飛ばすと庵に駆け込んだ。那薙はその

後姿に向かって叫んだ。

「辰子さん、刀を返しなさいっ」

「那薙さんっ、どういうこと？」

ふたりで同時に叫びながら庵に駆け上がる。奈津子を追って障子に走り寄った那薙の動きが止まった。沙耶子はその背中に鼻と額をぶつける。

障子の向こうには、別の人影があった。

第十章 神成辰子の逆鱗

(前書き)

おしまいのあたりに地震の表現あります。

第十章 神成辰子の逆鱗

淡い流水紋の結城紬、黒地に金銀の銀杏柄を散らした帯を締め、背筋を伸ばして立つ妖艶な美女。抜けるように白い肌に、一流の画家がすつと刷いたかのような弓月の眉。まぶたが完璧な弧を描く切れ長の眼の、黒く濡れた瞳が那薙を見つめていた。

ものすごい美人だから、会えばわかるそうです。

沙耶子は考えるより先に口走っていた。

「辰子さん？」

「ここにいたんですか。辰子さん。気配を完全に消していましたね」

辰子は、とろけそうな微笑を浮かべて二人を見た。

「叢雲どのが私を探していることは、聞き及んでいましたから、お迎いの準備に怠りはありませんわ」

辰子が裾をさばいて白い足袋に覆われた足を一步だす。那薙は気圧されたように、背中に沙耶子を庇いつつ一步下がった。袖から出した辰子の手に、那薙の小刀が握られていた。那薙はその小刀から視線を外そうとせずに、辰子の隙をうかがった。

相手は柳のようにたおやかな女性であり、いくら痩せた那薙でも手を伸ばせば奪えない距離ではない。だが那薙は全身を緊張させたまま動こうとしなかった。

どんな男でも籠絡せずにはおかないうつとりする笑顔で、

辰子が囁きかけた。

「これがないと、叢雲どのはお困りですか」

辰子は抜き身の鋭利な刃物を、なんの躊躇もなく優雅な仕草で懷にしまいこんだ。

「でも、お返しできませんわ。やたらに家の中で雷を落とされては、奈津子さんの体に障りますから」

辰子は穏やかにそう言うと、後ろの土間に流し目をくれた。奈津子がどこかぼんやりした表情で三人を眺めている。

「奈津子さん、お客様にお茶をだして上げてくださいな」

「はい、辰子さま」

奈津子は従順に土間におり、湯を沸かし始める。何が起っているのか、沙耶子の理解を超えていた。沙耶子はそれが命綱であるかのように那薙の左手首を握り締めた。

「はじめまして、のご挨拶が遅れましたね。神成辰子です。そういえば、叢雲どのとは神議でもお会いしたこと、ありませんわね」

辰子の声は滑らかで甘く、誘い込むような瞳で那薙を見つめた。

「八百万もいれば、東京都全区の人口と変わらないんですよ。七日やそこの神議で顔を合わせるほうが奇跡というものでしょう」

辰子の妖艶さに感銘を受けたようすもなく、那薙は冷淡に応じる。辰子は微笑を絶やさずに、ふたりへと手を差し伸べた。文字通り白魚のように美しい手指から、沙耶子は眼が離せない。その手が途中で方向を変え、居間の囲炉裏を指差す。

「お座りになってはいかがかしら。叢雲どの、話し合いに参られたでしょう」

丁寧な口調にもかかわらず、辰子の声には物理的な威圧感が込められていた。

じりじりとあとじさる那薙に押されて、沙耶子も囲炉裏まで後退した。並べられた円座に、ぺたりと腰を落とし、正座する。那薙もそれにならって腰を下ろした。姿勢を正し、辰子と正面から向き合う。

「神議により、辰子さんは八郎さんのもとへ戻るように、命が下つています」

辰子はくっくつと笑った。

「帰りたくありませんわ。私、ここでも忙しくしておりますの。それに、あそこへ帰っても、することがありません」

「第二次大戦前に汚染された田沢湖の浄化は進んでいます。あなたが戻れば、浄化もさらに促進され、魚たちも戻ってくる。是非、辰子さん本来の領域へお還りください」

「でも、あそこに私の子供たちはもういないのです。八郎どのは護つては下さらなかった」

辰子は静かに、だが硬い口調で要請を拒否し、庭先へ視線を移した。那薙は低い声で根気強く説得を続けた。

「追いつめられた妊婦を湖に引き込み、何をなさっているのか。事情によつては田沢湖への帰還以上に困った事態になりかねませんよ。ここで叢雲の要請を受け入れてこの場を去れば、あなたの罪を次の神議で告発することはしません」

辰子は庭先に視線を固定したまま、しばらく黙っていた。そしておもむろに那薙たちへと顔を向けた。その瞳にも口元にも笑みはない。濡れたように美しい目を縁取る黒いまつ毛が怒りで震えている。「私の罪？　では、私の子供たちを滅ぼしたもののへの罪はどうなりますか。彼らは罰を受けましたか」

「辰子さん、あの当時は、混沌の時代でした。世界中の障壁が不安定で、脆かった。神々でさえ侵されない聖域はなかったのです。磁界層の律は乱れ、大小の磁場が不規則に消滅しては脈絡なく発生する。誰の祈りもどこへも届かない、憎しみと欲望が複数の次元にまたがって渦巻く時代でした」

「私の子供たちを殺したものは、罰を受けなかった」
低い声で頑固に言い張る辰子に、那薙は途方に暮れた。

「だからといって、絶望した妊婦を湖に引き込んで、なんの利益があるというのですか」

辰子の口角がくつと上がり、瞳に光が宿った。虹彩が黄色味を帯びている。

「私の子供たちを、返してもらっているのです。私は湖を汚したもののたちに祟るためにかれらを探しにできました。だけど、田沢湖の領域外で彼らの足跡を追うことは困難でした。確かに、混沌の時代だったでしょう。何もかもが曖昧で、乱雑で、秩序はどこにも見つけられない。御霊^{みたま}なき土地が広がり、消息も残さず地上を去った神々も多い。私は、この湖まで来て考えました。復讐が叶わぬのなら

失くしたものを取り戻せばよい。人の子が奪った命なら、人の子に返してもらうのが道理というものでしょう」

「辰子さん。ではあのクニマスたちは」

那薙は囲炉裏の端に拳を打ちつけた。

沙耶子は両手で口を覆って声を飲み込む。灰色の、眼の大きな魚たちの群れが脳裏に甦った。あれがみな、湖に身を投げた女の胎児の成れの果てだというのか。

沙耶子は我慢できずに叫んだ。

「だって、奈津子も妊婦さんたちも、辰子さんの子供や戦争とは無関係じゃないですか」

辰子が沙耶子に流し目をくれた。

「人の犯した罪は、人によって償われるべきではないかしら」

怒りを押し殺しながらも、むしろ涼しげな辰子の言葉が、沙耶子の胸を刺した。那薙が二人の間に割って入る。

「辰子さん、クニマスが増えない理由がわかりませんか。どれも一代限りでしょう。あの魚たちは、あなたの霊力で形を保っているだけなんです。いちど失ったものは、二度ともとは戻らないんです」

辰子の鋭い瞳が那薙に向けられる。その柔らかな赤い唇から火花のような叱咤が飛んだ。

「それがあなたの言い訳ですか。叢雲っ」

落雷が間近に落ちたらそうかもしれないという衝撃が、沙耶子の肋骨を軋ませた。

「あるじを殺され一族を滅ぼされ、ヤマトに膝を折った叢雲どの。」

仇の朝廷に護国の剣と祀られて、復讐の気概も尽き果てたあなたに、私の悔しさがおわかりになるとは思いませんわ」

辰子の喉から、神経が骨から引き剥がされるような哄笑がある。沙耶子は脅えて那薙の横顔を見上げた。

那薙は蒼白になって辰子を睨みつけたまま、齒を食いしばっていた。膝の上の両の拳は固く握られ、わずかに震えていた。その拳の震えをおさえつけ、那薙はしぼり出すように言った。

「では、どうあっても田沢湖に戻られるおつもりはないと」

「戻りませんわ」

辰子は断言した。

瞳がキラキラするというのは、本当にあることだと沙耶子は思った。辰子の瞳は那薙をやりこめた興奮で輝いている。しかも黄色味が増していくようだ。

「それでは、あなたを封じて、神議へ連れて行かねばなりません」

「できますかしら、人間のあなたに。この家には鋼はいっさいおいてありませんのよ。家屋の造りも古くて、釘は一本も使っておりませんの」

辰子の勝ち誇った笑い。

じつと辰子を睨みつけたままの那薙の横で、沙耶子は部屋を見渡した。鉄のものはひとつもない。囲炉裏には火箸さえなかった。それがどういう意味を持つのかわからなかったが、緊張感を増した那薙の横顔に、不安が募る。

「鋼だけが、叢雲の霊力の源ではありませんよ」

那薙は膝を立てて立ち上がるうとした。辰子の赤い唇がゆっくりと動いた。ねっとりした言霊が、その喉から発せられる。

「アメノムラクモノツルギ」

那薙のこめかみがぴくりとして、動きを止めた。辰子はにっこりと笑う。那薙は息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

「残念ながら、叢雲は一年前に真の神名を取り戻しましてね。もうその封神名で多くの神威を封殺することはできません」

「そうかしら。そのわりにはつらそうでいらっしやいますけど」

辰子は優位を確信した笑顔を崩さない。

辰子と叢雲の闘いはすでに始まっていた。沙耶子には感じられないが、相手をねじ伏せようとする霊力の攻防が那薙を押しつぶそうとしていた。

辰子姫は、あえて人界で対決することで、磁界の内側でしか顕現できない叢雲の神威を押さえ込むことに成功していたのだ。

御佐和主には圧倒的に有利だった那薙が苦戦していることを感じ取り、沙耶子は緊張感を増してゆくふたりを交互に見つめた。自分に何ができるのかわからず戸惑う。那薙が鉄を必要としているのなら鉾先鈴がある。あるいはここで鈴を鳴らして草薙を召喚すれば万事解決だろうか。だが那薙は、草薙は辰子と対決できないのだと言った。

「その人の体で何ができるかしら。わたくし、神を封じるのも、人を殺すのも好きではありません。でもあなた、男性の体をしていらっしゃることです。いつくるかわからない行き場のない妊婦を誘い込むよりも、あなたと奈津子さん、そちらのお嬢さんとで赤子をつくってくださいたほうが、クニマスの数を増やすのも早いのですわ」辰子は和服に相応しい優雅な動作で立ち上がった。流れるような足さばきで那薙の横に立つ。

「オロチとキナコロカムイ。まったくの属性違いというわけでもありません。私の眷族になりませんか？ アメノムラクモどの」名を呼ばれるたびに、那薙の頬が不快そうにぴくりと動く。沙耶子は那薙の左手を掴んだ。沙耶子の温かい手が、那薙の冷たい手首を包み込む。こわばっていた那薙の筋肉がふっとゆるむのを、沙耶子は指先で感じた。

「断ります」

「真の神名を取り戻したところで、所詮は憐れな『ツルギノウカラ』。その名を呼ぶ剣のあるじがいなければ、ただの鉄の塊ではありませんか」

辰子は那薙から離れながら、鈴の鳴るような笑い声を上げた。

「ああ、でも。その鋼の体さえ、海の底で失くしてしまわれたのですわね。こんな小刀に頼らなければ雷ひとつ起こせない、卑小な人の体に囚われた祟り神」

懐から小刀をちらつかせて、辰子は囲炉裏の反対側に立った。その口元は厳しく結ばれ、瞳は鋭く那薙を貫いた。

「御自分の主人も護れずヤマトの犬に成り下がったあなたに、何の

期待もしておりませんわ。その人の体だけいただきます。叢雲どのは再び水の底に戻られるがよい。このたびは、暖流の通う瀬戸内海ではなく、冷たくて光の射さない湖の底ですけどもね」

辰子は笑いながら茶を運んできた奈津子にふり向き、盆に那薙の小刀を置こうとした。那薙は弾けるように上体を前に出し、左手を囲炉裏の灰の中に突っ込んだ。囲炉裏から火柱が上がり、そこから放たれた炎の矢が奈津子の盆を直撃した。奈津子と辰子の悲鳴が上がる。茶碗も小刀も床に転がった。

那薙は囲炉裏を跳び越えて小刀に手を伸ばしたが、辰子の放った雷の矢が床を撃ち、小刀を縁側へと弾き飛ばす。雷光が空気を引き裂く音に、沙耶子は思わず耳を押さえた。

床に手をついた那薙は縁側へと跳躍した。那薙の手が届く寸前、辰子の稲妻がふたたび小刀を弾いて庭へと飛ばす。那薙が庭へ降りる前に、三度目の稲妻が那薙を狙って放たれた。

横様に飛びのいて落雷から免れた那薙は、しかし障子の棧に背中をぶつけた勢いで息が詰まり、すぐには起き上がれない。

室内に響き渡る雷鳴に沙耶子の鼓膜が悲鳴を上げる。耳を押さえながら、沙耶子は背中への痛みに呻き声を上げる那薙へ駆け寄った。那薙の前に膝をつき、庇うように辰子を見上げる。

沙耶子たちを、辰子が傲岸に見下ろしていた。その瞳はいまは金色に輝いている。唇の端をゆつくりと上げながら、辰子が宣言した。「娘、おどきなさい。その蛇は私のもの」

「ぼくは蛇じゃありませんよ。第一、ぼくがあなたのものになったら、八郎さんに縊り殺されます」

上体を起こした那薙は沙耶子を押しのけた。

「那薙さん、怪我は？」

「ちよつと背中を打っただけです」

「火傷してるでしょう。囲炉裏に手なんか突っ込んでっ」

たんぱく質の焼ける臭いが、いまだに那薙の体からのぼっている。那薙が沙耶子を睨みつけて黙らせた。

辰子の勝ち誇った笑い声が降ってくる。

「鋼の媒体もなく火を操るとは、侮れないお方ですね。ますます欲しくなりました。他にどのような技が使えますの？ 高名なアメノムラクモどののお噂は国土にあまねく知れ渡っているのに、その姿も神威もこれまで公にされたことがありませんものねえ」

両手の間に稲妻を弄びながら、辰子が一步步近づいてくる。沙耶子はビニールパックに手を伸ばしてファスナーを開けようとした。那薙の右手がそれを拒む。

「まだ、ぼくは終わってません。辰子さんが真の姿を見せたら、奈津子さんを連れて森へ逃げ、草薙を呼び出し、太田さんのいる結果へ跳んで下さい」

早口で沙耶子の耳に囁いた。

「って那薙さんはどうするんですか。鈴がなくなったら助けを呼べな……」

沙耶子の言葉が終わる前に、那薙は右腕で沙耶子の腰を抱いて庭に転がり出た。雷鳴が耳を聳する。ふたりがいた縁側は黒焦げになり、煙が上がっていた。木の燻される臭気が漂う。

縁側から転げ落ちた拍子に、沙耶子の下敷きになった状態で那薙が叫んだ。

「本気でぼくたちを殺す気ですか」

「ごめんなさい、那薙さんっ」

沙耶子は慌てて那薙の上からおりた。太っているわけではないが、体格が良く毎日のように多種のスーツをしている沙耶子は、見た目より体重がある。縁側の高さとはいえ、下敷きになった衝撃は大きかったはずだ。

辰子は縁側に立ち、ふたりを見下ろした。

「この程度で殺される気なら、それでも結構ですよ」

静かに微笑していれば清楚な美貌が、高慢な嘲笑に歪むさまほど恐ろしいものはないと沙耶子は思った。

「この叢雲が、あなたごとき小娘に殺されるわけにもいかないでし

よう」

那薙は握り締めたままの左手を、口の前に持ちあげた。肉の焦げる臭いが強くなった。那薙の開かれた手には、熾き火で赤く染まった炭のかけらが乗っていた。左の掌はすでに黒くなっている。

「ひのやぎはやを」

那薙の深く響く声が響いた瞬間、熾き火は渦を巻いて火炎となり、辰子へ襲いかかった。奈津子の悲鳴が庵の中から響き渡る。

「しなつひこ、炎で辰子姫を包み込め」

ごうつと風が吹き、渦巻く火炎は何層にもなつて辰子を覆い隠した。人の叫びとは思えない怒号が、炎の中心から湧き起こった。

「叢雲つて、すごいんですね」

沙耶子は啞然として呟いた。

「叢雲の力じゃありません。叢雲の言霊で呼び出された祖神たちの力です。辰子さんが人の姿を剥ぎ落とされて真の姿をさらし、神威を発揮すれば、叢雲の神威も触発され、人の体でも相当の霊力を操ることはできます。沙耶子さんはいまの内に奈津子さんを連れ出してください」

「でも、あの奈津子は本物なんですか」

沙耶子は、奈津子突き飛ばしたときの那薙の剣幕を思い出して言った。那薙は問いの意味を汲み取りかねたようにまばたきをした。

「私の友人の奈津子じゃないって」

那薙は「ああ」と思い出して言葉を継いだ。

「辰子さんが奈津子さんを依り代にしていたのだと思いますが、違いました。すぐに正気に戻るでしょうから、ぼくが辰子さんを引きつけている間に、太田さんのところへ戻してあげてください」

早口で那薙が説明している間にも、炎が渦を巻きながら天井へと立ちのぼる。那薙はごうごうという炎の音に、張り合うように叫んだ。

「早く。奈津子さんが火に巻かれてしまう」

那薙は沙耶子の肩を押し、自分は庭へ向って大声を出した。

「ミズチっ」

那薙は動揺してあたりを見回した。池を出てから姿が見えない。見知らぬ場所でネズミでも見つけてそっちへ気をとられたか、あるいは寒さで動けなくなりどこかでとぐろを巻いているのか。

「ミズチっ。どこにいますか」

庵に駆け戻った沙耶子は、パニックに陥っている奈津子を抱きとめた。辰子を包む炎が天井まで舞い上がり、庵に火が移る。沙耶子は縁側を避け、泣き叫ぶ奈津子を土間から連れ出した。

外に出たときは、すでに炎は庵を包み込んでおり、辰子の姿は燃え盛る炎の奥で見えなくなっていた。

「辰子さんっ、辰子さんっ」

奈津子が金切り声を上げる。沙耶子は制止の叫びを上げながら、後ろから奈津子を抱きすくめた。那薙は庭に立ち、じっと火災に包まれる庵を睨みつけていた。その足元にミズチがわだかまっている。ミズチの口には那薙の小刀が咥えられていた。

崩れ落ちる庵の中心から、轟音とともに水柱が昇った。沙耶子も奈津子も啞然と空を見上げる。

水柱は中空で大量の水を吐く長大な生き物の姿に変わった。現実が存在するはずのない、四本足の空飛ぶトカゲ。鼻面の長い上下の顎には、大人の指ほどの長さで太さの牙が並び、もっとも長い牙は成人男子の腕ほどもある。盛り上がった額には二叉に分かれた二本の角。全身が青と緑の輝く鱗に包まれていた。頭頂から背中には金色の鬣たてがみが炎の巻き上げる気流に靡いている。猛禽のそれに似た四本の鉤爪が那薙へ向けられた。

「ほんとうに美しい方だ、辰子さん。あなたの逆鱗に触れたのが残念ですが」

それが那薙の美観なのか、叢雲の美観なのか、あるいは単なる挑発なのか。沙耶子は悩んだが、たしかに空を舞う龍神の姿は心を奪われるほど壮観だった。

辰子は数条の稲妻を那薙へと放ったが、ミズチの探してきた小刀

で軽く払いのけられた。逆に小刀から青い電光が迸り、そこから放たれる叢雲のいかづちが、轟音とともに空へと駆け上がる。空中でぶつかり合った雷が激しい爆発音を上げて炸裂した。

これをきれいだとか見とれている場合じゃないのよ。

沙耶子は奈津子を引きずって庵から離れ始めた。このふたりの電撃争いに巻き込まれたら命がない。その証拠に小刀を那薙に渡したミズチは、たちまち姿をくらましてしまっている。

稲光が空気を切り裂くたびに、耳を聳する轟音が大地を揺らす。

奈津子を抱えているために耳をふさぐこともできずに、沙耶子は朦朧としてきた。

手の火傷、大丈夫かな。叢雲は那薙さんの傷は治せないから……。

辰子の稲妻がひとつでも当たったら、那薙の体はもたないだろうとも思う。沙耶子は心配ではあったが、今はどうしようもない。果然としている奈津子を安全なところへ連れて行こうと近くの雑林へ進み始めたものの、弾かれた落雷が沙耶子の頭上をかすめ、目の前の梅の木を引き裂いた。黒こげになった木から黒煙が昇った。

どこへ逃げればいいのか。

何百ものシンバルを打ち鳴らすような辰子の咆哮が響いた。池の水が盛り上がり、大波となって那薙へと襲いかかる。

「たかおかみのかみ、くらおかみのかみ」

那薙が叫ぶと、盛り上がった波頭が二柱の龍神となった。沙耶子は悲鳴を上げた。大波は那薙の直前で二手に分かれ、龍神とともに地面へと吸い込まれる。

「神議で決まったと言ったでしょう。あなたの同族もぼくの味方ですよ」

『ヤマトの龍神を同族と認めたことはない。私はイデハのキナコロカムイよ』

雷鳴の如き辰子の叫びが、地面さえも揺るがす。

「素晴らしい心意気です。尊敬を通り越して懂れてしまいますよ」

辰子を挑発する那薙の声が、沙耶子たちのところにも届く。辰子は森を揺るがす叫びを上げると、全身を氷の矢に変えて那薙に降り注いだ。

那薙は左手に玉鋼の小刀を握り締め、頭上にかざす。那薙の体に触れた氷矢は、灼熱の鉄に触れたかのようにもうもと蒸気を上げて那薙を包み込んだ。真つ白な霧に包まれた那薙の姿はたちまち見えなくなった。

「那薙さんっ」沙耶子の悲鳴も届くとは思えない。「那薙さんっ」沙耶子はビニールパックを開けて鉾先鈴を出した。鈴の間に挟みこまれたハンカチを、震える指先で取り出す。

「何それ」

理解を超える事態に呆然としていた奈津子が我に返り、場違いなものを取り出す沙耶子に不思議そうに訊ねた。

「ふたりとも助けられるかもしれない」

沙耶子は必死で鈴を振った。澄んだ鈴の音が森に響き渡る。心が洗われるような音だが、草薙はいっこうに姿を現さない。

「名前を言わないといけないのかしら。草薙さんっ。草薙さんっ。出てきて。お願い」

那薙さんが草薙さんと呼び出したとき、なんて言ってたっけ。集中して思い出す。

「アツタノ……ええつとアツタノオオカミ……それから、くさなぎのツルギ。なんか足りない。アツタノオオカミ……クサナギノミツルギ」

しゃりんしゃらんと鈴の音が木々の梢を揺らしてこえました。火災のキナ臭さを払いのけて、清涼な風が沙耶子たちを包み込む。

『あめつちの』 高く、しかし深みのある澄んだ唄声が風のように森を流れてゆく。

『神にぞ祈る』 沙耶子の横に、白い影が森の吐く靄の如く凝り始める。

『あさなぎの海の如くに』

桧扇を開いて閉じる音がした。

「波立たぬ世を」 唄声は波のように寄せては返して森を浄めてゆく。

沙耶子の手は空っぽになっていた。

額に金冠、花簪。桜色の単ひとえに若葉色の裯あこめを重ねた上に、青摺りの小忌衣おみころもを羽織り、裾の半分が群青に染め上げられた裳を長く引いた、浦安の舞姫姿の草薙が沙耶子の横に立っていた。身の丈を越えた玉鋼色の艶やかな髪が、青い裳の上に扇のようにひろがっている。

玉鋼色に輝く一対の手が桧扇を開いて、また閉じた。

「日本百景にも数えられる出羽の田沢湖が、軍需産業のために汚染され、田沢湖固有のクニマスが絶滅したのと、御製の歌をもとに平和を願ってこの舞いが創られたのが、同じ昭和十五年だったというのが、奇しきものだね。結局、平和安寧への祈りも虚しく、美しきうま豊葦原とよあしはらの国を焦土としてしまう戦争が始まってしまふのを、私は防げなかった」

顕現するなり何を言い出すかと、沙耶子がまじまじと草薙の美しい顔を見上げた。

「ねえ、さやこさん、神と人間、どちらが罪深いのだろうか？」

沙耶子は一瞬考え込んだが、今はそれどころではないだろうと草薙に眼で訴えた。

「叢雲が私を置いて平家とともに地上を去って以来、私なりに課された責務には最善を尽くしてきたと思うのだけどね。皇統はいまでも続いているし、やまとの国は国際上いろいろあるけども、とりあえずいまも独立国だから」

「草薙さんっ、いまは那薙さんがとっても大変なんですけどっ」

沙耶子はいいに声を見つけて主張した。草薙はにっこりと笑う。

「さやこさんは私が教えてあげた奥の手をまだ使っていないのに、なにをそんなに焦っているのだろうね」

「奥の手？」

「那薙から叢雲の真の神威を引き出す方法を教えてあげたじゃないか」

沙耶子は眉間を寄せて考え込む。はっと思い出したが、その中身が思い出せない。

「あんな長い呪文、一回聞いただけじゃ覚えられませんか」

草薙はたと桧扇で額を叩いた。

「では、叢雲は祖神たちの助けだけで戦っているのか」

「……のようです」

「それは苦戦するだろう」

まったくと評価を述べつつ、草薙は善戦する那薙を見やった。

辰子は那薙に触れるたびに蒸気となりながらも、氷の矢を降り注ぎ続ける。冬の冷気が辰子を形作る水の粒子をすぐに液体に戻し、氷結し、再び襲いかかる。那薙は迦具土の力を借りて熱を放出し続け、氷矢を弾き飛ばしているが、いつまでもつか想像もつかなかった。あの氷矢がひとつでも急所を貫くまでもなく、いつか疲れて倒れるだろう。消耗戦では、人の体でしかない那薙のほうが不利だ。

「だから、助けてください」

「那薙を助けるのは、あなたにしかできないんだ。剣のあるじになれるのは、人間だけだから。さやこさん、いまどきの人間が長い名前を覚えられないのは知っていたから、鉾先鈴の五色の布に書いておいたんだけど、読まなかったのかな」

「その鈴がなくなってるんですけど」

「ああ、私の依り代にしているからね」

草薙が手首を翻して扇を回す。りいんと澄んだ音がして、扇が鉾先鈴に形を変えた。

「ほら、この名を呼んで人の身に封じられている叢雲の神威を、人界に顕現させなさい」

鉾先鈴の柄頭から垂れる黄色の細長い布が、沙耶子の前にぴん、と広げられた。万葉文字を思わせる長つたらしい漢字の羅列に、沙耶子は眩暈を感じる。

「あの、ふりがながふってないんですけど」

「読めませんか」

草薙の柳眉がかすかに上がった。沙耶子は鼻を突っ込むように布を睨みつける。

「やきえんろ……ち……ここが『むらくも』ですね、おばね……」

沙耶子は眉間と額に皺を寄せた。脇の下に汗も滲んできそうだ。

草薙は嘆息して沙耶子の耳元に唇を寄せた。

「やまたの」

「やまたの」

「おろち」

「おろち」

「むらくものおはばり」

「むらくものおはばり」

「やつかのつるぎ」

「やつかのつるぎ」

「なんじがつるぎのあるじのこいねがう」

それはどこに書いてあるのかと思いつつ、沙耶子はオウム返しに繰り返した。

「汝が剣の主の希う」

「キナコロカムイノジンゼイタツコヒメをほうしんしたまわんことを」

「きな粉の……え？」

草薙は辛抱強く繰り返した。

「キナコロカムイの神成辰子姫を封神し給わんことを」

沙耶子が言い終えた瞬間、ドーンと大気を震わせ、大地を揺るがす地鳴りがした。森全体が波打つ。奈津子はしりもちをつき、沙耶子は草薙の袖にすがりついた。木々の梢は震え、葉が舞い落ちる。息をつく間もなく再び大地が揺り返す。奈津子は腹ばいになり、沙耶子は泰然と鈴を捧げ持つ草薙にしがみついているのが精一杯だった。

第十章 神成辰子の逆鱗

(後書き)

浦安の舞『天地の神にぞ祈る 朝風の 海の如に波立たぬ世を』(1940)

近代神楽 巫女神楽

皇紀二千六百年奉祝臨時祭に合わせて奉奏するために創作される。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%A6%E5%AE%89%E3%81%AE%E8%88%9E>

神楽唄は昭和天皇御製(1933)

和歌の引用は、その短さから全文を必要とするために、公開にあたり著作権について心配になって調べてみました。

しかも、昭和以降に作られた神楽は、唄や楽曲、舞など、複数の人間によって作られているので、どこを著作権保護の起点にしているのか、はなはだ不明。映画は公開時点から70年で、映画以外の団体創作物は発表から50年で著作権は消失しますので、そちらのケースならセーフ。

とりあえず、神楽協会に問合せましたら、よくわからないので、文化庁に直接問合せ欲しいとのこと。

文化庁にメールしましたが、まだお返事がありません。

それまでは映画以外の団体創作物ということで、公表後50年経っているので保護期間は過ぎているのではないのでしょうか、という立場で参ります。

第十一章 叢雲の神名

沙耶子の目の前で小刻みに揺れる大地に、激しくり鳴り続ける鈴。その柄頭から垂れる黄色い布に、流麗な筆跡で書かれたその神名。

『やまたの おろち むらくものおはばり やつかのつるぎ
八岐遠呂智叢雲尾羽張八拳剣』

御佐和主の磁界で神名の持つ意味について語った、那薙の鬱々とした呟きを思い出す。

この名に、叢雲が現し世に具現した意味、かれの記憶、存在そのものが込められている。かれを打ち負かした者に封じられてしまったという……叢雲の魂が。

辰子の容赦のない弾効に、蒼白になって沈黙していた那薙。

叢雲に、何があったの。

はつと気づくと、那薙を包んでいた氷矢の雨は再び龍神の姿になって空へと舞い上がっていた。そのあとを追う、鋼の鱗に覆われた輝く長大な物体。鏡のような玉鋼たまはがねの乱反射で、それがなんであるのかはつきりと見てとることはできなかった。沙耶子は額に手をかざし、眩しさに眼を細めて辰子を追う銀光を追った。一部が赤や金に反射するほかは、手足らしきものはない。

「あれが、叢雲ですか」

「そう。羨ましいな。私もいちどでいいから人界で神威を全解放してみたいものだ。青い空というのは、飛び甲斐がありそうじゃないか。でも私のあるじは絶対に許してくれないから」

「あるじ?」

「つねのうしかい 剣族の悲しい性さがというものでね。あるじの許可なしに、己の神威をすべて解放することはできない」

「あるじの……って、あ、叢雲さんが辰子さんに巻きついた」

草薙の説明に一瞬、不吉な勘が沙耶子の胸をよぎったが、上空戦の成り行きに気をとられる。

「ああなったら、叢雲の勝ちだね。辰子どのは叢雲から見れば年端

の行かないコギヤルみたいなものだ。手加減をしないと、八郎どのに恨まれるよ。叢雲」

「コギヤルって、草薙さん……」

その古風な姿と人離れた美貌から、俗な人間の言葉が出てくるのに違和感がある。ただ、ちよつとその単語は時代遅れですよと指摘してもいいだろうか、沙耶子は悩んだ。

「辰子さんって、何歳なんですか。戦前から……」

「まもなく千年を数えるのかな。八郎どのより少し若いはずだけど」
その辰子が小娘なら叢雲は。

沙耶子は眩暈がしてきた。くらくらした頭で地上に視線を下ろすと人が倒れている。

「那薙さんっ」

沙耶子は駆け出した。血の気を失い、ぐったりと地面に横たわった那薙に走り寄り、首筋に触れる。仰向けにして頬を鼻に近づけ呼吸を確認したが、温かな息は沙耶子の頬に触れない。沙耶子は泣き声を上げた。

「草薙さんっ、那薙さんが息をしていませんっ」

「叢雲の御魂が解放されたから、いまのその体に命はないのは道理だろう」

悠長に構える草薙に向って、沙耶子は叫んだ。

「何をのん気なこと言ってるんですか。なんとかしてください。那薙さんが死んじゃいます」

「いま、叢雲を呼び返すと辰子どのを取り逃がしてしまうよ」

のんびりとした口調で、草薙は無情なことをのたまった。

沙耶子は急いで気道を確保しつつ腕時計を覗き込んだ。脳死が始まるのは呼吸が止まって何分後だったっけ、と記憶を掘り起こす。

心臓マッサージと……。人工呼吸……。

「降りてくる。勝負がついたようだ」

きらきらと光るものが落ちてきた。草薙が鈴を持っていないほうの手を伸ばして銀色の物体を受け止めた。大人の掌にすっぽりとお

さまる大きさの、鉄鋼でできた龍の置物。

「叢雲は、どこへ行ってしまったのだろう」

龍の置物を懷にしまいながら、草薙が空を見回して首を傾げた。

「那薙さんが息を吹き返しませんっ」

泣き叫びながら、沙耶子は必死になつて蘇生措置をとつた。両手を重ねて心臓を圧迫し、肺へ呼吸を吹き込み、那薙の名を大声で呼ぶ。何度も繰り返している沙耶子のこめかみから汗がふきだした。沙耶子の顎からしたたる熱い滴が、那薙の頬に落ち、耳へと伝い濡れた髪へ吸い込まれた。

「那薙さんっ、叢雲さんっ。帰ってきて」

胸郭が沙耶子の息でいっぱい膨らまされること数度目。那薙の顔が苦痛に歪み、体中の筋肉が攣つたように背中を反らせたあと、はあっ、と息を吸い込む音がした。

「那薙さん」

那薙の目蓋が開き、灰色の瞳に冬の青い空が映つた。その空の色をした水滴がひとつ、目の端からこぼれ、こめかみへと伝い降りる。掠れた、ほとんど聞き取れない声が呟いた。

「ああ、あのまま、どこまでも広がって、とけてゆきたかったのに」
「駄目ですっ。どこにも逝つたら駄目です」

ぼろぼろ涙をこぼしながら、沙耶子は訴えた。那薙の瞳が動いて、沙耶子に向けられる。空を映したままの瞳が、ふわりと和んだ。そして、深く息を吸い込んで、眼を閉じた。

「わたしはあなたの剣だから、それがあなたの望みなら、どこへも行きはしない」

掠れてはいるものの、深みのある声が那薙の喉から放たれた。

「草薙、そこにいるのか」

「いついかなるときも御身のそばにあります」

姿勢を正す衣擦れの音と、恭しく改めた草薙の言葉遣いに、那薙が口の端を震わせた。

「嘘はいけない。常世にはついてきたことがないだろう」

「あなたが呼んでくれなかったからです」

草薙も口の端を上げて笑った。そうするとふたりはとてもよく似ていた。那薙は体を動かそうとして呻き、顔をしかめた。

「草薙、さっきの歌を」

「御製の歌ですが、それでもいいのですか」

頭を転がして、那薙は草薙を見上げた。

「わたしは、誰も恨んではない。もうずっと前に、憎むこともやめた。ただあの夜の、かれの最期が忘れられないだけで……」

吸い込んだ冬の冷気が肺を突き刺す痛み、那薙は息を止め、ぎゅつと目を閉じた。

「かれは、私の名を呼ばなかった。かれが私に授けた名を」

「だから、海の底を選んだのですか」

草薙の問いに、那薙は応えなかった。草薙は沙耶子の肩越しに那薙を覗き込んだ。那薙が息を吹き返して以来、草薙の飄々としたところは影を潜め、どこかへりくだった奥床しさが言葉にも物腰にも表れていた。

「叢雲、あなたが赦せないでいるのは、護神剣の勤めを果たせなかったあなた自身なんです。その祟りを鎮めるために、私は在るのです。いにしえの記憶があなたの魂を苛むのなら、いつでも、何度でも鎮めの唄を捧げましょう。愛しい子供たちをなくした辰子さんのためにも、舞を納めましょう」

草薙は背筋を伸ばし、鉾先鈴を掲げてしゃりん、と鳴らした。

『あめつちの』と、鈴の他には伴奏のない、だが朗々とした草薙の唄声が森を渡り、空へ吸い込まれ、春の慈雨の如く大地に降り注ぐ。

沙耶子は魂が洗われるようだと思った。いままで生きてきた過去の、家族や友達に対して犯した大小の過ちが赦され、他人に刻みつけられた心の傷の痛み悲しみが、温められた雪のように融かされてゆく。

近くでへたり込んでいた奈津子は、両手で顔を覆って滂沱の涙を

流していた。

手がぎゅつと締めつけられる感覚に、沙耶子は下を見る。沙耶子が無自覚に両手で握っていた那薙の右手が、沙耶子の指を握り返していた。唄に合わせて袖を翻し舞う草薙と、その背景の冬空を見つめる那薙の目尻から、幾筋かの涙が伝い落ちていた。

沙耶子はそつと抜いた片方の手で湿った那薙の髪を撫でた。温かな手指の感触に眼を細めた那薙の瞳が、波ひとつない朝風の、海の安らかさに満たされていく。沙耶子もまた、溢れる涙に頬が濡れるのを感じていた。

森の鳥獣も集まり、誰もがうつとりと聞き惚れていた唄声が唐突に止まった。草薙は上空を見上げ、緊張した声で警告する。

「まだ、鎮める神が残っていたようだ。辰子さんどころではないのが、この森に降りたよ。まあ、あれだけ派手にやってしまったら、

田沢湖どころか、わっかない稚内の御崎神でも感じ取れただろうね」

那薙は肘で上体を起こそうとしたが、体に残る痛みと痺れに、悲痛な叫びを上げた。

「八郎さんですか？ もう辰子さんは封じたんですから、僕の仕事は終わったことにしてくださいっ」

「そうしてもいいのだけど……」

ほつと頬をゆるませた那薙を上目遣いに見つめ、草薙は言いにくそうに鈴をいじりながら付け加えた。

「太田さんが捕われてしまった」

「マーくんが来てるってどういうことっ」

奈津子が太田の名にパニックを起こして沙耶子を問い詰める。沙耶子は奈津子を宥めながら状況を説明するのに、少しばかりの時間を要した。

辰子が封じられて奈津子にかけられた暗示は解けたものの、一ヶ月も行方不明であったという自覚は奈津子にはなかった。沙耶子にこれまでの顛末を聞き終えた奈津子は、婚約者にすべてを知られた

ことに愕然とし、さめざめと泣き出した。

那薙も草薙も奈津子に対して警戒するようすはない。那薙は消耗が激しく、その回復を助ける草薙もそれどころではなかった。

草薙がなにやら小声で詠唱しながら、那薙と両の掌を合わせて灵力を交流させている。その手の握り方とか、那薙の恍惚とした表情とか、沙耶子はわけもわからずム力ついたが何も言わないことにした。

小さな咳とともに、那薙が握り合わせた片方の手を上げて草薙に呼びかけた。

「さつき、上空で辰子さんを封じたとき、御霊の一部とともに彼女の記憶が流れてきました」

草薙は眼を閉じてうつむき、ゆっくりとうなずいた。

「御佐和湖に身を投げた女性たちの多くは、胎児の御霊と記憶を取り去って人界に返していたのだね。望まれない命と、還るところのない絶望した魂だけを湖の底に受け入れて」

手を放した草薙は、ゆったりと微笑んだ。那薙は体を起こして訴える。

「むしろ追い詰められた女性たちを救っていたのですから」

草薙は鋼色の手を那薙の額に当てて黙らせた。

「神議かむはかりにおいて諮はかられるのは、辰子姫が神議を超えて人界の定めに干渉したことじゃない。魂魄こんぱく流転るてんの理ことわりを外れて種を再生しようとしたことだよ。神議の総意なくして、彼女を田沢湖へ帰す権限は、私にもあなたにもない」

眉を寄せ、草薙を睨みつけた那薙は、すぐに諦めたように嘆息した。

「だからといって、太田さんを放っておくわけにもいきません」

自力で座れるまで回復し、ついさつきまで痺れる指先を閉じたり開いたりして感覚を確かめていた那薙が、そう断言した。

「では、八郎どのを封じるしかない」

草薙は、体を起こした那薙の背中をささえて言った。同時に単ひつえの

袖から一口大の白くて丸いものを指先でつまみ出して那薙に食べさせた。頬をもぐもぐとさせて飲みこんでから那薙は話を続けた。

「大人しく田沢湖に帰ってくれたらそうしなくてもすむんですが。わざわざ領域を出てきたってことは、相当の覚悟でしょうから、無理な話でしょうね。しかし、叢雲は辰子さんを封じるのにかなり霊力を使ってしまった。逆に封じられてしまう確率のほうが高い。ぼくは八郎さんの眷族神にはなりたくないです」

語尾を嘆息とともに吐き出した那薙に、草薙はふたつめの丸くて白いものを差し出した。表面に何か文字が書いてあるのを見て、回復呪文付きの饅頭か何かだろうかと沙耶子は推測した。

「あなたが八郎どのの眷族神になったら私も困るんだ」

那薙は草薙の言葉にうなずきながら、左の掌を見て溜め息をついた。草薙の霊力も、黒く壊死した皮膚までは再生させられないものらしかった。このような揉め事に巻き込まれ、そのたびに火神迦具土神の力を借りていたら、そのうち全身くまなく火傷だらけになってしまうのではないだろうかという不安に、那薙の眉が曇る。

沙耶子は、地べたに座り込んで相談している那薙と草薙の横に仁王立ちになった。

「じゃあ、草薙さんが八郎さんと対決したらどうなんですか。叢雲と同じくらい強いんですよ」

草薙から三つ目の白くて楕円のものを受け取り、口に放り込みつつ、那薙が目を細めて沙耶子を見上げた。

「言っただでしょう。草薙は戦うことを許されてないんです。かれのあるじも草薙の力を解放させることはありません」

「草薙さんのあるじって、どこにいますか。連絡とれないの」「東京です」

草薙はあっさりと答えた。

「でも、私のあるじだという自覚はないんじゃないかな。私の神体が櫃から出されることがまずないのでね、私もめまぐるしく代わるあるじの顔や名前はいちいち覚えきれない。皇統が南北に分かれて

奪い合われたこともあつて、どっちが私のあるじなのか、六十年も揉めていたこともあつたくらいなんだ。私はどっちの味方をするわけにもいかないし。海の底で遊んでいた叢雲はそんな私の苦勞は知らないだろう」

恨みがましく鈴の鉾先を那薙に向けて揺らす草薙に、那薙は片手を上げて宥める仕草をしたが何も言わなかった。

長い間の鬱憤が溜まっていたらしい草薙の文句は、そこで終わらない。

「それでも、ここ二代の御世は長く続いているので、御名と御姿は記憶しているけど。先代のときなんてね、国家存亡の折なんだから召喚して解放してくれば早いのに、ただ祈るだけだから私も出せる神威が限られて……とても疲れたよ」

草薙は矛先鈴の先端に唇を当てて溜め息をついた。

「とにかく地上に顕れてこの方、代々のあるじで私を直接その眼にした方はほとんどいない。まして柄を握ったあるじの数など、片手の指で足りてしまう」

「主人なのに？」

草薙の愚痴が示唆するところの『主』が誰かということを漠然と推測し、『ちよつと携帯で呼び出して直談判』のできる相手ではないことを察した沙耶子に、草薙は肩をすくめる。

草薙の袖から出てくる四つ目の白くて丸っぽいものを頬張りながら、那薙は森のほうへ視線を逸らした。草薙がさらに鉾を揺らして那薙を睨みつける。

「叢雲のせいだよ。神剣天叢雲をじかに眼にしたり触れたりしたらと祟り殺されると、人間たちは固く信じているんだ。私は叢雲とほとんど同じ仕様で造られたから、並の人間には見分けがつかない」

那薙は決まり悪そうに首の後ろを掻き、伸びすぎた髪の毛を目の前に持ってきてその長さに驚いている。

「そっくり同じになって、どういうこと？」

「私は、叢雲のレプリカだから」

草薙が横文字を使うたびにずるりと肩が落ちそうになる沙耶子だが、このときはそれどころではなかった。口をぱくぱくさせる沙耶子を草薙が見上げ、鈴の鉾先を那薙に向けて上下に揺らす。

「叢雲は名を封じられても、どれだけ人々に崇められ祀られても、鎮めることが難しい神だった。新羅の僧に自分を盗ませて逃げようとしたら、隙を見て皇統に災いを為したりするので、叢雲の祟りを牽制するために神剣の複製を作ることが決定されたんだ。朱鳥元年のことだよ」

「って、いつの時代ですか」

聞いたこともない年号を言われてもさっぱりな沙耶子は那薙に水を向けた。

「飛鳥時代の終わりごろです」

なんとなく視線を逸らして答える那薙に、沙耶子は辰子の罵倒を思い出している。あつたんだなと考えた。

「草薙さんが叢雲のコピーだからって、それがどうして八郎さんと戦えない理由になるんですか」

那薙が沙耶子を見上げた。草薙の美貌には及ばないが、やはり雰囲気とか表情とか似ているものがあつた。その那薙が草薙の代わりに説明を始める。

「草薙には穢れがないのです。日輪の依り代でもあるかれは、これまでも、そしてこれから穢れを受けてはならない。まして、草薙が他の神の足下に降るということがあつては、絶対になりません」
断言する那薙に、それはちょっと過保護じゃありませんか叢雲お父さん、いえお兄さんですかそれとも、と沙耶子は突っ込みたくなつたが、那薙の鋭い眼を見て言葉を呑み込んだ。代わりに別の問いを投げかける。

「穢れがない、ってどういうこと」

那薙は少しためらって、それから低い声で答えた。

「人や神、妖を斬ったことがない……他者の肉を斬り、骨を断ち、血や精、靈力を吸ってその力としたことがない、という意味です」

その意味を考えて、沙耶子は背筋にすうつと冷たい空気が触れたような気がした。御佐和主の磁界に顕われた叢雲の、禍々しい哄笑が耳の底に甦ったからだ。

「だから、叢雲さんが戦うわけですか」

怖気をはらうように、沙耶子は再び問いかけた。

「ですね」

那薙はどこか落ち着きなく答える。

その横では草薙が左手を右の袖に入れ、また白くて丸いもの、むしろ楕円に近い回復呪文入りの餅だか饅頭だかを、こんどは二つ出して那薙に渡した。

「でも、私は叢雲を助けることはできる。親族属性で叢雲の居場所はあるし、必要な霊力を送ることも。八郎どのを傷つけることなく封じる方法があれば、私も関与できる」

ずつと黙って三人の話を聞いていた奈津子が、おずおずと口を挟んだ。

「あの、草薙の剣って、ヤマトタケル伝説の、あの剣ですか」

「あれは私じゃない。あのときの剣は叢雲のほうだよ」

草薙が鋒先を那薙に向け、爽やかな微笑を添えて答えた。那薙は餅を口に含んだまま手を小さく上げる。

「この草薙が造られる三、四百年以上も前のことです」

草薙が身を乗り出して話し始めた。

「あの王子も叢雲の祟りに遭って災難なことだった。これはミヤズヒメに聞いた話だけだね」

那薙が手を伸ばして、横道にそれようとする草薙の肩を引いた。

「草薙。それは昔のことでしょう。第一いまはそれどころじゃない。太田さんを取り戻さなくては」

那薙は首を回し、手足を伸ばしてこわばりをとった。立ち上がるうとしたがよろめいて、草薙に支えられ、座りなおした。

「酒のほうが良かっただろうか」

「酒は眠くなりますから、やめたほうがいいです」

草薙は袖からさらにふたつの餅だか饅頭だかを出して那薙に渡した。那薙は黙って受け取り、口に放り込む。

太田が捕えられているというのに、この緊張感のなさなんだろうと沙耶子は呆れた。だが、いつときでも呼吸や心臓が止まってしまった那薙を、太田の救助にせかすのも心苦しくはある。

「あの、那薙さん、さっきから何を食べているんですか」

奈津子の問いかけに、口の塞がっている那薙に代わって草薙が「つこりと答えた。

「こしあんを羽二重餅はぶたえもちでくるんだ神宮名物の『きよめ餅』というものだ。ほら、ここに『きよめ』の銘が入っているだろう。こつちが栗入りで、那薙のお気に入りなんだよ。お茶がないのが残念だな」

沙耶子は両の拳をぎゅっと握った。

「お菓子なんか食べてる場合ですかっ」

草薙は驚いて沙耶子を見つめ、それから那薙に同情の眼差しを向けた。

「あなたのあるじは神使いが荒いな。ひと柱の神を封じるのにどれだけのエネルギーを消費するか、ちゃんと話しておいたほうがいい」
そう言い終えると、神々しい笑顔で再び沙耶子を見上げる。

「腹が減っては戦はできないって、言うだろう。さやこさんたちもお食べなさい」

空腹という感覚を知るはずのない草薙は、さらに袖の下かふたつのきよめ餅を出して、沙耶子たちに勧めた。

第十二章 八郎太郎の急襲

那薙たちが湖に潜ったあと、太田は読む本でも持つてくればよかったと思った。携帯は圏外で使えず、内蔵のゲームを一通りしてしまつと飽きてしまふ。それでも暇なときに聴こうと、数週間前からダウンロードして溜まっていた音楽を聴いているうちに寒さが増し、少しでも体温を上げようと歌も歌つてみた。

「おれ、何しに來たんだろうな」

やむのか降るのはつきりしない雪模様にも少し苛立ち、那薙のバックパックの食糧袋を覗き込む。三本の缶コーヒーを見つけ、一本を焚き火で温めた。

「チョコやチョコナッツバー以外のものはないのかな。甘いものはもう……なんだこれ。タマゴボーロ。……那薙さん、こういうのも食べるのか」

幼児食ではないかと呆れてしまふ。しかし懐かしさに食べてみたくなつて袋を出した。

「これたしか、口の中で溶けるんだよな。うわっ」

突然、クラチが膝の上に飛び乗ってきて、大田は切り株から転げ落ちそうになった。じつと見上げるクラチの視線が太田の右手に固定されていた。

「これ、もしかして、君たちのおやつとか？」

クラチは上下に鎌首を揺らした。

「おれも蛇と話ができるようになったよ。誰が信じてくれるんだ」
太田はひとり言を言いながら袋を開いて、親指と人差し指でボーロをひとつつまみ出す。しかし、クラチの口に入れてやる勇氣がない。指ごとぱくつと持つていかれそうだ。毒蛇ではなさそうだが、牙はそれなりに威嚇的だ。

太田はぼんと投げてみた。クラチは眼にも止まらぬ速さでシュツと首を伸ばし、ボーロを口で受けて呑み込んだ。すぐに首を伸ばし

て次を催促する。

「ちよつとは味わえよ。唾液と混ぜて口の中で溶けるのが醍醐味なんだぞ」

ひとつを自分の口に入れては、ひとつをクラチに投げてやる。どんな方向や距離に投げてても、クラチは空中でボーロをキャッチする。鼻先でボーロを左右に揺らしてフェイントをかけても、落とすことはない。

「すごいなあ。もしかして、那薙さんに仕込まれているんだろうか」
太田是那薙が一人暮らしなのかどうかは知らなかったが、自分のアパートを基準に、ワンルームマンションで孤独な青年が蛇に芸を仕込んでいるところを想像してみた。

「キモい、っていうか、ヤバイよ。さっちゃん苦勞するぞ」

勝手な想像に苦笑いしながら時計を見る。一時間が経過していた。何度もクリアした携帯のゲームに飽きたころ、下草を踏む音がしたような気がして、太田は顔を上げた。驚き叫びながら立ち上がる。
「奈津子っ」

探していた婚約者が木立の中をこちらへ向って歩いていた。名前を呼ばれたその女性は、太田の姿に眼を瞠らせた。

「マーくん。どうしてこんなところに」

声もつき合っていたときそのままの馴染み深いトーンだ。一步踏み出そうとした太田の脳内に警報が走った。

これは奈津子の姿をした妖怪なんだろうか。

ちらりとクラチのほうを見ると、クラチは首を横にふっていた。

これは奈津子ではないと判断し、太田は両手をぐつと握り締めて心構えを固める。

だが、一介の妖怪がなぜ、奈津子の姿や声をそのままに再現できるのだろう。奈津子の太田の呼び名まで妖怪が知っているのが信じられなかった。まさか奈津子を捕まえて乗っ取ったのではないだろうか。

奈津子はぱたぱたと駆け寄ってきた。

「こんなところで何をしているの、マークくん」

「奈津子こそ、こんなところで何をしているんだ。一ヶ月も行方不明になって」

そして太田は突然、奈津子が失踪した理由を思い出した。

「奈津子……おまえ」

どう切り出しているのかわからない。奈津子は太田の顔を見つめ、わっと泣き出した。

「ごめんなさい。私、マークんに合わせる顔なんかないのに。探しに来てくれたのね」

奈津子は身を翻して立ち去ろうとする。太田は慌てて一歩踏み出し、追いかけてようとした。その肩にクラチが飛びついてシャーッと威嚇した。

「うわっ」

怯んだ太田は尻もちをついた。クラチは首をねじり、奈津子にも向って威嚇の音を立てる。太田は落ち着きを取り戻した。

「いま、この森に人間はいないはずだ。お前は奈津子の姿をした妖怪かなんかだろう。騙されないぞ」

「ひどい、マークくん。私はたしかにマークくんを裏切ったけど、妖怪呼ばわりなんてひどすぎるわ」

涙をぼろぼろ流して膝をつく。泣き方までそっくりだった。まぶたを赤くして太田を見上げた奈津子は、潤んだ瞳で訴えた。

「お願い、私の話を聞いてマークくん。ここは寒すぎるわ。あつちに小さいけど、暖かいお茶屋があるの、そこへ行かない？」

「え……」クラチがずるずると太田の肩と首を回るのが鬱陶しい。

「いや、行かない。おまえが奈津子のはずがない。もし奈津子だとしても、中身はきつとおれを騙そうとしている悪い妖怪だ。こんな昔話の定番じゃないか。そのうちおれの背中のはくろの場所とか言い当てたり、お袋が病気だから早く家に帰るとか言い出して、境界から引つ張り出すつもりなんだろう。いつまでも江戸時代と同じ手は使えないんだぞ。二十一世紀の人間を馬鹿にするなっ」

途中からは声も高くなり、最後のほうは叫んでいた。奈津子は呆れ顔になる。

「何をわけのわからないことを言ってるのよ、マーくん」

太田は切り株に座りなおした。奈津子は注連縄に近づき、そこで立ち止まった。

「入れないんだな。じゃあ、おまえは人間じゃないんだ。那薙さんがそう言っていたんだから」

奈津子の姿をしたものは悔しそうに顔をしかめた。注連縄の周りをぐるぐると回り始めた。数歩ごとに立ち止まり、注連縄に触れようとして弾かれる。

それはあの「ここにもお札が、ああくち惜しや」と言いながら家の中に侵入しようとした怪談の悪霊を髣髴とさせる。

太田は唾を呑み込み、袈裟がけにゆるく巻きついたクラチの胴をぎゅっと握り締めた。

奈津子の姿をしたものは注連縄を一周すると齒軋りをした。

「うまそうな人間がここにいるのに。たれかここを破れるものはおらんのか。これだけ体の大きな人間だ。たつぷりと精に溢れている。しかもあの剣の霊力がたんまりと含まれているではないか」

奈津子の声で、老人のような喋り方になった。注連縄の周囲で『おおう』という呻き声ともざわめきともつかないものが響き渡った。太田はぞつとして後じさりそうになったが、狭い結界の中で下がる危険を思いだす。

注連縄の周辺の空気が急に密度を増した。結界の外が水槽の底のように歪んで見える。鉛色や薄緑色の影がもやもやと形を成し始めた。

太田は結界の真ん中にじっと座り込んで、クラチにしがみついた。

那薙さん、お札かなんか残してくれたらよかったのにつ。

そのお札代わりのクラチが、鎌首をもたげて奈津子の姿をしたものの動向をじつと睨みつけている。

ゆらゆらと揺れる複数の影が奈津子の周りに集まり、注連縄に触

れそんな距離でぐるぐると回りだした。結界を護る迦具土の焚き火は揺らめき、ときおり消えそうなほどに低くなる。クラチは奈津子の動きを追って首をぐるぐる回しながら、それ以上ねじれなくなる。と反対側に首を巻き戻しては見張りを続けた。海鳴りのような妖霊たちのざわめきは森を満たし、注連縄は激しく波打ち、注連縄に結び付けられた紙垂は頼りなく吹きさらされて千切れそうになる。

「ごおう、という音が太田の頭上の枝を鳴らして今にも落ちてきそうに撓んだ。

もうだめだ。那薙さん、数が多すぎる。

クラチが気丈に鎌首をもたげ続けているなか、太田は両手で耳を押さえて顔を下に伏せた。

ドオン、と銃声が響いた。

目の前にいた奈津子の体が粉々の肉片になって飛び散り、いくつかの赤い塊が注連縄に沿った結界の見えない壁に弾かれて地面に落ちた。

「奈津子っ」

太田は驚き立ち上がった。自分も撃たれるのではという恐怖に、銃声の出所を求めて忙しくあたりを見回す。

遊歩道を、こちらに向ってゆつくりと歩いてくる男の影があった。肩に散弾銃を担ぎ、猟師の服装をしている。髪は短く刈り込まれ、顔は日に焼けて皺が刻まれていたが、四十代の半ばくらいと思われる。含み笑いを浮かべた口にはタバコを咥えている。

太田は奈津子だったものの肉塊を呆然と見下ろし、男が近づくまで動くことができなかった。

「危ないところだったな、兄ちゃん」

猟師はにやりと笑って太田に話しかけた。太田は我に返って叫んだ。

「なんてことをしてくれるんですか、あれは何かに取り憑かれただけの奈津子だったかもしれないのにつ。ここここ、殺してしまつて」
猟師は、唾を飛ばしながらわめき散らす太田に笑いかけた。

「よく見ろよ、兄ちゃん。それはただの妖のものだよ。八百年も生きりゃ、御魂^{みたま}がなくても大抵の妖物は人に変化できるようになるもんだ。サトリの系統なら人の心が読めるから、兄ちゃんの頭の中を覗いてあんたのいい女の真似だつてできるんだよ。そこにいる蛇ん子は御大がついているから、百年もすりゃ人語を喋るようになって、二百年で別嬪さんに変化するようになるだろうがな」

眼を剥いて頭を掻き毟っていた太田は、いきなり現れて妖怪を銃殺してしまったこの男をまじまじと見つめた。

「あなたは……誰、というか、何者ですか」

「おれは八郎太郎だよ」

「……つて」太田は聞き覚えのあるその名前の主が誰だったか思い出そうとした。

「奥さんに逃げられた八郎さんですか」

銃口を鼻先に突きつけられ、太田は反射的に両手を上げてバンザイをした。クラチはいつの間にか地面に下りて太田の足元に小さくなっている。

八郎の太い声が太田の腹に響いた。

「口の聞き方に気をつけなよ、兄ちゃん」

眼を真ん丸く見開いた太田は、喉をごくりと鳴らしてうなずいた。「すみません」と情けない声で呟く。

八郎は散弾銃を肩に担ぎなおした。

「まあ、いいや。妖のやつらは追ひ払ったよ。やつらはおれのそばにや来れないからな。そこから出てきても大丈夫だ」

言われて肉塊を見ると、確かに奈津子が着ていたはずの服や靴の残骸はない。代わりに肉の端には焦げ茶色の毛皮がついていた。何かの獣と思われた。

「でも、那薙さんたちが帰るまで、ここから出ないように言われているんです」

八郎はタバコの端を噛むと、けつ、と音を立てて吐き捨てた。「なんか食いもんじゃないか。酒とかあったら、もっといいけどな」

「酒も食べ物も一通りありますけどね。コンビニおにぎり以外はつまみになるものはないですよ。那薙さん甘党らしくて」

「あいつウワバミのくせして甘党なのかよ」

「那薙さんを知ってるんですか」

太田は気が弛んできた。怖い思いをしたところを助けてくれた相手に対する警戒を保つのは難しい。それにクラチがおどおどと太田の足元でうずくまってるせいもあった。

「ああ、貞観年間じょうがんねんかんからの知り合いさ。つっても、年に一度の神議かむはかりで顔を合わせるだけでつき合いはなかったけどな。てか、叢雲は無愛想な奴だったから、あいつとつき合いのあった奴なんか、草薙くらいなもんじゃねえか」

「貞観年間……って、西暦で何年ですか」

太田は吟醸酒の瓶を差し出す。寒さにかかわらず額から汗をかいていた。

「あん？ 知るかよ。清和天皇せいわの頃だ。兄ちゃん、清和天皇って知ってるか」

「いえ……」

「清和源氏の先祖さまだよ。鎌倉幕府開いた源頼朝とか、足利將軍家とかのさ。知らないとか言うなよ」

八郎は瓶に直接口をつけて酒を飲み始めた。

「ええ、義経とかはドラマで見ました」

なぜ汗が滝のようにでるのかわからないが、太田はチョコバーを出して渡す手が震えるのを止められなかった。

「鎌倉幕府はいつからだっけな」

「いい国作ろう頼朝さんだから、西暦で一一九二年です」

「そっから三百年は前ってことさ。幕府が開く前に叢雲はいなくなっちゃったが、今頃になって封が解けたんだな」

太田の頭は混乱してきた。現実こんなことがあっていいものだろうか。

「あんたも一杯どうだ」

八郎が吟醸酒の瓶を差し出した。太田は首と両手を同時に横にふった。男と間接キスをする趣味はない。うろたえる太田を無視して、八郎は注連縄をまたいで結界の中に入ってきた。

「あつ」

太田は驚く。八郎は入ってこれるのか、入ってきていいのか、太田にはわからない。見回すとクラチは姿を消していた。八郎が嫌な感じのにやにや笑いを浮かべた。

「兄ちゃんが叢雲の酒をくれたからね。おれは招かれたことになるのさ。だからこの結界はおれには効かないってことだ」

ぐつと上腕を握り締められ、太田は恐ろしく強い力で引つ張られた。逆らうこともできずに結界から引きずりだされる。波打ち際に連れてこられた太田は、銃を突きつけられ、そこに無理やり膝をつかされた。

「もうすぐ奴らが帰ってくるからな。場所はあけておいてやるのが親切つてもんだろ。そこでじつとしてろよ。逃げようなんて思わないよ」

太田は寒さのためでなく、両手を地面についたままぶるぶる震えた。

どれだけそのままの姿勢をとらされたのか、太田には覚えがない。八郎が砂利の上に吐き捨てるタバコの吸殻の数が、なぜ増えないのだろうと思っていると、八郎の声が頭上からふってきた。

「やつと来たか」

注連縄の張られた結界の中にふわっと現れた四つの人影を見て、

八郎は啞えたタバコを吐き出した。

「マーくんっ」

奈津子が叫び、太田が「奈津子っ」と大声で呼び返した。とたんに八郎に銃口で頭を小突かれて黙らせられる。

「マーくんは何するのよっ」

結界から飛び出そうとする奈津子を、沙耶子が慌てて後ろから抱

きとめる。

八郎は薄笑いを浮かべて、那薙一行に声をかけた。

「双神ならび立つのをみるのは、千年ぶりだな」

「四捨五入して八百年だよ」

即座に訂正する草薙を八郎は鼻で笑う。八郎は大きな黄色い眼でじろりと那薙をねめつけた。

「そうか八百年ぶりか、最後に会ったのは……」

「寿永^{じゅえい}一年の神議です」

明確に答えたのは那薙のほうだ。

「ああ、そうだった。あん時のあんたも暗かったなあ。誰とも口聞かねえし、また何かやらかすつもりじゃないかって、おれらツガル^{じしょうじゅえい}の連中はわくわくして待ってたんだぜ。治承^{じしょう}寿永の乱だったけな。あれもあんたの祟りか」

「間接的には」

那薙は口をほとんど開かず、平坦な口調を変えない。八郎は鼻で笑う。

「あんたらの兄弟喧嘩にいいように踊らされてる人間たちがいい面の皮だぜ。それで結局あんたは皇統に祟るのはもう諦めたのか」

「八郎さんには関係のないことでしょ」

無関心な口調を崩さない那薙に、八郎は歯を見せて笑った。

「祟り神がすっかり牙をぬかれちまったなあ。瀬戸内の龍宮城で乙姫様にでも骨抜きにされたか」

「ええ、鯛やひらめと毎日踊って遊んでました。あなたも閉ざされたカルデラ湖よりも、オホーツクの海で流水相手に泳いできたらくです。世界が変わって見えますよ」

さりげなく棘を含ませた那薙の言い草など、八郎は気にしたようすもない。

「カナヅチのあんたが泳げたわけないだろ」

八郎が自分の冗談に大笑いする。ここでカナヅチではなくツルギだと突っ込んで欲しいのだろうが、そこは誰もが無視することにし

たらしく、草薙も何も言わなかった。

「まあ、そのうちそうするさ。ところで、おれの女房を返してもらいにきたんだけどな。捕まえてくれた礼はするさ」

草薙が一步前に出た。凜とした声と態度を崩さない。

「辰子さんは田沢湖には帰りたくないということだったので、神議の管理下に置かれている。八郎どのの一存で連れ帰ることはできない」

「夫が妻を連れてゆくのに、神議の許可なんぞいらねえ。こっちが感謝しているうちに大人しく辰子を渡しな」

「渡せないね。八郎どのには来年の神議まで待っていただく」

「待てねえよ」

「夫といえども妻の意志に反して連れ帰るのは、DVというものだ。認めるわけにはいかないね」

草薙が桧扇を頬にあてながら、落ち着き払って断言する。沙耶子は驚いて那薙に耳打ちした。

「神様の世界にもドメスティックヴァイオレンスってあるの」

下目遣いに沙耶子に視線をあてた那薙の頬が、かすかにゆるんだ。「むしろ人間界以上に弱肉強食の階級社会ですよ。男女の性差はあまり関係ないですね。草薙は昔から人間のはやり言葉を使いたがる癖があつて」

DVは流行ではないと沙耶子は訂正しようとしたが、八郎の恫喝に遮られた。

「どうしても渡さねえってんなら、こいつを頭から喰っちまって、力づくで渡してもらうまでさ」

八郎が苛立ち、ぐったりしている太田の襟を引っ張り上げた。太田の顔が蒼白になり、体がわなわなと震えだす。

「いやあーっ。マーくん。那薙さん、なんとかしてください。マーくんを助けてえっ」

耳に突き刺さる奈津子の悲鳴。火傷した左手にすがりつかれて、那薙は呻き声を上げた。それでも息を吸い込んで八郎を説得する。

「太田さんを返しなさい。あなたの家庭問題に人間を巻き込むのはどうかと思いますがね」

「よその家庭問題に干渉しているのは誰なんだ」

八郎が怒気をはらませてさらに恫喝した。草薙は毅然と言い放つ。「辰子さんが御佐和湖でやっていたことは、すでに家庭問題を通り越していた。八郎どのも知らぬわけではないだろう」

那薙は、すがりついたまま叫び続ける奈津子を落ち着かせようと耳元で囁く。

「単なる脅しです。人神ひしがみの八郎さんが人間を食べることはありません。大丈夫です」

目の前で妖怪惨殺を目撃した太田が聞いたら異議を申し立てただろうが、距離が離れていたために八郎たちには聞こえなかった。『大丈夫』を耳元で繰り返された奈津子の目の焦点は遠くなり、静かになる。

「人神？」

囁き返したのは沙耶子だ。

「八郎さんはもとは人間でした。それが禁を犯して龍となり、その霊力を怖れられ崇められているうちに神威を蓄えていったのです」

那薙は左腕にぶら下がっていた奈津子の手を放し、沙耶子に任せた。草薙に向き直り、断言する。

「こうなったら、八郎さんを封じてしまっしかありません。神議の決定に異論を挟んだというだけで、次の神議まで封じられる理由になります」

沙耶子は那薙の右腕に触れた。

「って、那薙さんがやらないといけないんですか」

那薙は沙耶子には答えず、誰にともなく声を張り上げた。

「誰がいませんか。田沢湖の八郎さんを封じて名を上げたい神はいませんか」

梢がざわめき、風が吹きすぎる。湖の面が泡立ち、波が不規則に立ち上がったが、すぐに静まった。森の奥で突風が何かを転がして

いったが、下生えの向こうだったのでよく見えなかった。

誰も名乗りを上げない。那薙は草薙に声をかけた。

「しかたがありませんね」

「わるいな、叢雲」

那薙は体ごと沙耶子に向き合った。

「人の体のままでは八郎どのには敵いません。辰子さん同様、八郎さんを封じるよう、叢雲に命じてください」

沙耶子は那薙の鋼色の瞳を見上げ、せわしく息を吸い込んだ。

「そしたら、また那薙さんの体が……。戻って来れなかったら、那薙さんは死んでしまうのよ。叢雲も、戻ってくる場所がなくなってしまう。なんで那薙さんばかりなの。八百万も神様がいるんですよ？ どうして誰も出てこないのよ」

草薙がその問いに答えた。

「八郎どのは、もとは争いを好まない方だったんだけどね。辰子さんがからむと無敵になるんだよ。触らぬ神にんとやらで、みな、及び腰になっているんだな」

桧扇の五色の紐を指先で巻き取りながら人事のように語る草薙に、沙耶子はイライラが募ってきた。

「那薙さんが死ぬかもしれないのに、どうして草薙さんは平気なんですか」

「那薙が死んでも叢雲は滅びない。人の肉体もまた、御魂の宿る依り代の一形態にすぎないんだよ。この、鉾先鈴と同じだ」

草薙が手首をひるがえすと、桧扇が鉾先鈴に変じて涼やかな音を鳴らした。沙耶子は納得できずにきつと草薙を睨みつける。

「那薙さんにだって、家族や友達がいるのにそんな言い方ないじゃない」

抗議に動じない草薙につっかかるのをやめ、沙耶子はくるつと体を返して那薙に矛先を向けた。

「那薙さんっ。使い捨てにされそうになって、黙っているんですかっ」

那薙は眉をわずかに動かした。そこに人間としての葛藤があるのか、外からは測^{はか}り知ることにはできない。眼の前に垂れてくる前髪をうるさそうにかきあげた那薙は、他人事のようにつぶやいた。

「死とは無縁の存在である草薙や叢雲に、人間の価値観や常識を求めるのは無駄です」

「那薙さんが死ぬのは駄目。辰子さんを返しちやえばいいのよ」

沙耶子は涙眼になってごね続けた。那薙は困惑して、沙耶子を説き伏せようとする。

「叢雲を解放できるのは、沙耶子さんだけです。さつきみたいに、あなたの息吹で那薙を生き返らせてくれませんか」

ぎゅつと口を引き結んだ沙耶子を見おろして、那薙は溜め息をついた。沙耶子はますます感情的になってまくし立てる。

「さつきはすぐに始めたからラッキーだったのよ。二分も心臓や呼吸が止まったら、あつというまに脳細胞が死に始めるんだから。五分で、蘇生率は五割以下になるし、脳に重い障害が残ってしまうの。神さまだから大丈夫だって言っても信じないんだから。噛み傷も火傷ひとつ自分で治せないくせにっ」

那薙は皮膚が黒く炭化してしまった左の掌を握りこんで、腰の後ろに隠した。

「二分以内なら、いいのかな。さやこさん」

草薙が口を挟んだ。那薙が呆れて草薙へ向き直る。

「二分で八郎さんを封じるのは無理です」

「では、五分では？」

那薙は少し考えてから答えた。

「五分なら、もしかしたら」

「だから、五分じゃ、後遺症があっ」

ふたりののん気さに沙耶子がキレて叫んだ。

「二分を五分に引き伸ばすことなら、私にできる」

草薙が涼しい顔で言った。

「仮死状態の那薙の周りだけ、時間を遅らせればよいのdarou?」

「そんな便利なことができるんですかつ。神さまだから？　だつたら五分なんて言っていないで、気前よく十分でも一時間でも伸ばしてください」

沙耶子の声が裏返る。草薙は泰然と手順を話し始めた。

「ムスヒノカミの磁界に那薙の肉体を移して、その境界を私の創る重力場で包めば、周囲から時間を遅らせることが可能だ。重力場の内側で二分経過した時点でこちらに戻せば、五分は稼げる」

沙耶子は理解できずに首を横にふった。草薙はゆっくりと噛んで含めるようにさらに詳しく説明した。

「あまり重力を強くすると、ムスヒノカミが重力を中和する境界壁を支えきれない。少しでも私の側からかける重力が勝ってしまうと那薙の体が潰れてしまうだけじゃない。下手をしたら、地球そのものが壊れて吸い込まれてしまうだろう。いくら私でも地上にブラックホールなみの重力場を維持して、同時にその空間を閉鎖しておくのは五分が限界だ」

それを聞いた那薙は笑い出した。

「そのアイデア、ぼくのほうでも使えそうです」

那薙と草薙は鋼色の瞳で見つめあい、数秒のちに同時に唇の両端を上げた。

那薙は沙耶子に向き直り、真剣な瞳で頼み込む。

「説明している暇はありませんが、叢雲本体なら、五分あれば八郎さんをなんとかできます。沙耶子さん、お願いします」

那薙の玉鋼色の瞳に、真摯な光が宿る。沙耶子はしぶしぶ応じた。「五分ですよ。五分経ったら、勝負がつかなくても帰ってきてください。そうでなければ許しません」

「わかりました」那薙は草薙へとふり向き、同じ色の瞳を合わせる。「あとは頼みます」

「任せなさい」

扇を揺らしながら笑みを浮かべる草薙に微笑み返した那薙は、注連縄をまたいで結界を出た。ゆっくりとした足取りで、八郎の待つ

浜辺へと下りて行く。

第十三章 雷神の闘争

「相談は終わりかよ。ほんとにこいつを食っちゃおうかと思い始めてきたところだ。おれが人間なんか食べないと思ってたかをくつていたら間違いだぞ。人の肉に興味はないが、殺すのは別にどうってことないんだからな」

「辰子さんは、ぼくが捕えましたから、ぼくのもです。欲しかったら、叢雲を封じて取り戻すしかありません。人間と交換するほど、辰子さんは八郎さんにとって安いものじゃないでしょう」

それは太田に対して失礼じゃないかと沙耶子は思った。那薙の暗示が解け始めた奈津子も同感らしく、可愛い顔の眉間に皺がよっている。

「おもしれえ。叢雲がおれの眷族になったらこんな愉快なことはないな。受けてやるうじやねえか」

「ですが、火山の噴火も洪水も土砂崩れも地滑りも今回はなしです」

「あと地震も龍巻も反則よ」

沙耶子が結界の中から大声で付け加えた。

「そりゃ不可能ってもんじゃないか。力がぶつかりあったらどうしても時空にしわ寄せがくる」

「では、その時空で競争するのはどうでしょうか」

那薙が提案した。

「競争？」

八郎はあつけにとられた。

「日本の領域の果て、四方神の印を受けて、先にここへ帰ってきたものが勝ちということではどうでしょう。制限時間は五分。太田さんの腕時計がデジタルでしたね。八郎さんの時計してもらえますか。叢雲是那薙の時計で計ります」

太田はおずおずとうなずいた。八郎はにやりとする。

「おもしれえ。人間のかけっこみたいだな。時空を曲げるのはなし

か」

「ルールですが、地上の磁場にも異空間にも干渉しないで、この次元における距離を移動します。移動の高度は成層圏内で地上二万メートル以上。それより下では航空機に衝突したり、衝撃波で墜落させるかもしれませんから、高度は守ってください。それから、この御佐和湖と四方神の領域以外で地面に触れてはいけません」

「移動中に足を引っ張るのは？」

「ご自由に」

那薙は不敵な笑いを浮かべた。

「果ての四方神の領域は北の宗谷岬、東の南鳥島、南の波照間島、西の与那国島、そしてここへ戻ってきます」

草薙が一步前に出た。

「私が四方神に印を空に上げるよう、通達しよう」

そう言つて、鉾先鈴を上空に差し上げた。鉾の先端から四つの光が弾け、四方へと飛び去る。

「面白れえ。さつさと始めようぜ」

八郎は太田を放り出し、浜辺に立った。十メートルあまりの龍形へと姿を変え始める。

八郎の尾に蹴散らされないように、那薙に支えられて戻ってきた太田を、奈津子と沙耶子が迎えた。沙耶子は八郎の嬉々とした表情が理解できなかった。

「なんで八郎さんはあんなに楽しそうなの。ただのかけっこでしょう」

「我々は、人界においては滅多なことでは自分たちの領域から外へ出ることが許されないのだよ。八郎さんは西日本や関東に分社を持たないので領域も狭く、南や西方面は、年に一度の神儀が行われる出雲より向こうには行ったことがないはずだ。なんといつても沖縄は日本に編入されて間がないこともあるし、龍宮城も近く、サンゴ礁の島も豊富で、神々の間でも人気のリゾートなんだ」

沙耶子は眩暈がした。立て板に水の草薙の説明を、脳が拒否して

いるのだろう。

草薙は沙耶子の問いに応えたあと、いそいそと櫛を等間隔に並べ始めた。細長い楕円の形に地面に突き立てられた八本の櫛の中に、那薙が腰を下ろした。

「沙耶子さん、叢雲の名を呼んで、八郎さんを封じるよう命じてください」

両手を胸の前で組んで、迷いを見せる沙耶子に、那薙が穏やかな微笑を向けた。

「大丈夫です。あなたが諦めさえしなければ、叢雲も諦めない。何があっても。ぼくを信じて、そして強く願ってください。何もかも、うまくいくと」

「でも……」

ためらい続ける沙耶子の肩に、那薙は手を伸ばして触れた。

「この体に戻ったら、沙耶子さんに話したいことがあるんです。だから、必ず帰ってきます。約束します」

那薙の声音に込められた確固たる意志を、沙耶子は感じ取る。

一見、地味で目立たない、穏やかな普通の若者。

体内に神が棲むとは、どういうことなのだろう。人の身でありながら、相神の穢れをも背負って生きるということとは。

沙耶子は両手を合わせて目を閉じた。

「八岐遠呂智叢雲尾羽張八拳劍。汝が劍の主の希う、キナコロカムの八郎太郎を封神し給わんことを」

叢雲の解放される轟音と地響きに、沙耶子たちは思わず地面に伏せた。顔を上げようとする暇もなく、湖上から連続する四つの爆発音とともに激しい衝撃波があたりを襲った。湖の中心に肉眼で見えるほどの大きな風の柱が二本、天を刺さんばかりに聳え立っていた。その風の柱が垂直に湖面に叩きつけられ、水のクレーターを穿ったかと思うと、押し上げられた水壁が輪になって空へとせりあがる。水の壁は同心円に重なる大波となり湖畔へと押し寄せた。断続的な衝撃波に、森は薙ぎ倒されんばかりに湖の外周へと幹と枝を撓めら

れる。注連縄に囲まれた結界の中には、波も小石ひとつ飛び込んで
は来なかったが、波の退いた湖の周囲は天災被害にでもあったよう
だ。

「なにこれ。龍巻や洪水は反則じゃなかったの」

奈津子が呆然として、打ち上げられて跳ね回る大量の魚を見回し
た。太田が息を切らしながら奈津子を抱き寄せる。

「今のはソニックブームだ。那薙さんたちが音速の壁をおれたちの
真横で突き抜けたんだよ。くそ、なんて無茶をするんだろう。近く
に家があつたら窓ガラスとか割れてるよきつと……ああ。おれの
車あ！」

太田は慌てて注連縄を飛び超えようとして、女二人に引き戻され
た。あたりを見回すと八郎の姿も叢雲の影もなく、蟬のような肌を
した生気のない那薙の体が、地面に横たわっているだけだった。そ
の頭元に草薙が立ち、詠唱を行っている。

「かみむすびのかみ、たかみむすびのかみ、たまつめむすび、いく
むすび……おおみやめ……ことしろぬしのかみ」

詠唱を一息で終えるたびに榊から榊へと移動する。榊は見えない
大きな手に押されたかのように撓んで那薙の体に覆いかぶさり、緑
の葉がみると繁つて繭のように那薙の体を包みこんだ。

草薙はそうして八本の榊と那薙の体を一周すると、また始めから
同じことを繰り返した。榊の繭は濃い緑を増し、地面にめり込む。

草薙は裳の帯をほどき、白と群青の絹を榊の繭に被せた。裳は鉄の
質感を持って、地面を覆った。

そして草薙は詠唱を続ける。

蒼穹の下、叢雲と八郎は瞬時に御佐和湖の上空二万メートルに達
した。はるか眼下に、雲に隠れた奥羽山脈が北へと延びている。

紺碧と翡翠の鱗をきらめかせる龍神の八郎。眩しいほどに陽光を
跳ね返す玉鋼色の叢雲。ふた柱の神は同時に北を目指し、音速を越
えて宗谷岬へ疾駆する。減速位置を間違えると樺太まで飛び越して

しまいそうなので、北海道上空で全速をだすわけにはいかなかった。宗谷岬の上空で待機していた最北神より玄武の印を受け、東へ翻って小笠原諸島へと飛ぶ。太平洋の上空を駆りながら、どちらも霊体を稲妻に変換し、一気に光の速度へと近づいてゆく。

南鳥島の上空で最東神より青龍の印を受けたのち、南の果て波照間島へと全速を出した。

地上から見上げて、光に迫る速度で移動する二条の電光を目視することは不可能であつたし、電磁波の長い尾を引きながら蒼穹を駆ける放電現象、または発光物体が衛星軌道から観測できたとしても、その原因や正体を突き止めることは人知を超えていた。

ゼリーのように震える碧い海原が、極上の宝石にも似て陽光を反射する。水平線が弧を描く南海の美しさに比肩するものはない。

属性を全開させ、神威を限界まで発揮して蒼穹と群青の狭間を疾駆するのは、素晴らしく気持ちよかった。

波照間島では最南神より朱雀の印を受け取り、眼と鼻の先にある西端の与那国島へと飛び移る。超音速を出したら飛び越してしまうこの距離が一番、時間のかかる移動だったかもしれない。ほぼ同じ瞬間に最西神から白虎の印を受けて四神の証をそろえた叢雲と八郎は、一気に本州へと目指した。

数瞬ばかり叢雲に先んじていた八郎が突然、鹿児島沖で放電網を広げて叢雲をからめ捕った。互いの雷光が交じり合い電離し、熔かし合う攻防。それは、ガラスの球体の中で放電されたネオンが暴走する、巨大なプラズマボールを思わせる。

蒼い電光と白銀の稲妻が、絡み合い、互いに包みこもうと葛藤するさまは、夜であれば素晴らしく美しい電離の嵐であつただろう。だが観客は、大気に満ちる電気臭と、連続して轟く雷鳴に脅える海鳥か、あるいは上空の異変を感じておののき、海面下を避難するイルカの群れだけであつた。

同じ属性を共有する神々の闘争は、ぶつけ合う力が中和し合い相殺し合うばかりで、雷の応酬は結局は霊力の交換に終わってしまう。

片方が圧倒的に強い神であれば、弱いほうの霊力を吸収してしまうことができるが、叢雲と八郎では力が伯仲していて、放電の拳句にどちらもそのうち電池切れということになってしまう。

叢雲は霊体の一部を微細な鉄の分子に戻し、鎖のように伸ばした。湖水の龍神、辰子が己の霊体を水や氷に変化させたように、剣神の叢雲は霊体を鉱物に変換できる。御佐和主の霊力を逆手にとって、那雑の肉体を鋼に、左腕を剣に変えたように。

雷の網では捕えられない八郎の靈魂の核を、微細な鉄鎖の網で捉えたと確信した瞬間、叢雲は八郎が持ち合わせない剣神の属性のひとつ、重力を一気に加えた。

絡み合ったふた柱の雷神が織り成す、プラズマボールの高度が下がり始める。

霊核を鎖でからめ取られ、海に引きずり下ろされる八郎の叫びを、叢雲は聞いたような気がした。

その直後に叢雲の超微細な鉄鎖は断ち切られ、霊体を成す素粒子は空中に霧散する。肉体の痛みという感覚はすでになかったが、御魂の一部が引きちぎられた打撃は大きく、霊力がそこから漏れてゆくのが感じられた。思わぬ反撃に霊力の低下を自覚させられる。

叢雲が怯んだ隙について、八郎は再び雷電の網を広げて叢雲を包み込む。そしてそのまま水柱を上げて海へと飛び込んだ。

海中での闘いになると、霊体の分子のほとんどが水である八郎に利がある。霊力を吸い取られそうになった叢雲は水中での霊体化を余儀なくされ、水よりも比重の重い鉱物属性のために即座に浮上することが難しくなった。

八郎はその隙に海面から飛びだし、再び龍形となって空へと舞い上がった。高度を達成して即、稲妻に変わって一気に北東へと本州上空を暴進する。

列島の人々は遠雷の音を聞いて晴れた空を見上げ、気象オペレーターはその日、日本の領海周辺に不規則に現れた電磁波の異様な記録に首を傾げた。

叢雲は沈んでゆきながらも霊力をかき集め意識を集中した。亜熱帯の海に棲む小さな龍蛇を召喚し、磁界の門を開くことを命じる。霊指を龍蛇の口に開かれた磁界に伸ばし、霊体の一部を流し込んだ。意思の核まで縮んでしまい、蛍のようにほの白く漂う叢雲の霊体は、熱い湯に落とされた脂のように急速に海に溶けてゆく。

沙耶子は奈津子と太田と、燃え尽きた薪の上で踊る迦具土の火に当たりながら、身を寄せ合った。

「どうやったら二分が五分に伸びるのかしら。神さまの考えることってわかんない」

沙耶子が投げやりに呟く。呆然と草薙の作業を眺めていた太田が膝を叩いた。

「神さまじゃないだろ、これ、相対性理論だよ。だけどいくら極超音速で飛んでも、日本の北の端から南の端まで行つて戻るのに二時間にかかる。五分なんて……那薙さんは光速で日本を一周するつもりなのか」

「いかづちは光」

三人の後ろから突然、草薙に話しかけられて太田が飛びあがる。いつの間にか詠唱を終えた草薙が、うつとりと空を見上げていた。

「叢雲も八郎どのも、どちらも雷神の属性を持ち合わせているから、もてる霊力を稲妻に変換して神威を限界まで発揮すれば、光速に到達することは不可能ではない。もっとも、大気の摩擦や、気温、五回の減速加速の影響を計算している暇がなかったから、五分というのはかなり大雑把な賭けなんだけどね」

草薙は太田の顔を覗き込んだ。

「太田さん、人間が昨日今日見つけた森羅万象の摂理など、われわれはこの世に具現したときから属性の一部に備えているんだよ。あとは、それに名前をつけるのみ」

太田ははつとして草薙を見上げ、何か言おうとしたが、沙耶子がそれを遮った。

「ずっと気になっているんですけど、私が剣のあるじって、どういうことですか」

「言葉通りの意味だよ。本日をもってさやこさんが叢雲のあるじとなったわけだ。おめでとう」

鈴をしゃらしゃらと鳴らして草薙が楽しそうに宣言した。沙耶子は茶化されているようでむっとした。

「だから、どこでどうしてそういうことになったのか訊いているんです」

「あなたが叢雲をフルネームで呼んだらう。そしてそれにかれが応えた。契約成立。叢雲のすべてはさやこさんのものだ。かれをよろしく願います」

草薙の口から横文字が出てくるのに慣れてきた沙耶子だが、さすがに頭を抱えた。

「さやこさんが嫌なら、那薙にそう言えればいい。あるじの望みは絶対だから、あなたが契約を反故にするとええば叢雲は逆らうことはできない」

沙耶子は結界の中央に目をやった。那薙の抜け殻があるはずのそこには、濃い緑の霧が繭型の異質な空間を醸しだしているだけだ。

「私が、あるじは嫌だと言ったら、どうなるんですか」

草薙は沈痛な面持ちになった。半分開いた桜扇で口もとを隠す。

「かれはあなたの元を去るだけだ。かなり落ち込むだろうね。ようやく得た二度目の主人にまで捨てられたら、また海の底に沈んでしまいかもしれない」

その芝居臭い言い草と態度に白々しさを感じたが、沙耶子は無視した。

「前のあるじは、叢雲を捨てたの？」

「戦いを諦めることが、剣を捨てるということになるのなら、そうかもしれない」

「いつの時代のこと？」

「ヤマトの国がまだ、その前身のヒムカノ国と呼ばれていた時代の

ことだから、かれこれ千八百年から二千年ほど前のことかと」

「弥生時代だよ。卑弥呼とかの時代じゃないのか」

太田が啞然として呟いた。草薙はこっくりとうなずく。沙耶子は草薙をじつと見つめた。

「詳しく教えてください」

「私知っていることは、叢雲から分けられた魂の、記憶の断片でしかない。その時代を生きなかった私に、語る資格があるのだろうか。正史には叢雲の神名も、かれのあるじの名も残ってはいない。

叢雲は誰にも昔の話をしたがらないのだけど、だからいつまでも主を失った痛みを忘れられないのではないかな」

しみじみと語る草薙に、太田が同意した。

「正史なんて、勝った方に都合のいいように書かれるわけだし。それで、卑弥呼って実在したんですか」

「昔はヒミコだけでなく、叢雲のかつてのあるじのように、霊力や交感力の強い人間が多かったのにねえ。戦国時代あたりからどんどん減っていった、私たちの声を聞くことのできる人間は、今じゃ絶滅危惧の希少種になってしまった。寂しいことだ」

草薙はどこか遠くを見る眼で溜め息をつく。そして鋼色の瞳にどこか悲痛な色をはらませ、まっすぐに沙耶子を見つめた。

「叢雲は主を失ってから二千年近く、誰にも祖おやに授けられた名を呼ばれなかったんだ」

名前があるのに呼ばれないというのは、どういうものなのだろう。沙耶子には想像もつかないことだ。まして誰の記憶にも残らないほどの太古の昔から。

「草薙さんは？ 名前を知っているのに、呼ばなかったんですか」

「許されてなかったからね」

「誰に？」

「天つ大御神に」
おおみかみ

「どうして？」

鈴がしゃんと鳴る。草薙は胸を押さえて唇を噛んだ。

「それも、叢雲から話すほうがいいと思う。かれの抱えている怒りや哀しみを、私が代弁してはかれの癒しにはならないから」

沙耶子はこの日の行動を共にした、那薙の様々な表情を思い浮かべた。たった一日のこととは思えないほど、かれの多様な側面を見たような気がした。特に、那薙の控えめな笑顔と、憂鬱の影を落とす横顔。

あれは、二千年の孤独。双神を得てもなお、癒すことのできない太古の痛み。

沙耶子には想像もつかない。

「剣のあるじになるってどうしたらいいの」

「さあ。叢雲が鋼の剣だった昔と違って、今は矢幡那薙という一人の人間だ。時代も随分と変わった。私にはなん……」

草薙が言い終わらないうちに激しい衝撃が森と湖を波打たせた。

沙耶子と太田、奈津子が地面に伏せて揺れる大地にしがみつく。

三人が顔を上げると、八郎が浜辺に哄笑しながら立っていた。沙耶子が太田の時計を覗き込むとすでに五分は過ぎ去っている。太田があわててストップウォッチを止めた。

「おれの勝ちだな。叢雲は海に沈めてきたよ」

沙耶子が絶望して那薙の方へふりむいた。ヒツと息を呑む。柵に囲まれた重力場は空っぽだった。

「八郎さんの負けですよ。ぼくが先に着いていましたから」

背後から聞こえた那薙の声に、八郎が独楽のような勢いで回転した。腕を組んで波打ち際に立つ那薙を見て、後ずさりする。八郎の足元がふらついた。

沙耶子は喜びの叫びを上げた。

「那薙さんっ」

「太田さん、八郎さんのタイムを言ってください」

腕時計を覗き込んだ太田は、震える声で答えた。

「六分五十七秒です」

那薙は自分の腕時計を覗き込む。

「ぼくのは四分三十三秒。叢雲の勝ちですね」

「そんな馬鹿な、おれより速く飛べたはずがない。九州の沖で海に沈めたはずだ」

やつれて疲労の濃い八郎に対して、那薙の頬に余裕の微笑が浮かぶ。右手を上げて銀色にきらめく薄い鉄片をつまみ出した。那薙の指先からはじき出された鋼の鱗は、白銀色の長大なものに変じて轟音とともに空へ昇ってゆく。それは空のずっと上の方で白い雲となつて青い空に広がり、やがて溶け去った。

「あなたが落としたのは、空蟬ですよ」

八郎の顔が驚愕に歪む。

「嘘だ、身代わりにあんな靈力があるはずが……そうだ、お前が叢雲だという証拠に、四神の証を見せろ」

那薙はにやりと笑って、頭上高く上げた左の手からきらきらしたものを砂浜に落とした。青龍、玄武、朱雀、白虎の印の刻まれた四枚の鱗。

「約束は約束です。八郎さんは競争に負けただけでなく、制限時間も越えてしまいました。二重の敗北です」

「おれは確かに五分以内に飛んできた」

愕然とする八郎の叫びを、那薙が嘲笑う。

「高速で移動すると、時間の振幅が遅くなります。五分だと思って移動していても、地上での時間はもっと早く流れているのですよ。まさか、知らなかったわけじゃないでしょうね？ 浦島八郎さん」

那薙は皮肉っぽい口調で八郎をやり込めると、手に持っていた鉾先鈴の鈴をひとつ引きちぎった。目にも留まらぬ速さで手首を翻し、ちぎった鈴を八郎に投げつける。

那薙の頭上で鳴らされる鈴の音が反響して森を揺るがした。結界の中にいても、恐ろしい不協和音の振動に視界が歪む。耳の奥を掻き毟られる痛みに、生理的な涙が沙耶子たちの目からこぼれた。物理的な破壊力を持つ音響の振幅は、体中の細胞を裏返し、分子を乖離させて別物に変えてしまう。神経を引きはがし、すべての組織を

破壊しかねない音の共振が消え去るまで、誰もまぶたを開けることができなかった。

結界の中にいなければ、鼻血どころでなく大変なことになっていただろう。

唐突に静けさが戻り、涙を滲ませながら沙耶子は目を開けた。水辺に屈みこんでいた那薙が立ち上がり、何か拾って結界まで歩いてくる。和やかに口元をゆるませて、三人を見おろした。

「那薙さんっ」

三人が声を揃えて叫ぶ。

「もう、その結界から出ても大丈夫です」

那薙が右手に鉄製の龍の置物を乗せて微笑んだ。

「起きて大丈夫なんですか。さっきまで仮死状態だったのに……蘇生措置もしなくてよく……草薙さんは？」

那薙の瞳は、玉鋼色の輝きが溢れている。神威が横溢してどうしようもないようだ。にっこり微笑み、流麗な仕草で鉾先鈴を持ち上げて頬に当てる。那薙にしてはどこか女性的な仕草に、沙耶子は震える声で呼びかけた。

「草薙さん……？」

「やはりさやかさんは騙せないね」

くつくつと那薙が笑った。手の中の鉾先鈴を弄び、しゃらんと鳴らす。身を乗り出して沙耶子の耳に囁きかけた。

「誰にも内緒だよ」

太田が眼を剥いて那薙を見上げた。

「姑息じゃありませんか、神さまの所業にしては」

八郎に同情したわけでもないのだろうが、勇気を出して異論を唱えてみる。太田の声が少し震えているのは仕方がないと沙耶子は思った。八郎は対戦相手の替え玉がゴールで待っているという、始めから勝てるはずのない罠にはめられたのだ。

「ふた柱の龍神に対して叢雲だけでは、二対一でフェアとは言えないでしょう？ ハンデを失くしただけです。夫婦神めおとがみのかれらに対し

て、叢雲の双神すうじんがみである私が手を貸すのは、反則でもなんでもありません」

さりげなく問題をすり替えつつ、那薙の口調を真似て、草薙は鈴をしゃらしゃらと鳴らした。どうしようもない軽さが似ても似つかないのだが。

沙耶子のはつとして空を見上げて叫んだ。

「叢雲は？ 叢雲はどうしたんですか。叢雲っ」

「そのまま呼び続けてください」

草薙は微笑みを絶やさず沙耶子にそう告げた。

言われなくても沙耶子は西の空に向って叢雲の名を呼び続け、戻るように祈った。

草薙は、鉾先鈴を持った腕を伸ばした。沙耶子たちが目を凝らしていると、鉾先鈴の掲げられている空間に、じわじわと人影が姿を凝らし始める。

透き通ったガス状の影、あるいはホログラムを観ているようだった。十五、六の少年が宙に浮きつつ、片方の膝を抱えている。額の中心で分けられた長い黒髪が、耳の後ろで束ねられ、肩から背中へと靡き、毛先は宙空へと溶けていた。きつい眦まなじりに、高い頬骨、まっすぐな細い眉と意志の固そうな一文字の薄い唇。和服に関する沙耶子の知識では、白い作務衣のようなものを着て赤い帯を締め、淡い紫の袖括りの紐でゆったりした袖を手首の上で絞っている。胸元には翡翠の珠、赤瑪瑙の管玉くがたま、青瑪瑙の勾玉まがたまを繋いだ三連の首飾りをかけていた。耳たぶには鉤型の琅干が揺れている。

手に触れそうなほど鮮明な映像が、口を動かして何か話したが、沙耶子たちには聞き取れない。薄く開かれたまぶたの下、灰色の瞳はひどくうつろだった。

「ええ、二度も人界で物質化して、ふた柱の神を封じるのに全力を出し切ったのだからね。疲れるのは当然だよ。この死にかけた体に戻っても、あなたの霊力で那薙の生体を維持することは難しいだろう。私が那薙の心臓と手足を動かして病院に連れて行くから、叢雲

は鈴の鋼に憑いて大地の力が満ちてくるのを待ちなさい」

少年はうなずいた。りいんと鈴が小さく鳴り、少年の姿は鉾先に吸い込まれた。

「今のが、叢雲？」

「叢雲が霊体を人型に顕するとき、好んでとる姿です。叢雲を鍛えた鍛剣の民、オロチ族の若長。そして、かれに名を授けた最初のあるじ、八津彦の姿を映しているでしょう」

那薙の顔で哀しげに目を細め、鉾先鈴を見つめた。ふっと息を吐いてから下を向いた草薙は、鈴がひとつ欠けた鉾先鈴を沙耶子に手渡した。

「さやこさんがこれを持って祈ってくれと叢雲の回復が早い。お願いします」

第十四章 祟り神の陽だまり

草薙は那薙の体を動かし、てきばきと片づけを始めた。

「クラチとミズチはどうしたのかな」

その声に応じるように、それぞれのスーッケースから、碧色の頭と薄茶色の頭がのぞく。那薙の顔がほころんだ。

「ミズチにはそのスーッケースは窮屈そうだね。クラチと力カチとフウチの鱗もちゃんととってあるけども、こう大きくなってしまふのでは、新しい水槽が必要になりそうだよ」

そこで、草薙の那薙は首を傾け思案顔になった。

「那薙が病院に行くとなると、君たちは缶詰になってしまふね」

草薙は那薙のバックパックをひっくり返して探し物を始める。

「ああ、あつた。用意のいいことだ」

草薙がひとり言を言いながら拾い上げたのは、ひとくくりに縛られた枯れ草だか、藁の束だった。

「なんですか、それ」

太田が覗き込む。

「穢れを抜う茅萱の束だよ。これで輪をつくれば、私の磁界への門が開ける。クラチとミズチはひとまず私の磁界に預かっておこう」

草薙はありあわせの紐で手早く茅の輪をつくり、そこへ蛇たちにくぐるように促した。

地面に垂直に置かれた輪のこちら側に蛇の尾がうねり、二センチ先の反対側からは何も出てこない。太田は膝をつき、興味深そうに茅の輪を覗き込んだが、蛇たちの消えた輪の中には白い靄が流れるのが見えるばかりだ。

不思議な光景に、沙耶子たちは無言で顔を見合わせた。

そのあとは四人とも大急ぎで結果を片付ける。荷物を手分けして担いでから、草薙は朗らかに言った。

「さあ、仕事も片付いたことだし、さっさと山を降りようか」

太田の車は奇跡的に無事だった。山を降りる間、助手席でふたつの龍の置物を掌に並べて眺める草薙を、太田が横目で盗み見る。

「八郎さんたちは、どうなるんですか」

「次の神議で、反省の色が見られれば田沢湖へ帰還できるだろう」

「ずいぶんとあっさりしてるんですね」

沙耶子はびつくりして声を上げた。那薙が命をかけたにしてはかなり軽いことだ。

草薙は首を曲げて、後部座席の沙耶子の少し怒ったような顔を見つめた。

「叢雲の足元に降ったことで、かれらは面子を失った。人間の君たちにはわからないだろうけど、これで十分な制裁になっているんだよ。それに土地神の長い不在は、いろいろな不都合を招くからね」前を向きながら、草薙は嘆息とともに呟く。

「それでなくても、私たちの数は減り続けていて、手が足りないんだ」

「減るって、神様って不老不死じゃないの？」

奈津子が口を挟む。

「もちろん。でも、祀られなくなった神々は、むしろ地上の領域を去ることを好む。特にここ二百年は、神々でないものを崇拜する人間のほうが増え続けていてね。人の無意識の及ぼす万象次元界の律の歪みは、いまや先の大戦以上に深刻かもしれないんだけど、修正が追いつかない」

饒舌な草薙が急に重く口を閉ざしてしまったので、沙耶子たちもそこで黙り込んでしまった。

太田は那薙と沙耶子を病院で降ろし、奈津子を実家へ連れて帰った。

「あのふたり、和解できるかな」

車窓から手を振る奈津子に手を振り返し、沙耶子はぼつりと呟いた。草薙が聞きつけて問いかける。

「さやかさんは、かれらによりを戻して欲しいのかい」

「私がどうこう言える問題じゃないけど。あまり深い傷を残してほしくないな、って」

「それが沙耶子さんの願い？」

草薙の快活さで、那薙が訊ねる。沙耶子はうなずいた。

「うん」

「それくらいなら叶えられる。復縁するかどうかは、かれらが決めることだけだね。修羅場にはならないだろう」

自信たっぷりな請け合う草薙に、沙耶子は口元をほころばせた。

「草薙さんって、無駄に明るいのかと思ってたけど。違うのね。あ、ごめんなさい」

神さまに失礼なことを言ってしまったかと沙耶子は口を押さえたが、草薙は気にした風もなく応じた。

「叢雲が重過ぎるから、双神の私としては軽くならざるを得ないだろう」

「そうね」

受付を済ませて、待合室で診察を待つ間、草薙があらたまって沙耶子に向き合った。那薙の顔で、神妙な表情になる。

「叢雲が仕事を成し遂げられたのはさやこさんのお陰だ。礼を言うよ。これで、叢雲の復権に異論を挟む神はいなくなる」

草薙は安堵の笑みを浮かべた。沙耶子は草薙の言葉の意味をはかりかねて首を傾げる。

「叢雲のように領域を持たない客神まわりのは、立場が難しい。神体も失ってしまった以上、天つ系にはかれを神と認めないものも少なくない。その上、叢雲の叛骨は折り紙つきだね。板ばさみの私は気苦労が耐えない」

につこりと偽りのない感謝の笑顔を向けられる。神々の事情に疎い沙耶子は、こっくりとうなずくしかなかった。

那薙が診察室に入っていくのを見送って二分後。待合席で荷物に囲まれ、ぼんやりと休んでいた沙耶子が胸に抱えていた鈴がリンと鳴った。看護師が診察室から駆け出して、ストレッチャーが運び込

まれる。沙耶子はあたふたと診察室を覗き込んだ。

「君は？」

寝台に横たわる那薙を診ていた白衣の医師が、沙耶子の侵入を見咎めた。

「その人の連れです。どうしたんですか」

「急に昏倒したんだ。脈拍はおそろしく遅いし、体温も低い。よくここまで自力で来れたものだ」

ここに来るまでは元気だったのだが、そのことは黙っていた。草薙は予告もなく立ち去ったのだろう。那薙は酸素マスクをつけられ、心電図が取り付けられる。

「意識が戻らなければ入院の必要があるが、君は身内なのかね」

「えと、友人です」

さすがに主とは言えない。

「掌の火傷の原因と、肩の噛み傷の原因を知っているかな」

「えっと、この人、自分で説明しませんでした？」

沙耶子は焦った。本当のことを言っても信じてもらえないだろう。「その前に倒れてしまったんだよ」

その後には繰り返された医師の質問に、沙耶子はしどろもどろで答えた。医師が納得してくれたかどうかは、はなはだ怪しい。

処置が済み、那薙は緊急処置室の一隅に移動させられる。ゆっくりと波打つ心電図を見ながら、心臓が動いているということは、叢雲是那薙の中へ戻ったのだらうと推測した。

草薙はどうしたのだらうか。鈴を小さく鳴らしてみたが、何も起こらない。うっかり鉾先鈴を落として騒々しい音を立てないように、タオルに巻いて一緒に持ってきたデイパックにしまった。

眠っている那薙の穏やかな顔を眺めたあと、包帯でぐるぐる巻きにされた左手をそつと持ち上げてみた。肩の手当てのために、着てきた服は脱がされ、病院の療衣を着けている。袖を上げて、広範囲に引き攣れ変色した皮膚を見つめた。今さら火傷の痕が増えたところで、どうでもいいと思っていたのだらうかと考える。さすがに真

っ黒に壊死した掌の皮膚は、移植が必要なのではないだろうか。

「どうしてそこまで……。叢雲はともかく、那薙さんは神さまじゃないでしょう。剣でもないし。怪我したら痛いし、魂が離れたら死ぬし」

手当てをされた肩もちよつと衿を開いて見てみたが、古い火傷の痕は鎖骨の下まで広がっていた。『迦具土の刻印』と、那薙の言葉を思い出す。どういう意味なのだろうか。これを『穢れ』と呼ぶには、御佐和主の磁界で焰の輝きを放っていた左の半身はあまりにも美しかった。

それにしても、髪が背中まで伸びている。豊かな漆黒の髪は羨ましいほど艶々としていた。一般的に髪が伸びる速さを計算してみた沙耶子は、那薙は今日だけで一年分の寿命を先払いしたことになるのだろうかと悲しくなった。

衿と袖を直して、耳元で囁いてみた。

「那薙さん、叢雲の那薙さん。帰ってきたら私に話したいことって、なに？」

沙耶子がゆっくりと息を吸って、吐くほどの間のあと、那薙の目蓋がうつすらと開いた。灰色の眼が横へ動いて沙耶子に焦点を合わせた。那薙は酸素マスクの下でそつと笑い、点滴針のついた右手を上げてマスクを取ろうとした。沙耶子は止めようとしたが、那薙は首をふった。

沙耶子はマスクを外すのを手伝う。那薙の掠れた声が漏れた。

「帰ってきました。さやこさんのお陰です」

「何もしてないけど」

「あなたが願ったでしょう。だから、帰ってこれたのです」

沙耶子はじつと那薙を見つめたあと、視線を外してかけ布団の端をいじった。

「あの、あるじがどうかなんだけど」

沙耶子はなぜか耳が温かくなるのを止められない。次の言葉が紡げなかった。

「すぐに答えを出す必要はありません。ぼくも、人々が利害のために殺し合うのが当たり前だった時代の剣ではありませんから。ただ、あなたがぼくの神名を知っていて、それを悪用しないということが、嬉しい」

沙耶子はどきまぎして布団の端を引っ張っては、まっすぐに伸ばした。

「帰ったら話したかったことって、それ？」

「いえ」那薙は眼を細めてほんのりと笑った。

「明日は、クリスマスイブでしたね」

沙耶子はぽかんと口を開けてしまっていたかもしれない。那薙は少し照れたようにうつむいて続けた。

「沙耶子さんに不都合がなければ、いつしよに食事でもどうかと」

沙耶子は眼をきよるきよるさせて、不整呼吸に肩を上下させる。

「不都合はないけど……退院が先じゃないかな」

那薙は愉快そうに歯を見せて笑った。

いくらもたたずに、意識が戻ったことと、命にかかわる怪我や症状がないことから、一般病室に移された。

携帯の使用が許されたので、沙耶子はメールを確認した。奈津子から無事故で帰宅したとメッセージが入っていた。

「彼らが無事で良かった」

「湖のこと、覚えてないんですか」

「海に落とされたあたりからはつきりとは覚えていません。わだつみの底から常世へ続く道が伸びていて、そちらへ行こうとしたら誰かがぼくを呼ぶ声が聞こえました。その声のするほうへ行きたくなつて……気がついたら、ここで、沙耶子さんに逢えました」

その柔らかな微笑。あ、初めて逢ったときの……と沙耶子はどきつとした。湖で、沙耶子が息を吹き返したのを見て浮かべた微笑だった。純粋な、生きていることへの喜びの眼差し。沙耶子の心拍数が加速を始めた。

突然、沙耶子は那薙の大きすぎない奥二重の切れ長の眼とか、地

味だけでも無難な面差しが大変好ましいものに思えてきた。頬から顎の線は、一日の激務と一時間以内の二度の臨死体験で少しこけてしまったが、最初に逢ったときのほどよく優しげなラインは内裏人形のようなだった。やはり、控えめながら草薙の面影があると思う。

うん、ポイント高い。でも……。

「私なんかでいいんですか」

「沙耶子さん次第です」

「でも、勝手にあるじを押し付けられた那薙さんの気持ちはどうなんでしょう。私、奈津子や辰子さんみたいに美人じゃないし」

「人は見た目にこだわりますよね。かれの許婚も大変な美人でした
が」

「『かれ』って、八津彦さん？」

沙耶子の口からでた名前に那薙は眼を瞠った。

「草薙さんがちらつと話してくれました。あの、叢雲さんが湖に戻ったとき、十代の少年の姿だったんです。こう、目元のきつい、髪の毛の長い」

ああ、見たんですか、と呟いて那薙はうなずいた。

「祝言の夜に、八津彦は酒に毒を盛られたのですよ。最愛の花嫁に、それから苦いもので呑み込んだように、那薙は右手で口を覆った。
「話すの、つらいですか？」

沙耶子は遠慮がちに訊いた。

「ええ、まだ。去年、覚醒したときはそれほどでもなかったのに、この頃は細かいところまで思い出すもので。でも、話したほうがいいでしょう。ただ、今夜は体がつらいので勘弁してください」
「いつでも、那薙さんの体調のいいときに聞かせてくれたら……。
だけど、胸が痛くなるような思い出は、溜め込まないで吐き出すほうがいいと思う。重たい物って、ひとりで運ぶより誰かと持ったほうが楽でしょ。苦しい思い出も、誰かと分け合ったらきつと楽になる。私でよかったです……」

沙耶子の声には共感がこもっていた。那薙は素直にうなずいた。

左手を裏表に返ししながら巻きつけられた包帯を眺めたあと、那薙は少し前の話題に戻る。

「またデリカシーがないとか言われそうですけどね」

じっと沙耶子を見つめる那薙の右手が上がり、灰色の瞳を指さした。

「この眼、普段から顔や服装以上のものが見えるんですよ。さやさんは薄紅色を帯びた真珠の輝きを持つオーラを放っています。滲刺として、惹きつけられる。とても魅力的だと、ひとに言われませんか」

沙耶子は耳たぶが熱くなった。

「えっと、どうなんでしょう。あまり言われません」

沙耶子は別のことを思いつき、その思いつきにどきっとして慌てた。

「服の下も見えるんですか」

那薙は、沙耶子の意表を突いた質問にくくつと笑い出した。

「試したことはありませんが……やってみましょうか」

「駄目です」

沙耶子は即座に却下した。那薙はまだ笑いながら沙耶子に手を伸ばす。

「霊視で視えるのは命の波動、魂の色です。意思の流れと、その強さです。さやさんの放つ霊気の波動は、虹のように美しい。奈津子さんや太田さんに注がれる優しさや共感が、色鮮やかな音楽のよう

うに心を癒していく」

そういう恥ずかしいことを、草薙の人間版みたいな表情で面と向って言わないで欲しいと、沙耶子の頬は一気に紅く染まる。慌てて立ち上がったために、椅子がひっくり返った。病室にあるまじき騒々しい物音に、沙耶子はさらに狼狽した。

「入院が遅かったらから、夕食が出ないそうですっ。なんか買ってきますね」

沙耶子はあたふたと病室から抜け出した。街へ買い出しに行き、

そこで那薙に何が食べたいのか訊き忘れたことに気がついた。まだ頬が火照っているような気がする。

弁当やドーナツ、サンドイッチにミネラルウォーターを買って病院に戻る途中、まだ開いている書店を見つけた。そこで日本の古代史に関する本を何冊か購入した。

病室でともに食事をしながら、知り合ってから初めて、互いのことについて話をした。仕事や家族、普段の生活から趣味など、たわいのないことだったが話は弾み、時間はあっという間に過ぎた。

翌朝、近くのビジネスホテルに泊まった沙耶子は、面会時間の始まりとともに病室へ急いだ。那薙のベッドはカーテンで仕切られ、話し声が漏れていた。誰かと言い争っているようだが、くぐもっていて良く聞こえない。そつと近づいてみる。

「とにかく刀を元通りにしてください。そんなに鈴がついてたら持ち歩けないでしょう」

「新しいのを造ったらいいじゃないか」

「ひと振りがいくらすると思ってるんですか」

「これがあつたら祭具や結界がなくても出てくれるのに」

「どこでもかしこでも君ににきによき出てこられたらたまりません」

「新しいあるじができたからって、わたしを筍かキノコのように言わなくても」

沙耶子がそつとカーテンの隙間から覗いてみると、ベッドの横の椅子に腰かけた草薙が、頬を膨らませ恨みがましい目つきで那薙を睨んでいる。那薙とふたりきりと思っているせいか、ずいぶんと子供じみた態度だ。

今日の草薙は昨日の那薙と同じ、ざっくりした水色のパーカーと色褪せたジーンズといういでたちだ。長い鋼色の髪は後ろで一本の三つ編みにして床に垂らしている。現代風の服装をしていても、金属的な艶の肌と、壮絶な美貌は人間離れしていた。

草薙の感情的な声が聞こえた。

「弁償すればいいのか」

「当然です。神議の総意で依頼された仕事なんですから。経費で出るでしょう」

勢いよく立ち上がった草薙の頬が桜色に染まる。

「わかったよ。明日から七日の間、家の窓を開けときなさい。全国の社に通達して百円ずつ上納させるから、その金で何口なんこうでも新しい刀を鍛えさせたらいいんだ。だけどね叢雲。あるじなんて言っても、所詮は人間だ。勝手な願い事ばかり並べて、こっちが靈魂を削って叶えてやっても、喉元過ぎれば忘れてしまう。拳句に私たちを置いてさつさと死んでしまつて二度と還つてこない。あなたがいくら八津彦を慕つても、彼はもうどこにもいないんだ」

言い捨てるなり草薙は煙のように消え去つた。

沙耶子はカーテンを揺らし、声をかけた。那薙の「どうぞ」という返事に、カーテンの中に入る。

「草薙さん、お見舞いに来てたの」

「いやがらせに来てました」

沙耶子は椅子の上に残された鉾先鈴を拾い上げた。鈴の数が元通り八個になっており、心なしかまた鉾が短くなつたようだ。沙耶子の頬がゆるくほころんだ。

「この形で那薙さんに持つていて欲しいのね」

「いいかげん親離れできないものでしょうか」

「草薙さんは八百年も叢雲さんにほつたらかしにされていたんですよ」

沙耶子に畳み返されて那薙は口を封じられる。沙耶子は続けた。

「仲がいいのか悪いのか、わからないけど。でも、家族つてそんなもんだわ」

那薙は決まりわるそうにカーテンの隙間から見える窓の外へ視線を移した。

「草薙と叢雲はずっと対立していたんです。草薙は皇家の守護神剣

で、叢雲は隙さえあれば皇家に崇ろうとしていましたから」

沙耶子は鈴の間にハンカチを挟み込む手を休めて、にっこりと笑った。

「そうなるかわかっていて、草薙さんに魂を分けたんでしょう。神さまだつて、ひとりぼっちが嫌なんだつて、わかつたわ。誰かと繋がっていたい、伝わりあいたい。辰子さんも、八郎さんもそうだったのよね。あるじに置いていかれるって草薙さんが言ったとき、なんか私の胸も苦しくなった」

「草薙はああ言っていましたけど、本当は人間が好きなんです。ただ、彼はあまりに多くのあるじを見送ってきた。ぼくはかれの痛みに耳を傾けてやるべきでしたね」

那薙は膝の上に置かれた鉾先鈴をとて優しい目つきで眺めた。鉾の先を指先でそつと撫でて、小さな声をかける。

「ぼくの部屋に神棚を祀つて、そこに鈴を納めます。それでいいでしょう」

ハンカチを詰められたはずの鈴が、チリリと幽かな音をたてた。

病院の朝食だけでは足りないだろうと思って沙耶子を買ってきたコンビ二のおにぎりやサンドイッチ、菓子パンを並べると那薙は嬉しそうな顔を見せる。どれだけ食べても太らない那薙の体質を、沙耶子は羨ましく思った。

「昨日、ホテルで古代史や日本神話の本を読んだの。叢雲を見つけたわ」

那薙は気恥ずかしそうに窓の外を見た。

「ぼくはたいしたことはしてないです。八津彦たちは乙女を生贄に求めて食い殺す、退治されるべき怪物にされてしまいましたね」

草薙の座っていた椅子に腰を下ろし、沙耶子は那薙の眼を見つめた。

「だから、那薙さんが八津彦さんの真実を覚えていることが、大事なんじゃないかしら。ほかの誰が信じなくても私は信じるから、叢雲が大切にしていた人々の思い出を、私に話してください」

那薙はただゆったりと微笑んだ。

沙耶子は朝食が運ばれてくるのを受け取り、那薙のベッドテーブルに置いた。

「ところで、日本中の神社って、全部でいくつあるのかな」

「正確な数はわかりません。コンビニどころじゃないと思います。法人登録されているだけで八万を超えるはずですが」

「そこから百円ずつ……。それはやっぱり草薙さんの嫌がらせかな」
八万個の百円玉に埋もれる那薙を想像し、沙耶子がぷつと吹き出した。

「ごめんなさい。でも、入院費も新しい刀代も払えてお釣りが来るんじゃないですか。龍退治の仕事料としては、悪くないんじゃないかな」

アパートがヤタガラスや小動物などの使神の群れに覆い尽くされ、部屋が百円玉で埋まるところを想像し、ゲンナリしながらも那薙は前向きな意見を述べた。

「叢雲に似せた小さな剣を作らせて、余ったら車でも買いますか。沙耶子さんに会いに行きやすくなりますね」

無事な右手で味噌汁の碗を持って口に運ぶ。食べさせてあげたくなるなど思いながら、沙耶子は昨夜から考えていたことを提案した。「食事が終わったら、回診の前に那薙さんの髪を洗っていいかな。この長さだし、その手では、自分で洗ったり乾かしたりできないでしょう」

那薙は院内の散髪室を利用するつもりだったのだが、沙耶子が「こんなきれいな髪、すぐ切るのもったいない」と嬉しそうにブラシで梳かし始めたので、つられて微笑んだ。

「すみません、さやこさん」

那薙は礼を言っと、もう一度、沙耶子の名を口の中で転がした。喉から漏れる小さな笑い声を耳にした沙耶子は、顔を上げて不思議そうな顔をした。

「どうしたんですか」

「いえ、さやこさんとは、良い名ですね」

沙耶子はきよんとする。

「那薙さんも、草薙さんと同じことを言うのねえ。やっぱり名前の好みも似るのかしら」

それを聞き、声を出して笑う那薙の意図がわからず、沙耶子も曖昧に笑い返す。

那薙は沙耶子の放つ、穏やかで温かなオーラに包まれて目を閉じた。沙耶子の指が触れたところから、温もりが沁み込んでくる。和やかな充足が胸に広がり、叢雲の閉ざされた心が、静かに癒されてゆく。

すつと、胸の鈍い痛みも、喉のつかえもなく、その名が唇から滑り出た。

「八津彦の時代を思い出します」

「そういえば、かれの髪も長かったわね。自分で梳いていたのかしら」

「側仕えの者がしていました、櫛だけでしたから、時間がかかりました」

「でしょうね。痛かったら言ってください」

那薙の胸を去来するのは、歴史のどこにも記録されていない、文字もなかったころの遠い記憶。

数十億年を重ねる地層のまどろみから、火神の炉に急激な目覚めを促された大地の精。

鋼を打ち神を求める八津彦の祈りに応えて、叢雲が地上に意思を顕した日のことを、那薙はゆっくりと思い出した。

了

第十四章 祟り神の陽だまり（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

次は後日談と、リクエストにお応えしたSSを2編お届けして、完結とさせていただきます。

明記するまでもないと思ったのですが、この物語は日本神話と歴史から作者が妄想した、まったくのフィクションであります。

実在の個人、会社、菓子製造業者、行政区、神社や神様とはまったく無関係です。

ある日の金華山 那薙と沙耶子（前書き）

後日談です。

ある日の金華山 那薙と沙耶子

「岐阜ってけっこう寒いよねえ」

岐阜市を一望する金華山ロープウエーの山頂駅に下りたとたん吹き抜けた風に、沙耶子は頬までマフラーを上げて傍らの那薙に語りかけた。一月中旬は真冬といって差し支えない。

「内陸ですからね。夏は暑く、冬は寒い」

さりげなく風上に立つ那薙だが、前後が薄く、左右が細い体軀ではあまり風除けの役割を果たしていない。

「時間があれば歩いて登ることもできたんですが」

午前中は仕事で、沙耶子に待ちぼうけをさせたことを、那薙はすまなさそうに謝った。

「歩くのは暖かくなつてからのほうがいいかも」

「そのころには夜も営業してますから、夜景が見られますしね。名古屋のツインタワーまで見えて、それはきれいです」

那薙が浮かべた、かれ独特の柔らかな微笑に、沙耶子は「誰と見たんだろう」と思ってしまった。絶景の夜景といえば、まずはデイトコースではないか。

「那薙さんはここによく来るんですか」

リス園への遊歩道を並んで歩きながら、沙耶子は慎重に訊いてみる。

「年に数回ほど。登山道がたくさんありますから、いい運動になります。稲葉城の天守閣からの眺望も素晴らしいので、忙しくて旅行できないときの気晴らしにはちょうどいいです」

沙耶子は両手で自分の頬を押さえた。『ひとりで？』とは訊かない。代わりに冷たい頬を押さえて呟いた。

「楽しみ」

リス園ではリスを相手にエサやりに興じた沙耶子と那薙は、岐阜城こと、稲葉城に入場した。

資料館の戦国武将や姫たちの肖像画や、武具などを見てまわるうちに、沙耶子は那薙がどこもなく上の空であることに気がついた。地元だし何度も来ているのだから、いまさら展示品を興味深く眺めるということはないのだろう。沙耶子が見たり読んだりしているものに反応して、解説したり、沙耶子のコメントに応じたりするが、ときおり天井のほうを見上げては、何か耳を済ませるように眼鏡の奥のまぶたが伏せがちになる。

はっとした沙耶子は那薙の左腕に両手でしがみついた。

「こういう古いお城って、気が散るんじゃないですか？」

沙耶子はなぜか改まった口調になるのを抑えられない。那薙は苦笑いを浮かべて沙耶子の瞳を覗き込んだ。

「今は何も視てませんし、聞こえてません。安心してください」「見えるときもあるの？」

那薙は黙ったまま口元だけで笑った。それが沙耶子を怖がらせることに気がついたのか、那薙は沙耶子の肩に腕を回した。伊達眼鏡を少しずらして、あたりを見回す。そして指先で眼鏡を鼻梁に押し戻した。

「ああいうのは、遺跡や文化財などとは関係なく、どこにでもいます。いちいち気にしていたら、身が持ちません」

やっぱりいろいろいるんだと沙耶子はきよろきよろと首をすくめた。

「沙耶子さん。害のあるものが城に憑いてたら、こんなに観光客が集まるわけがないでしょう。怖がらなくても大丈夫ですよ。ここにいるものは、ここを護っているものたちです」

「じゃあ、那薙さんはさつきから何を気にしてるの？」

那薙は眉を上げて、軽い驚きを込めて沙耶子を見た。それからまた口の端を上げる。

「天守閣に登りたくて気がはやってたのが、わかりましたか」

「天守閣に？」

「高いところが好きなんです。まだ、話してませんでしたね。山に

登るのもそういう理由からです」

沙耶子は安堵の微笑を返した。

「よつぽど景色がいいのね。じゃあ、先に天守閣に登りましょう。展示品は下りてくるときでも見れるし」

愛想笑いというのでもないが、つねに那薙の口元に刷かれている笑みが広がり、齒がのぞいた。目尻も下がって本当に嬉しそうに頬までゆるんだ。沙耶子は那薙の背を押して階段を上がっていく。

天守閣からの展望は確かにすばらしく、市街のその向こうの山並み、長良川の流れが霞む果てまで見渡せた。

那薙は市街の建物や、山の名前などを沙耶子に語って聞かせる。北の乗鞍岳と穂高連峰、東の木曽御嶽山と中央アルプス、南の濃尾平野と遙かなる伊勢湾。西へと視線を移した那薙は、手摺を掴んで口をつぐんだ。沙耶子は那薙がどこを眺めているのかと、那薙を見上げ、その視線を追った。

いつのまにか伊達眼鏡を外した那薙の灰色の瞳は、懐かしそうに空と地の交わるその果てを見つめている。

那薙が空に溶けてしまいそうな気がして、沙耶子は那薙の腕を手をかけ、すり寄った。

突然、与えられた体温と預けられた体重に、那薙は夢から覚めたように瞬きをしてから沙耶子の腰に手を回した。

「那薙さん、何を見てるの？」

「ここからは見えないものを」

胸の奥に貯められた息を吐くように、那薙は乾いた声でそつと呟いた。

沙耶子は驚いて問いたです。

「見えないものを見るために、天守閣に上がるのを楽しみにしてたわけ？」

那薙は首をたてにふり、再び空の果てを見つめる。沙耶子は同じ方角へ顔を向けた。

「那薙さんが見たいものって、何？」

「中国山地です」

それはさすがに見えないだろうと沙耶子は思った。那薙は岐阜城の天守閣に上がるたびに、こうして西の空を漫然と眺めるのを習慣にしているのだろうか。

那薙の細められた切れ長の眼は、伊吹山や鈴鹿の山系の遙か彼方を見つめていた。沙耶子は、那薙はひとりでここに来ることの方が多いのだろうなと想像した。

「年に一度の出雲の神議を除いて、叢雲は関の西側に足を踏み入れることが許されないのです」

「関？」

ゆっくりと語り始めた那薙は、しかしやはり説明が端折りすぎだと沙耶子は思う。

那薙は手を伸ばして遠くの山並みを指さした。

「不破の関がああたりに。西と東を隔てる関です。ぼくはあの向こうに行くことができない」

「普通に、旅行もできないの？」

「修学旅行でも、出張でも、個人旅行でも、病気や事故、不幸などがあつて行けなくなるのです。去年までその理由がわからなかったんですが。神議のない時期は、結界が張られていて叢雲は西国に入ることを許されない」

「草薙さんは？ 入れるようにしてくれないの」

「かれの権限にはないことだから、どうにもできません。出雲の神々が、迎え入れない」

「神議のときは入れるのに？」

「結界がおろされ、入ってくる神々の数が多すぎるので、もぐりこめるんですよ。草薙や他の上位の神々も降りますし、叢雲ひと柱で何ができるということもないと思うでしょう」

周囲に聞こえないように小声で話し合うために、互いの距離は顔が触れそうに近い。沙耶子は内容の色気のなさにもかかわらずとき

どきしてしまう。那薙の声が深みを増しているせいだろう。

「そうまでして、帰りたいの？」

「国津神の御魂は、その土地から生れ出ずるもので、大地に深く結びついている。土地を逐われた神は、いつまでも彷徨い続けるしかない。ましてかれの墓所も奥出雲にあるとなれば、郷愁に胸を苛まれることに終わりはない」

わずかに低さと深さを増したその声音に、沙耶子は那薙の肩に頭を預けたままうなずいた。

「いつかきつと還れるよう、私も願うから」

那薙の腕に力がこもって、沙耶子の体をやわらかく抱きしめる。

叢雲の願いが叶ってしまった場合、山陰に嫁入りということになるのだろうか。岐阜に来るのもかなり決断に迷っている沙耶子なのだ。クリスマスから数えて三回目のデートだし、付き合い始めて一ヶ月も経ってない。プロポーズなどされたわけではないのだから、まだ先のことなど考える段階でないのに、つつい考えてしまう。自分で思っていた以上に結婚願望があったのだろうか。結婚式を控えた奈津子のウェディングドレスを見せられて、一時的に刺激されているのだろうかと思う。

沙耶子としては身を落着ける前にやりたいことがいっぱいある。貯金もしておきたい。遠距離交際というのが、たぶん、いつでも会えない不安を増幅させているのかもしれない。

IT業種なら関東地方の方が給料も良いのではないかとか、沙耶子のほうがあるのなら、関東に婿入りするように言えば逆らえないのだろうと考えても見る。だが、それもなんだか那薙の意志を曲げるようできない沙耶子だった。懐かしそうに西の空を見つめる那薙の横顔。生れも育ちも大学も就職も、一度も地元を出たことがないという那薙の経歴は、できるだけ故郷の近くにいたいという叢雲の深層意識がそうさせてきたのだろうか。

冷たい風が天守閣の展望台を吹き抜け、沙耶子は身震いした。那薙は沙耶子の肩を包みこむように背中ごしに体ごと引き寄せた。触れ合う面積が多くなると、温もりが穏やかに伝わる。体の温かさに触れるたびに、沙耶子は那薙が人間であることを実感するのだ。

那薙が鼻先を沙耶子の髪にもぐりこませた。人前で濃い接近とかラブシーンみたいなものをあまりしないタイプの沙耶子はどぎまぎした。シーズンオフとはいえ、週末の天守閣には観光客も、家族連れもいる。

「ななな、那薙さん、何してるんですか」

沙耶子は赤くなりながら上向こうとする。

「癒されているのです」

「私の頭で？」

沙耶子の耳の上に、那薙の頬が押し付けられる。風で冷たくなった肌が、髪を通して感じられた。

「沙耶子さんの全てで。癒されるとは、こういうことなんですね。鎮められるのとはぜんぜん違う。人に生れてくるのも悪くないと、初めて思いました」

かすれた声と冬の風にかき消された語尾に胸が締め付けられるような気がして、沙耶子は胸の上に回された那薙の腕を両手で握った。那薙は今まで沙耶子の周りにいなかったタイプで、どうも調子が狂う。これまでの恋愛は友達の延長でざっくりと気楽な関係で付き合う展開がほとんどで、こんな風に自分を預けて寄り添うなんてなかった気がする。

まして、相手のわずかな表情の変化に一喜一憂したり、言葉の端々に胸の痛みを覚えるなんて経験も初めてだ。那薙は普段が穏やかだから、ときおりこぼれる叢雲のころろがずしりとみぞおちまで沈み込み、わけもなく涙が滲んでくる。

重い記憶は、一緒に持つって、約束したし。

『癒し』と『鎮め』がどうちがうのか沙耶子は一歩踏み入ったこ

とを訊いてみたかったが、満たされたかのように眼を閉じて静かに呼吸をしている那薙を邪魔するのも申し訳なく、沙耶子は那薙の胸に肩を預けたまま、西の空に眼をやった。

長い時間をかけて出逢ったのだから、時間をかけてゆっくりと知っていけばいいのだと思う。

ある日の金華山　那薙と沙耶子（後書き）

ほんとはなっちは大阪あたりまでは行けないこともないけど、その説明は長くなるので割愛。

東京駅から名古屋までは東海道新幹線で1時間45分。

岐阜羽島まで二時間弱。

切符代は片道一万円くらい。

時間的には茅ヶ崎と北千住に離れて住む恋人たちとあまり変わらないかもしれない。しかしなかったり。

なごみどき 那薙と草薙（前書き）

リクエストがあったので、書いてみました。

なごみどき 那薙と草薙

台所のダイニングテーブルで、春の高度情報処理技術者試験の勉強をしていた那薙は、居間から流れてくる煩雑で単調な音楽に集中力を妨げられていた。

「あつ。駄目だ。あつ、なんで、早すぎっ」

居間から聞こえる独り言に、那薙はついにペンを置いて苦情を言った。

「少しは静かにやってくれませんか」

那薙は苛立ちのあまり足元のストーブを蹴りそうになる。居間から早口で叫び返す声。

「これ難しいんだよ。どんどん速くなるんだ。ああまたっ」

バチッ。音が消え、静寂が訪れる。那薙は嫌な予感に顔を上げて、腰を浮かせた。

「あーあ」

がっかりした声に、那薙はテーブルをまわって居間へと足を踏み入れた。居間のこたつには、鋼色の髪と、肌と、瞳の色をした人間離れた美貌の草薙が、困惑顔で那薙を見上げていた。

その草薙の容姿に、薄碧色のセーター、ジーンズがまったく似合わない。那薙は草薙の両手の中にあるものをみて、眉間に皺を寄せた。目を細め、胸の前で腕を組んで、ぐっと肩を反らす。

「また壊したんですか。三台目ですよ。もう買ってあげません」

「レベルの上がるのが早すぎるんだよ。もう少しゆっくり進むものがないのかな。第一、これは画面が小さすぎる。そっちの」

くるっと体の向きを変えてこたつから這い出し、寝室側の壁際に並んだ三台のPCに手を伸ばそうとする草薙の肩を那薙は慌てて押さえた。

「PCに触らないで下さい。I podとは比べ物にならないほど高いんです」

那薙は、首だけねじって振り返った草薙の眼を睨みつけた。草薙は悪びれもしない様子で言い返す。

「三つもあるんだから、ひとつくらい大丈夫じゃないか。壊れたら弁償するし」

「全部用途が違いますし、壊されたくないデーターもありますから駄目です。第一、前にこわしたI p o dの代金もらってませんし。小銭ばかりで払われるのはゴメンです」

「まったく叢雲は小さいことにこだわるなあ」

「あなたも人間になってみればわかりますよ」

コタツの上に放り出されたI p o dの黒いスクリーンを見つめた那薙は、肩を落とした。

「こんどはゴム手袋を用意しておきます」

「そんなものはめてゲームなんか、細かい操作ができないじゃないか」

「どうしてもコンピュータゲームをしたければ、君には絶縁体が必要です。興奮するたびに放電されたら、うちにある電気製品がみんなイカれてしまうじゃないですか」

「このわたしを電気鰻かなにかみたいに言うのはやめてくれないかな」

「じゃあところかまわず放電するのをやめてください」

那薙は台所に戻って湯を沸かした。はああ、と深い溜め息をつく。アパートの部屋に神棚をつくり、依り代の神楽鈴を納めて以来、やたらに入り浸るようになった某大手神社の祭神である草薙のおかげで試験勉強がはかどらない。那薙は投げやりな気分で参考書を閉じてお茶を入れる。

「いつきても難しそうなものを読んでるけど、何を学んでいるんだ」
台所についてきた草薙が、興味津々で取り上げたネットワークスペシヤリスト試験の問題集をぱらぱらとめくった。那薙はテーブルの上の新品ネットブックを引き寄せて草薙の手の届かないところに置いた。

「外国語みたいだな」

「似たようなものです」

「菅公に合格するように頼んでおけばいいじゃないか」

「高校や大学の入学試験と違うんですよ。国家試験で実力の伴わない裏口合格をしても、あとで苦労するだけでしょう」

「国の定めた試験なのか。合格するといいいことがあるのか」

「月給が少し上がります」

「どのくらい」

「三千円ほど」

草薙の金属質な顔から表情が消えて、やがて困ったような、笑い出しそうな顔になる。それから積み上げられた問題集や、参考書、教本を流し見て口元と頬が笑いでゆがみそうになった。那薙はその顔を見て不機嫌になる。

「何が可笑しいんですか」

「いや、だって、あなた。崇り神と言われた人が……」

「人間は人の祈りだけでは生きていけませんからね。家賃も光熱費も食費もかかりますし」

那薙はちよつと怒っているのではないかという口調になる。

「だったらもつと割りの良い仕事があるよ。大阪のほうだけどね、タチの悪い妖に住み着かれて困っているお宮があるんだけど……」

「断わります」

那薙は即座に拒否したので草薙は残念そうに首を傾げた。

「こんどはちゃんとお札で謝礼を用意させるよ」

「そういう問題じゃありません。ぼくは平穩に人間として暮らしたいんです」

「でも、交感する相手もなくて靈力を使わずにいると溜まって苛々するだろう」

「運動すればいいことです」

こんどは草薙の方が嘆息して、両手を那薙の肩に回した。

「どうしていつまでもわたしたちは平行線なんだろうね。寂しいよ」

しおらしい声で耳元で囁かれた那薙は、少し眉の端が下がりそうになった。

「ところで、どこまでレベルが上がったんですか」

「17」

「たいしたもんじゃないですか」

「20までもう少し」

「あと一台だけ買ってあげますが、これで最後ですよ」

「うん。叢雲とメールするのは面白いから、大事にするよ」

「本当に、壊しませんね？」

「壊さない」

背筋を伸ばした草薙は、につこり笑って右手を上げた。

「いつ買ってきてくれるんだ」

「今度の週末に」

「じゃあ、その頃来るよ」

言うなり那薙の肩にかかっていた重力がふっと消え、草薙の姿も煙のように消え失せた。眼を丸くしてテーブルの上に残された神楽鈴をしばらく見つめていた那薙は、背中を丸めて腹の底から溜め息をついた。

「テトリスにはまる神って、なんなんですか」

あとがき

まろつと封神記を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

書いていて楽しかったのは、神様たちがそれぞれの方言でしゃべってくれたらどんなに面白いだろうか、ということです。

辰子さんが出羽弁

八郎さんが津軽弁

草薙が名古屋弁

叢雲が出雲弁、

ついでに那薙が岐阜弁で話していたら……

意思の疎通は不可能ですかね。

でもみゃーみゃー言ってる草薙とか、作者的に萌え悶えるですが。

「おみゃー、けたでいりゃあせ」とか

(意味：あなた、自転車で来なさい)

明日から、姉妹編「十一月は神在月」の連載を始めます。

こちらはシリ阿斯で微ホラーなのですが、よろしくご愛読のほど、
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5340v/>

まろうど封神記－みたまのふゆー

2011年10月2日03時34分発行